

---

**ココをクリックしてください。 ~ 赤バラ畑でつかまえて! ~**

露草 秘色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ココをクリックしてください。　　〜赤バラ畑でつかまえて〜

### 【Nコード】

N1774N

### 【作者名】

露草 秘色

### 【あらすじ】

この物語は、主人公とその他仲間たちが力を合わせ、バラとの壮絶な戦いを繰り広げる冒険譚である。……とか、丸つきりウソです。実態は作者が日ごろのストレス解消のために、バカ笑いしながら書き綴った、愉快的シリアスコメディー（？新用語誕生？）です。読んだら意味が分からないこと受け合い！時々キレなくなるけれど、根気のある方！よかつたら自分の我慢強さをテストしていませんか？ちなみに十話を越えられたら神です。

## 巻ノ一 はじまり（前書き）

注：この小説は、作者が二匹います。しかも、欲望のままに書き綴っているため、はつきり言って滅茶苦茶です。

急にお笑いになったり、いきなりシリアスモードに入ったりします。

感想の批判などは受け付けますが、苦手な方は戻るボタンをカチッとお願いします。

また、作者達は寂しがり屋なので、お気に入り登録がずっと0だったり、感想が全くこなかったりすると鳴きます…じゃない泣きます。思い余って自分で感想を送る可能性があるので、どうか私たちを救ってください。

長くなってしまうましたが最後に。

私達は両方とも、当サイトで別の執筆活動に勤しんでいます。（一応ファンタジー系の）滅茶苦茶暇で死にそうな時は、どうぞ作者当てごっこでもしてみてください。

当てた方はデイズニー旅行！とか冗談です。

## 巻ノ一 はじまり

ある所に、それはそれは美しい一輪のバラが咲いていました。そこにはたくさんのバラが咲いていて、とても綺麗な場所でした。なのでとある青年は、一番気に入ったバラの花を摘んでしまいました。

それはとてもいけないことなのに……です。

そうして、全てが始まったのです。

今しがたまで晴れ渡っていた空に、突然どす黒い雨雲が集い始めた。

「降るかなあ……」

少女がぼんやり空を見上げていると、ポツンと何かが額にぶつかる。

「え……？尻野アナは降らないっていったのに！」

二次元と三次元の区別のつかない危ない主人公は、うきゃあああと奇声をあげた。

聞いてないよおと叫び、半泣きで家に駆ける。顔面が汚いので、とても悲惨な絵図らになった。片手には犬のひも持っていて、ぶるぶると体を震わせながら、ペットの柴犬がついてきている。ベタにも出会いを求めて近所の子供から強奪してきた所だ。

先ほどまで、全力で逃げようとしていたはずの愛犬レイ（ただいめ命名）は、急にぶちぎれたように走りだした。

始めは必死で追いかけて可愛い女の子を演出していたが、走ったせいでせつかくの裸エプロンがどろどろになりかけた時、少女はそれを断念した。

「ストップ！！ウエイトプリーズ！わたしは追いかけるより追いかけていたい女なの！」

犬によく分からないことを語りかける14歳……。急停止するとバランスが崩れ、水たまりにダイブした。彼女にはお似合いだ。

「ワン！」

「ふん、バカな野郎だぜ」そう言いたげな、極限まで見下した態度でレイは鳴いた。少女はふぎゃあああと髪を逆立て、レイを驚掴みにしつつビルに飛び込んだ。

ビルと言っても、そこはああ……ほらボタンとかあって、ドアとかのあるオートロックの外側のような所で、おそらく迷惑極まりないことだろう。まあ彼女は存在自体が迷惑だが。公共の福祉のために殺しても文句は言われまい。

「ううゝホントに降ってるよゝ尻野アナめ、こゝなったらわたしが江戸の町を守るわ！」

もう意味不明である。変質者と誘拐された犬ではつつこむ人員がない。いても人事不詳になることは間違いない。

……雨粒が地面に落ちて、砕け散る音が耳を満たした。つんと鼻につく雨独特の香りが気分を下へ下へと引っ張っていく。とか、真面目な文章が混じると妙な違和感。

少女はぶるりと震えた。レイも驚く勢いだ。床が水浸しになりそこにあった機械が、ふしゅーと音をたてて弾けた。……ただの水なのに。

レイが本気で怯えて、逆らうのをやめた。

そこでしばらく時を過ごした。

10分ほど経つたろうか？雨はやむ様子どころか弱まる兆しもない。さすがに監視カメラ相手にコンサートをやるのも飽きて、少女は床に転がった。腹が減ったのか涎が垂れている。レイは隅っこで震えていた。

「もういい。走って帰るよ帰ればいいんだろうコラ」

誰に対して言っているのかは不明である。少女はレイを抱き上げ、思い切つてビルを出た。雨足は先ほどよりも強く、うんざりするが、深く考える暇もなく走り出した。

薄い生地のはきは、ぴったり肌に吸いつき、濡れた髪が顔に落ちてきた。なんだかエロい感じになっている…。だがなんか汚いのがこの少女である。誰だつて捨てられてカビたコッペパンが、すけすけエプロンを着ていてもそそられないだろう。

雨脚は弱まらない。なぜか局所的に強い気までした。とっさに目を瞑って走る。もともと、雨で悪かった視界だ、そう大差ない。

(この辺で左に行つて…そろそろ)

何度かひき殺されそうになりながらも、記憶を辿って進み続け、脳内地図では家(防空壕)辺りに来た頃。少女はそつと目を開き、絶句した。

そこには、広大なバラの花畑がひろがっていた。

「……………」

滴が濡れて撓った髪からゆっくりと頬をつたう。顎まで来た所で満開のバラの花びらにポタリと落ちた。

取りあえず自分の頬をつねってみる。夢じゃないと確信した時大きく目を見開いた。

「ゑゑゑゑー!? 本気!? ここなんのテーマパークだよ!!! スペースマウンテンはどこだー!? つてそれディニーじゃん!!!」

(ノリつつこみだ…)

レイは犬ながら呆れた。錯乱する飼い主になす術がない。

「と、とにかく前へ進もう…」

少女はレイをつれて前進する。と、そこに。

『チャンチャンチャンチャン チャンチャンチャン』

軽快でコミカルなリズムが辺りに流れる。

「ん? この曲はまさか…」

『ぼくらのクラスのリーダーは』

懐かしいおなじみの曲が流れ、少女は一瞬心が緩んだ。

『やあ!!! クッキーモンスターだよー!!!』

「……………」

予想もしていない人物のお出ましにより数泊の沈黙。

「ってアホかあああー!!! なんでディニーマーチでクッキーモンスターやねん! USSJかよ!!!」

(盛大につつこんだ…)

レイは犬ながら呆れた。(2回目)

「でもクッキーモンスターでもあえて感激!!! サインくれ…」

空気の読めない少女はなれなれしくもエルモに抱きつく。エルモは

汚いモノを見るような視線で少女を睨んだが、構わず首を横に振る。  
『NO、NO、今日はサインはナシね〜』  
「え〜くれないの〜どケチのおたんこなす！クーラーに顔突っ込み  
せるぞ」

エルモは「精神科病院に行った方がいいのでは」という言葉を飲み  
込み、改めて少女を観察する。

『お前、うまそうだな』  
「え？」

次の瞬間。エルモの毛深い手が少女の丹田を捕えました！！  
「?…!!…!!…?」

視界がハッキリとしなくなり、すぐに暗闇の世界へと陥る。

『フ…フフ…アハハハハハ!!…!』

紅いバラの海の中で、エルモは気絶した少女を見下ろしながら笑い  
続けた。



## 巻ノ一 はじまり（後書き）

……どうでしたか？

「うわぁ、とか、うげえ」とか思う方がほとんどでしたと思われませんが、この小説はまだ序奏にすぎません。これからますます変態に……いや、盛り上がっていくので少しでも「うわぁ、面白い小説だなあ！」と思われた数少ない貴重な読者様は次の話も呼んでくださるとありがたいです。

また、感想などがおくられてくると2人でお祭り騒ぎです。

どうか、私達を救ってください。

まだまだ書き殴りたい……じゃなく、書き記したいことが山ほどあります。ただでさえ変態な小説なので後書きも変態では……と思い、ここで失礼させていただきます。

次回はさらにこゆい（？）新キャラも登場する予定なのでお楽しみに！

それでは

## 巻ノ二 出会い

窓からさす陽光の眩しさに、少女は目を覚ました。（ここで黄色い  
歓声 byわたし）

「ん？朝…てかイッタッ！」

寝ぼけながら起き上がろうとすると、腹の辺りに鈍い痛みが走った。  
声を上げてそこをさすると、何だか意味不明な記憶が色々蘇ってくる…。（何よりもコイツが意味不明だ）

近所の子供から犬を強奪したり、監視カメラ相手に東京ドームコン  
サートをしたり、車にひかれかけたり…というか、ミッキーマウス  
マーチやらエルモを名乗るヘンタイやら…。

「そつえば、ここはどこ？」

少女は今さら、ここが自宅でないことに気付いた。なにせ自宅は防  
空壕だ。ベッドなど固めた粘土の枕しかない。どろまみれだった服  
（そもそも自前は裸エプロンだった）は白いワンピースのような服  
に変わっていて、ほのかにバラのよい香りがした。でも顔面は下水  
道だ。

今しがたまで眠っていたベッドもなめらかなシルクらしき肌触りで、  
ものつつつすごく高そうだ。首相官邸に強盗に入った時に以来の高  
級感である。

下品にきよろきよろ辺りを見渡せば、大きな宝石の埋め込まれたテ  
ーブルやイスが品よくおかれ、テーブルの上には細かな彫刻のされ  
た花瓶があり、青いバラが飾られていた。これを売れば、防空壕に  
掛け軸を飾れるだろうか？

他にもドレスを着てバラ畑の中でほほ笑む女性の絵や、丸い鏡、オルゴール、たくさんの小物。色々ありすぎて目移りしてしまう。どれが一番売れるかで。

けれど美術館のようなこの部屋の中で、ひとときわ少女の心を掴んだのはそのどれでもない。テーブルの上に置かれた、1つの懐中時計だった。

「うわあ…キレイ。あたしが」

やっぱり意味不明。だが確かん綺麗な懐中時計だった。色は、水晶のような透明な白。他の装飾品のように宝石などはついていなかったが、陽光を浴びて輝く姿はどれよりも美しかった。角度が変わるたびに、色も変わる。どう考えても少女の薄汚れた小汚い手で触れていいものではない。しかし彼女の毒牙がそれに襲いかかっていく。なぜだか、表情が虚ろになった。

その瞬間。

ガチャリとノブが回り、青年が1人入ってきた。少女が涎を正す美青年だ。背が高い。多分あと三秒で舐めまわす。

「おや？失礼、お目覚めだとは気付かず…」

ピシリとしたスーツのようなものに身を包んだ青年は一礼して少女に近づく。燕尾服だ。コスプレだ…と涎度が五割増しになる。もはやベッドの下半身部分はずぶぬれ。ノビ太君も絶句である。

「痛みはありますか？」

あまりにノーマルな言葉すぎて少女は意味が分からなかった。が、彼の視線が腹部に向けられているのに気付きとりあえず頷く。つまりわたしの身体がみたいのね  
青年が恭しく頭を下げた。

「それは失礼致しました……彼等クッキーモンスター一族は時に我々の理解の範疇を超えますので……あなた様をエルモに迎えに行かせたのは間違いでした。ですが、情けなくも、ただ今屋敷にいるものの中で一番戦力になりえるのはエルモだったもので」

「おつとおおお、きたつきたよ二次元！リリカルなのはわたしよおおおおお」

作者は切実に誰か止めてあげてほしい。

しかし青年は無表情に淡々と話しを進めてしまう。

「申し遅れました。わたくしは、屋敷で執事を務めております。ユージンと申します」

少女はここにきて、やっと彼が外人なのに気付いた。碧眼である。確認して鼻水まで出てくる。

今夜のおかずは彼に眠るとしよう。いい夢が見れそうだ。いや、いっそ現実には！

そんなことを考え内心ウゲヘししながらも、少女はいまさら可愛い女の子を演じてみることにした。本当にいまさらなうえ、何度も言うが顔面は崩壊している。

「どうも、私は立花佳奈たちばなかなです。え〜と……ちなみにここはどこですかあ？」

ピースをしながらきゅぴきゅぴするが、ユージンは全く表情を変え

ずに答える。むしろ恐ろしすぎて表情が固まったのかもしれない。

「クレスティア王国。リドウォール領のリドウォール伯爵邸でございます」

「りどうおーる？」

佳奈は目を丸くして、硬直した。どこだそれは、初めて聞いたぞ。

（ちなみに佳奈は日本とアメリカしか分からない。社会は1だ）

つか伯爵って言ったよ？ヤバイ、マジでファンタジーだ。主人公だよわたし！リリカルだああああああ。（ちなみに作者は某リリカルな話を読んだことがない）

うへへっとかなりキモイどころじゃない佳奈に後ずさりつつ、ユージンは生真面目に話しを続ける。冷や汗は見間違いではないだろう。

「はいリドウォール伯爵の治める領地でございます。この屋敷はリドウォール卿の持ち物であり、カナ様をお助けになるようご命令なさったのも主でございます」

「佳奈様！」

助けられたというより、攻撃されたぞと思ったがどうでもいい。美青年に「様」付けされたのだ！

佳奈は落ち着けと自分に言い聞かせ…たはずがない。涎を垂らすだけだ。だが…まあとりあえずどうしてここに連れてきたのか聞こうとした。

口を開こうとしたその瞬間、甘いバラの香りが鼻腔をくすぐる。

「え？わたしを美化するためのオプション？やあだああ！わたしそんなのなくても全然綺麗なのに！」

佳奈は鏡を見たことがないのか、目玉が腐っているのかもしれない。

グウグフと辺りを見回すが、あるのはテーブル上の青いバラのみだ。見るとユージンも無表情のまま辺りを見ていた。佳奈の魅力で悩殺ね

「バラの香りでございますね……」

全くもって常識人である。常識人過ぎて、かなから見ればすごい変人であるが、佳奈はそんなの超越しているので気付かない。それは始め、ひどく優美に匂っていたが、ふいに濃度がます。(普通の文章かいちゃった……！)  
甘ったるくて気持ちが悪くなるほどに香りはまし、佳奈は頭痛がした。

「キヤ

！……」

そこに響いたのは、まるで絹を裂くような女性の叫び、とっさに窓から見れば屋敷の庭の辺りから煙が出ている。佳奈をさらいに来た悪の組織ね

…妄想は、止まらない。

「だれかー！！助けてー！！！」

2回目の女性の叫び声。

そして、佳奈の頭の上にはpestionマークが3つ…。

「え……と……?」

なにが起こっているのかな?と、ユージンに聞こうと振り返ったが、そこに彼の姿はない。

どんだけ行動がすばやいねん、と1人でツツコンだ佳奈だったがさすがに1人だとむなしくなってきたのでやめる。

…とりあえず、今の状態を整理すると……。

？燃え盛る炎。

？二酸化炭素が出まくっている。

？すぐくマズイ状態。

そのまま、しばらく硬直したままの佳奈を、部屋にあつた火災警報器の高らかな音が目覚めさせた。

『ピーツ、火事です。火事です。家事です。あつ…間違えた』

「えつ…マジで！？マジで火災！？」

佳奈は慌ててベッドから飛び降りる。反動で顔面から落ちた。

とにかく逃げなきゃ！！と思う佳奈のすぐ隣で火の手があがった。

少し足が溶けたが気にしない。

「ひ、火ひっ！？」

赤いバラ色の炎は、カーテン、ベッド、テーブル、と次々に部屋を飲みこんでゆく。時折物が燃えるパチツという音がし、佳奈は顔をしかめる。

「??つ…くさつ！！けむっ！！」

佳奈は、激しくせき込んだ。ぜんそく持ちには辛い状況である。だが、煙は一向に晴れず今度はひどい眩暈までしてきた。

と、その時　。

「エルモ！？」

火の海の中から突然、エルモが現れた。炎の中で見たエルモは顔に光があたっており、何だかりりしく見える。ドキン…

「やったー！！助けにきてくれたんだ！！ありがとー」

と、その時。エルモの毛深い手が佳奈の丹田を捕えました！！  
「？……ま……た……このパターン……か……よ……」

視界が閉ざされ何もかもが闇に包まれた。

・ : \* : ・

窓からさす陽光の眩しさに佳奈は目を覚ました。

「ん？朝……てかイツタツ！」

寝ぼけながら起き上がるうとすると、腹の辺りに鈍い痛みが走る。  
声を上げてそこをさすると、何だか意味不明な記憶が色々蘇ってきた。

ユージンとかいう執事さん……クレスティアとかっていう王国……女の人の叫び声……炎……火災警報器……。

「お目覚めですか。」

「わあっ！！！」

佳奈は驚きのあまり跳ね上がった。

と、いうのもあの、ユージンという執事がいきなり顔を覗き込んできたからだ。

「先ほどはまことに失礼致しました。？エルモ族？は獰猛な民族です……」

何かそのセリフってデジャヴだなくと思いつつも佳奈はユージンの話しを素直に聞き流す。

「炎は私どもがくい止めましたので、どうぞ、ご安心の上」

「ん？今、？私ども？って言ったよね。この屋敷ほかに誰がいるの？」

「ええ。もちろんです。私、エルモ族の人々、それに？千人同心？」



も」

「はあ？千人同心？佳奈は首を傾げた。

「ご存じありませんか？千人同心とは、江戸幕府直属の郷土集団でして…」

「今は平成です」

「いいえ、それは違います。カナ様。今は…平成ではなく…それどころかここはカナ様の住む地球でもないのです。」

「ちっ…地球でもないって…それってパラレルワールドってことお！？」

「……んゝまあそのようなものですね。」

疲れを取るために、紅茶でもいただきますか？と言って、ユージンは席を立った。

そして佳奈は1人残された。

額をそつと手で押さえて豪華絢爛なオーラ漂うベットに腰を下ろす。

「私…雨が降ってて、目を瞑ったまま家に帰ろうと…でもそうしたらなぜかこのクレスティアっていう国に辿りついて…」

必死に記憶を辿る佳奈。何か心に引っかかるものがあつたのだ。

「何か…何か忘れているような…」

と、その時、ドアが勢いよく開く。

ユージンと思つた佳奈だったが…次の瞬間、体が押し倒される。

「な…何っ！？ユージンってそういう趣味！？」

慌てて上を見上げると…。

「レ、レイ！！！！」

## 巻ノ二 出会い（後書き）

はい。こんな感じで第二話です。

どうでもいいですけど、サブタイトルが和風なのは洒落ですよ洒落。

超どうでもいいかと思ったそこのあなた。そんな冷たいこと言わずに、もっと暖かい目で見守ってください！！

まあ、そんなこんな次回もこんな感じで続きます。

### 巻ノ三 平行世界

「お前！すっかり忘れてたぞ！たくっ！完全なるサブキャラだなあ」  
佳奈はレイとの再開の抱擁をすませ、ジャレ合いをしていた。（佳奈が一方的に乙女を意識しているだけである）レイは不安そうに尻尾をまきこんで後ずさっているが、佳奈は涎を垂らすばかりで全く気づいていない。今にもぱっくりいかれてしまいそうである。早めにそうしてもらった方が幸せな気もするが。

ふと見上げればユージンが複雑そうな表情でこちらを見ている。

紅茶はまだ持ってきていないらしい。腹が減った佳奈は、かなりイラついてこいつ丸飲みにしてやるうかと思っただが、見た目がいいので勘弁してやった。まあ後で絶対おいしく頂いてやるけれど…ゲへへ。

ジ…………。

熱い視線だ。

佳奈の魅力でICHIKOROね

ジ…………。

何だか物凄く物言いたげな様子のユージンに、佳奈は（彼女の考える）可愛く握った両手を口元に当てた。+上目使い。最高のきもさだ。

「えええ　とユージン？あの…あたし…すっごく気まずいんですけど…………」

「それは失礼致しました『お前の顔が失礼だよ』…………しかし」

いつも通り無表情だが、途中でぼそつと何かを言った。が、佳奈の耳は死滅しているのでよく聞き取れなかった。佳奈は「わたしへの賛辞に決まっているわ」と、喜々として目をきらきらさせる。

「しかし？」

わくわくした様子でおうむ返しに聞くと、青ざめた顔とぼそりとした返事が返ってくる。

「……………どんな生き物でも愛で愛を注ぐお心には感服致します。……………ただ、食糧とふれあわれるのは如何なものかと……………情が移ると、後々面倒でございましょう？」

「はっ？食糧？」

佳奈は、たつぷり3泊考え込んで、謎の叫び声を上げた。きっとこれは、ブラジルの人にも届いたはずだという奇声。これのよって一時間で4・6という種の絶滅速度が、倍にまで跳ね上がった。地球の異常は半分ぐらい佳奈のせいかもしれない。

「何？この人たち犬食べるの？昔の中国人ですか！！生類憐みの令だぞオラッ！！徳川なめんなよ！！！」

意味不明なことを口走り、佳奈は半狂乱になっていた。ただし今回は佳奈の言葉もただし。明日は太陽が落つこちてきて、太平洋が干上がるかもしれない。ちなみに佳奈は太平洋を知らない。

今度は蒼白で戸惑うユージンを意にも介さず、「家康〱家光家光いえつちやーん。余は男狂いじゃーあははははー」などと言い続けているので、思わず彼はいまのうちに逃げようかと考えてしまった。でもとりあえず、職務には忠実な彼は寿命を半分くらい捨ててここに残った。

「イヌとは何でございましょうか？」

「は？今あなたが食べるとかほざいた我が家のカワイイ、レイコちやんだよ！」

全く空気が読めない佳奈が、びしりとレイを指さすと、怯えた様子でユージンの影に隠れていった。もはやどっちが食べようとしていたのか分からない。というかいつの間にも「我が家の」などという恐ろしい形容詞がつけられたのだらうか。というか作者は形容詞がどういうものかよくわかっていない。

その哀れな子羊<sup>レイ</sup>を守ってやらなければと思ったのだらう。ユージンは意を決したように、レイを庇う位置に立った。

「なるほど。カナ様の世界では犬というのですね……価値観も随分違うようです」

何いってるんだ（佳奈に思われたもう終わりかもしれない）と思いながら、佳奈はレイを抱きあげようとする。ユージンも頑張って守ろうとするが、彼女の穢れた手はワープしてレイを捕まえた。瞬間レイは泡を吹いて倒れた。ユージンはレイを救うためにも、彼女を刺激しない言葉を慎重に選んだ。

「そう警戒なさらなくてください」

「やーだ。だってせっかく男の子とお近づきになるためにクスネテきたのに！」

佳奈はぶつくさされた。もうくすねたと言っちゃってるがユージンはつつこめず、一歩後ろに下がっただけだった。彼はそこで目をそらして、まるで決死隊の隊員にでも選ばれたように決意の滲む精悍な顔をした。

「先ほどの話しの続きをさせていただきます」

なんと佳奈と長時間話をしようというのだ！彼は真の勇者に違いない。一方佳奈は渋々頷いて、近くにあったイスに腰を下ろした。腕の中でレイがビクツ痙攣したが、佳奈は全く気にしない。

「あなたも座れば？」

「いえ、そういうわけにはまいりません」人としての尊厳のために」

佳奈の魅力にくらくらきちゃって、近寄ることもできないのね妄想は膨らむ。彼の独り言が増える。なんとか自我を保とうという意地なのである。

「長くなるかもしれませんが、少々お待ちを」

ユージンは深呼吸しながら部屋を去り、今度こそ盆を持って戻ってきた。なんとか落ち付くために1人になったらいい。よく佳奈のもとに戻ってきたものだ。彼には国民栄誉賞を贈るべきだろう。コトリと3段重ねの皿が置かれる。キュウリのサンドイッチ、スコーン、ケーキ、どれも美味しそうだ。

佳奈がそれを眺めていると、目の前にカップが置かれる。どうやら佳奈の注意を食べ物にそらすという奇策に打って出たらしい。

透き通るような美しい茶色の紅茶は、窓からさう陽光に反射して煌めきながらカップの中に零れ落ちていく。（なんとなく普通の文章を書いてみたくなりました）

涎を垂らす佳奈を全身全霊で無視して、ユージンは手際よくミルクやレモンを並べていった。たんに早く逃げたい一心だろうが。

よくみるとその中に『味の素』と書かれた袋があるが、用途は不明。  
…もちろん佳奈はあんまり気にしない。

「味の素グループは世界を越えたわけね」

とりあえずつつこんではみたらしい。佳奈は家族（ご想像にお任せ  
します）のお土産にすることに決め、髪の毛の中に突っ込んだ。ユ  
ージンは無干渉を決め込んだらしい。ベストな選択だ。

「お召し上がりになりながらお聞きください」こつちチラとでも見  
たら絶対泣くからな」

佳奈はすでにサンドイッチを摘まみながら頷いた。その反動で中の  
キュウリがポロリと落ちる。

佳奈は慌ててそれを摘まみあげた。

「セーフ：3秒ルールだもんね」

ユージンは何も言わなかったが、落ちた物を喰うのがダメだと知っ  
ていることに果てしなく驚いた。

「先ほどカナ様はここがパラレルワールドなのかとお聞きになりま  
した。結果だけを言えばYESです」

「はあ」

佳奈は曖昧に頷く。言ったことをもはや覚えていないのである。佳  
奈の脳みそのキャパは雀ほどもない。

「世界には、いくつもの空間が並行して存在しています。カナ様の  
言葉で言う並行世界パラレルワールドですね。しかし、本来カナ様の住む78番目の

世界から、ここ34番目の世界に来ることはできません。いえ、7番目の世界からは、他のどの世界へ行くことも不可能なのです」「なんでえ?」

よくわからないくせ問い返す佳奈。これは「男に良い顔をする」という佳奈の特性である。テストに出るのでメモっておくように。

「簡単なことです。パラレルワールド全てを合わせてこの世界は全空間といわれますが……これを大きな屋敷か城だとお考えください」

佳奈はコクリと頷く。もちろんそれには意味などない。ケーキを皿ごと喰ってケタケタ笑っているだけだ。でもユージンは構わない。彼に必要なのは、説明したという事実のみなのだ。さっさとこいつの元から逃げようと誓い、早口言葉が始まる。

「1つの世界は、部屋です。通常、部屋には扉がいくつかあり、他の部屋へと行くことができますね。それと同じで世界から世界へと渡ることが可能です。ただ78番目は別です。理由は分かりませんが、そこだけは1つの扉も存在せず、完全に孤立しており、自身の世界から出ることはできません。たとえに戻ります。たとえば、扉がなかったとしても部屋と部屋の間になaturally広い空間があれば、そこに何か空間があることは分かりますよね?78番目の世界は、そのように存在は確かでも、だれにも確かめられない世界として『幻の世界』と呼ばれて長い間研究されてきたのですが外から入れないのだから、中の人を外に出たことがなくても当然といえば当然ですね。おそらく、そういった経緯でカナ様は戸惑われておられるのでしょうか」

「この皿甘くてうまい」

もはや「男に良い顔」もしない佳奈に、ユージンは勝ち誇ったよう



に笑んで捲し立てる。

「ちなみに34、78などの数は世界のできた順番です。ですからこの世界は34番目に、カナ様の世界は78番目にできたことを意味しています。世界は無数に存在します。全てを把握することはできませんが最低でも500はあると思われれます。しかし、全てが重なっているわけではございません。いや、重なってはいます。なんというのでしょうか……」

ちよつと困った様子のユージンは、ふいに顔を上げぱんつと手を打った。

皿をしゅぶつっていた佳奈は、それを詰まらせそうになる。なんと、佳奈が普通に驚いたのだ！まあなんせ空の上にいるのだから。ユージンは無表情のままである。なんと彼は説明がめんどくさいところを強硬突破しようとしているのだ！

「ご安心ください。落ちる事はありませんから。これは別の世界を覗いて、たまたまそこが空だっただけです。先ほどの私の話で言う、繋がっていない部屋ですね。こうやって移動することはできるので……今、私たちは精神体ですので、この世界に干渉することはできません。ちなみに、部屋が遠くなるほど　つまり、中継の世界が多くなればなるほど、関わりは薄れます」

佳奈は落ちる心配などしていなかったが、5教科の内心は全部1なんだよねーとか呟いた。バカだということ伝えてようとしているのだが、ユージンには意味が分からない。しかもそんなことは全人類が知っている。

「自分のいる部屋から、隣の部屋に行くのは直接いくことができますね？けれど3つ隣に行きたいのなら、2つ部屋を横切らなくては

いけません。そういうことです」

「へー」

とかいいつつも、欠片も話分からない。ユージンも求めていない。彼はさっさと手を打った。元の場所に戻っている。

「分かりましたか？こんなふうに、世界を移れるのですが、そこにあると知っていても行けない場所があるのです。自らの手の表面を触れても、中の骨や肉には触れられないし見られない……そういうことです」

「うげっ」

嫌な表現するなよと、そこだけ理解して呻く。お前の顔が嫌なものである。さっき突き落として空中分解させたかったと本気で思うユージンである。

「というわけですが、私たちはどうしてもカナ様にお越しいただきたかった。いえ、というよりは？本当はこちらの住人？という方が分かりやすいでしょうか」

「はっ？どづいづこと？」

聞き捨てならぬぞ、と迫る佳奈にユージンはのけぞる。今の言葉もおぞましそうに口にしていた。ユージンは吐き気を堪えながらよろよろと後退していく。

「私が知っているのはここまでです。私は主に言われカナ様をお迎えしただけですから」

「なら…なんだっけ？ほら！その主に会わせなさいよ。てか良い男？」

「リドウォール卿でございますか？主は今出ております』てめえに比べりゃ全人類が超絶美貌だろうよ』」

「どこに！いつ帰ってくるの！てか自分で連れてきたんじゃない！リドウオールだかウオーターライターだかオイルシヨックでもなんでもいいけど。良い男なら早く会わせなさいよ舐めさせなさいよ頂かせなさいよ！」

ユージンは主の危機に怯えて、震えていた。もはや最初のキャラが崩壊している。可哀そうに。他の作者さんに書いてもらえれば、冷静沈着な美形執事だったのに。

そこでユージンに救いの手が差し伸べられる。いきなり窓が割れて炎が飛び込んできたのだ！会話はここで途切れるのである！ユージンは神に深く感謝した。

一方その炎は。

『お前……なぜ今さら戻ってきた！！』

「は？」

喋る炎に興味津津な佳奈に炎が突っ込む。レイがそのすきに命からがら逃げ出した。

「うそ」

眩いた佳奈の視界が炎で染まる、目も閉じれずにそれを見つめた佳奈の前で、突然炎が散った。何かが壁にぶつかって跳ねたようにも見えた。

『くそっ！……いつか、いつかかならず……この恨みを……』

炎が舞う。それが消える直前に黒いバラの花びらに変わった。無数のバラが佳奈に降りかかる。

「黒いバラ……花言葉は？いつかあなたを殺しに行きます？ですね」  
ユージンの静かな声は、妙に部屋に響いた。（宣誓！こんなちゃんとした所もないと、さすがに長期連載は難しいなと作者は思います）  
「な、なに？私なんかしたっけ？家庭のある方に手なんか出してないよ??……あ、でもまって。この前の援助交際の人は既婚者だったかも」

佳奈はユージンの清潔な執事服の裾を握った。

「クッキーモンスター!!」

ユージンはいきなり指をならし、その場でくるくると回転する。と同時にエルモが部屋の出入り口から飛び出てくる。

「あつ！エルモ！！ねえ教えて！！なにが起こっているの……」  
その瞬間、エルモの毛深い拳が佳奈のどてっ腹にヒッ！ッ！

「に……2度あるこ……とは……3度ある……って本……当……だな……」  
目の前が、闇に塗りつぶされた。

### 巻ノ三 平行世界（後書き）

うふふふふふ。

作者は壊れました。もう気にしないでやってください。

これからも存分に壊れる気ですので、読む方もかなり心構えが必要です。

次回、なぜか佳奈が移動します。

## 巻ノ四 ナルシスト

窓からさす陽光の眩しさに佳奈は目を覚ました。

「つてくどいわぁーっ！この表現3回目！」

一人でツツコム悲しさを覚えながらもとりあえず起き上がる。貧血で倒れたがきちんと輸血してもらったので安心だ。誰にだ！？今回の佳奈は割と早く目覚めた。3回目だから免疫がついてしまったのかもしれない。

だが 目の前に広がる景色に佳奈は啞然として目を見開いた。

「マ…ジ…？」

そこには、シルクのシーツを纏った豪華絢爛なベットも、紅茶の入ったカップを置いてある洋風の机も、壁に飾られたレイヤエルモの絵もなかった。

ただ、緑の草原が風になびいているだけ。まるで『ゲ 戦記』の世界に吸い込まれた気分だ。

「うわゝなんか北海道に来たみたいゝタダで旅行してるって感じで得したなゝ」

能天気なことを呟きながら鼻くそをほじって立ち上がると、足元でクシャツと草のつぶれる音。

空は、雲一つなく澄み切っていた。まるで爽やかな夏晴れといったところだろう。

「そついえば、富岡製糸工場で働いた日もこんな空だったな…」

お前は何時代の人間だよどこからカツツコまれるが、佳奈は耳が悪いため聞こえない。

サアツと、心地よい風が佳奈の髪をなびかせる。何故が涼しくなってきたので笑ってみた。

とりあえず、落ち着いて辺りを見回すと、東の方角に、赤、黄、青、紫という何ともカラフルな花畑が見える。ミックスベジタブルと勘違いした佳奈は花畑に向かって猛ダツシユする。

佳奈は目が悪いのだ。

花畑を覗き込むと、甘い、甘い、心をくすぐるかわいい匂いがする。

はずだが、佳奈は鼻が悪いため匂わない。

と、花畑を見ているうちに、佳奈はあることに気がついた。

一つだけ、不自然な花が畑に紛れ込んでいる。

「この花…匂いがする…他の花はみんな匂わないのに…」

嗅覚がマヒしている佳奈にまで匂いが届くとはよほど強烈な花なのだろう。まじまじと観察してみる。

その花は、バラだった。花畑に、一輪だけ咲くバラの花。

時々、佳奈の大キライなハチがバラの周りをうろつき刺してくるが、佳奈はそんなのお構いなしに花畑に座禅したままバラの花を見つめ続けた。

「キレイ…今まで見たどんな花よりも…」

バラは、見事な紅色をしていた。その色は、他のどんな花にも勝るぐらいに。

と、佳奈の視界の端に人影が映る。草原の果てから1人の青年が駆けてきた。佳奈はすばやく眼鏡を取り出すと情報を読み取るために装着する。どうやら、青年は二十代でこの近くに住居を構えてる

ようだ。

分析している間にも青年は至近距離まで来ている。佳奈は見つからないようにと伏せた。

「ああ…オレは美しい…」

かなり自己中心的なことを呟きながら花畑へとダイブする。ああいうのは友達がいらないタイプだろう。

と、言っても実際友達が1人もいない佳奈が言うことでもないが…

(いけない、油断していると見つかる)

一瞬目が合ったが、手を振っても無反応な所をみると発見されてる可能性は極めて低い。

さらに観察を続けているとプチン、と茎が切れる軽い音がした。すると、さっきまで花畑に混じってたバラの花が、男の手の中にある。「フツ…このバラは美しい…しかし!!オレはその数倍美しいのだ

…」

またしても自分勝手なことを呟きながら、男は花畑から立ち去った。

(どこかに家があるのかも…ようし!見つけ出して金目のものいた  
だきマンモス)

佳奈は男の姿が小さくなると、立ち上がった。その瞳は金に飢えた亡者そのものだ。

男の背中を見失なわないように、佳奈は小走りする。

しばらく草原を走ると、急に目の前の景色が変わった。

そこには、石でできた塔のようなものが、地面から空に向かって聳え立っている。かなり大きな建築物だ。誰が何のために作ったのだろう。



「何これ…」

佳奈はその石を触った。見た目はツルツルなのに、デコボコしている。

よく見ると、何か文字のようなものが刻んであった。変なこと書いてないかな〜とちよっぴり期待していた佳奈だったが、その予想は外れでいる。

なにやら書かれているのは古代文字のようなものだ。

『！＃\$%&’（）＝〜—』

佳奈の頭の中には p u e s t i o n マークが5つ…。

さらに、その意味不明な文字の下を見ると、小さな絵が描いてあった。

その絵をよ〜〜〜〜〜く目を開いて見ると、バラが群生している絵うつすらと読み取れる。きっと何年も前に描かれたものなのだろう。

（？何で。さつき見た花畑にはバラが一輪だけだったのに、この絵には群生して生えているんだろう？）

悪い頭で考えても無駄だ。いつのまにか「ここに生えてる草食べれるかな〜」など全然関係のないことを言いはじめた。本当に食べてみたら苦かった。（当たり前だ）

「ま、いいや。とにかくさつきの男の人を見つけて金を強奪するぜ！ヒャッハウ！楽しいなあ」

くるりと踵を返すと急いで歩き出す。完全に自分を見失っているようだ。

が、自分を見失いすぎた佳奈は一つ見落としている部分があった。

先ほどの石の裏側には、大きな黒いバラが炎に包まれている絵が描かれていたことを。

草原の中を進むうちに、1人の青年を見つけた。彼は件のバラを片手に何かぶつぶつ言っている。

「うわ！キモ！」

佳奈は寒気がして、ぶるりと震えた。誰よりも自分がキモイことにまだ気づけない悲しい子だ。しかし佳奈も本気で嫌いなタイプだったらしい。

腕にブツブツと鳥肌が立って、軽く冷や汗が出て、おまけに……ああ、ちよつとだけ、ちよつとだけだよ？……ちびってしまった。きや！なんてチャージング

1人できやつきゃクネクネして、全生命体を震えあがらせる有様な佳奈。…ふいに風が吹いた。ぶわりと吹いた激しい風に思わず腕で目を庇う。髪をなびかせるわたし…いい（事實は髪をふり乱した閻魔大王降臨である。むしろ閻魔大王も逃げ出しかねない）そこに、バラの香りが溢れる。

佳奈の髪が沈静したとき、そこはどこかの部屋の中だった。

「何なの？ いったい……わたしを不安にさせて、「大丈夫、俺が守ってやるさ」とかって現れる気だな！ もう！ お茶目なんだからユージン！」

その頃、廊下で平和を甘受していたユージンは、心臓を押さえて倒れた。なんと哀れなのだろう…。

まあとりあえず、そこは物凄く豪華な場所だった。ユージンのいた屋敷も凄いが、ここはその比ではない。

飾られた絵の数々、宝石の文字盤の時計、ふかふかのソファ、大きなサファイアの埋め込まれたテーブル……。佳奈は、もちろん宝石を驚掴みして懐につっこんでしまった。ゲヘという笑いもオプシオンでついてくる。ちなみにこの笑声は佳奈の携帯の着信音にもなっている。

宝石を飲み込んで腹を撫でていると、また風が吹いた。今度はしっかりとその瞬間を見る佳奈。

目の前の視界が、とろりと溶けて、瞬きしている間にまた新しい場所に出た。（作者はとろりと、とか美味しそうな表現が好きである）

「今度はどこぞ」

次なるお宝に期待を弾ませ、辺りを見ると目の前を紅い美しい花弁が散った。佳奈はもちろん喰った。腹が減っているのだ。

ふわりと甘い香りが、鼻腔をくすぐる。とか、お上品に浸ったりはしない。花びらが案外うまいことに気づいて貪っているのだ、そんな暇はないのだ。

『…して、やる…！いつか、あの男を…絶対殺してやる……！！』

紅い花弁たちが、さっと黒く染まる。そこで佳奈はやっとバラを觀賞した。日本に持ち帰ったら見世物になるな。

…何よりも自分を見世物にするべきだろう。

そこで佳奈にしてはひじょーに珍しく、過去の言葉を思い出した。

花言葉は、いつかあなたを殺しに行きます。

いつかのユージンの言葉だ。これは言葉ではなく、台詞と男の組み合わせが最強だったために記憶の涎に込められていたのである。佳

奈の涎は記憶のための行為なのだ！メモっておこう。

ああ、このバラがこの間のバラなんだな。と、なんとなく思った。視界の全てが、バラで満たされ、心地よい香りに眠気が誘われていく。

佳奈は黒いバラの中で、ゆっくりと目を閉じた。なんとも醜悪な絵図となった。

・  
・\*・  
・

（ こんな作者だつて、時には真面目っぽい文章を書きたくなります）

誰かの悲鳴が響いた。

暗い闇。一寸先も見えないようなその世界で、佳奈はその声の主を探して首を巡らせる。

「だ、誰かいるんですかー？」

佳奈は恐る恐る声をかけた、けれど絶え間なく続く悲鳴に呑み込まれ、霧散してしまう…。

ゴクリと唾を飲んで、声の方へと歩いてみる。鋭い悲鳴は激しく鼓膜を震わせる。

ふいに何か香りがする。

「バラ…？」

またバラか。そろそろバラも喰い飽きてきた。いい男はいないのだろうか。

そう思いつつ、叫んでいるのが男で、それを優しく慰める佳奈。という構図を思いついた佳奈は、涎とだらだら垂らしながら這い進んでいく。なんともおどろおどろしい状態である。

ふいに鳴き声がピタリとやむ。 男が佳奈の気配を察して、良い顔をしようとしているのね

「誰？」

しかし、声は幼い子供のものだった。佳奈は驚いて目を見開く。

「ごめん、わたし幼児プレイはちょっと。佳奈激しいから再起不能にさせちゃうかもしれないし。ていうか、こんな所で何してるの？」

なんと、神は佳奈に『選ぶ』という権利を渡していたのか！どう考えてもこいつにえり好みする権利はない。

子供が身じろぎする。その動きに乗ってバラの香りがした。その少年は、まるで闇の中でも見えているかのように佳奈を見つめる。瞳の燃えるような紅が、闇の中で唯一佳奈が見たものだ。

「あなたは、ずるい」

ふいにそんなことを言われる。

援助交際でぼろ儲けした時や、いかさまで賭け事をした時にはよく言われるが、こんな初対面の相手に言われる覚えはない。とかいったら退学ものだ。へっへーでも中学生は義務教育だから大丈夫だもんね！。∴日本政府は佳奈に対して対策を講じるべきだと思っ

「いつだってそうだ。あなたは優しいけれど……そうじゃない」

全人類の脅威、佳奈にお構いなしに、子供は言葉を紡ぐ。ちなみに妄想癖はあるが、薬はやっていないのでご安心。佳奈に金はない。ていうか、佳奈には物々交換の概念しかない。

「…え…とお」

さすがに佳奈にも返す言葉がない。佳奈の言語能力は変動制である。子供はふいに立ち上がると、こちらに背中を向けて歩き出した。

「さようなら。次は 殺しに行きます」

殺す？

「待って！」

叫んでも、歩みは止まらない。とっさに追いかけてようと立ち上がった時には、その姿は闇に紛れていた。

「なん…だったの？」

眩く佳奈に、甘い香りの花弁が降ってくる。その花の色は、闇に紛れてわからなかった。

#### 巻ノ四 ナルシスト（後書き）

書くのめんどくさい。とか思ってる作者です。  
後書き、特に書くことないんですけどね。

はい、そんなズボラな作者ですが、次回ちょっと進展するか…な？

## 巻ノ五 伯爵登場

今回は、自然に目が覚めた。

ゆっくりと起き上がると服が濡れている。何故かは分からないが、特に下半身に集中して濡れていた。ハムスターのゲージのような匂いもする。

部屋の隅で、器用に鼻を押さえたレイが蹲っている。 およそ犬とは思えぬ格好だ。そんなことができたのか。日本に帰れたらとりあえず珍 景に応募しよう。

自分の考えに興奮し、涎を垂らしながら辺りの様子を見る。

シルクの毛布がかかったベッド。宝石が埋め込まれた机。その上には紅茶の入ったティーカップが1つ。… ついでになぜか、電源のついたままのDSが置いてあった。中を覗いてみると牧場ノ物語。

「なんで？」

つつこみ所が満載なのは分かるが、まず自分だということを自覚してほしい。人類の平和のために。

まあとりあえず。佳奈は物語の進展のために、涎記憶能力を発動させた。涎に移り込んだ光景を思い出すのである。それで今の状況が分からず、佳奈は眉を顰めた。

「どういうこと？ここ、さっきの部屋…でも、火が上がって…」

言いかけて、佳奈はハツとした。目が覚める直前、夢を見たのだ。

(話が進まないなので、一時普通の思考能力を授けます)

咲き乱れるバラ。バラを引き抜いてしまった青年。真っ暗な闇の世界と、そこに蹲る幼い影。そして、そこから放たれた言葉。(解除)



そして、そこで漏らしたような……ううん。そんなはずはない。だって私もう中学生だもん！中学生は援助交際も出来るんだぞ。佳奈はふけふけと笑った。その笑いがピタリと止まる。何だか恐ろしい一瞬だった。佳奈が急に無表情になってゆっくりと天井を見上げたのだ。某伝説の勇者さんの母君のような物が、口から這い出てきそうだった。レイは渾身の力でジャンプしてドアノブに取り付き、逃走した。一方佳奈は珍しく悩みこんでいたのである。

そういえば、さっきから何か足りない…。

「うおっ私の獲物！美形外国人ユージンちゃんはどこ！？」

佳奈は涎三割増しで辺りを見渡した。だが、人の気配はせず、窓からは陽光が差し込んできている。外からは、うふうーあはー捕まえてごらん。いやーんダーリン待ってえというエルモの奇声が聞こえてきた。興奮した佳奈は窓の外に火を噴いた。その火にはたと気づく。

ま、まさか、炎に巻き込まれた…？

うぎゃああああ、彼の純情派私のものよおおおお。と錯乱する佳奈の横のドアがゆっくりと開いた。

「佳奈…」

名前を呼ばれ、とっさに振り返った。佳奈だって、自分の名前は識別できるのである。戸籍入れるのに必要なので。佳奈はこれまで5人の男性との婚姻届を偽造した。

それはいいとして（いいのだろうか…）そこに立っていたのは、ユ

ージンより少し年をとった男性だった。まだ青年と言える年頃だろう。ちなみに素足である。石田 一か？

そんな石田青年はジツとこちらを見ながら、先ほどのティーカップにほじった鼻くそを捨てている。

「変態！？ストーカー？ていうかストーカーがいるとか私すごくない！？」

興奮する佳奈をよそに、男性は窓の外を遠い目で見つめた。そして、口を開く。

「私は、リドウォールの主。エライヒトだ」

リドウォールの主？…つまり、ユージンが言っていた『例のあの人…』。

主と名乗った男性は、佳奈に視線を移した。男だ、と思い佳奈は彼をまじまじと観察する。鼻はあるようだ。そういえば例のあの人「ウォルデモートさんは、ハリヤーたちに殺されてしまったのだった。つつか禿げてるし。推定年齢20代なのに、NUKUMIZUベールの禿げ方だよ。しかもそれが額にくっつくという典型的なキモイ禿げ方。顔はランクAなのだが。なんだか残念なやつだ。

しかし佳奈は、彼が好みではなくとも涎を増すのだった。だってエライヒトだよ？自分で言ったんだよ？どんだけすごい奴なの？どんなけ金持ってるの！？

そんな佳奈の前で、石田青年は足を踝で掻きながら話し出した。

おそらく水虫だ。佳奈も全身にある。

「時は、きた…」

「……………なんかベタすぎじゃない？そんなん帯に王道ファンタジー掲げたラノベも書かないよ」

「ふつ。台本は完璧だからな」

佳奈に販されてもキレないとは、中々器は大きい奴である。ゆっくりと佳奈の隣のイスに腰を下ろす（神だ！）水虫青年は、ポケットから【ココクリ 台本】と書かれた本を取り出した。

チラリとのぞくと、赤字で何やら書き込まれている。彼の登場など、この話を過ぎたら企画されていないのに。

その点佳奈ちゃんは主人公だもんねえとウケケケ笑う佳奈。水虫青年は気にせず続きを話し出した。おそらくそれも台本通りなのだろう。ユージンは2人のツーショットに、口を押さえてしまった。今日は自分の役目がないので、頑張らずそろそろと退散していく。禿はそれを見て、台本に赤線を引いていた。そしてページをめくり、何かを口の中でブツブツ繰り返した後やっと口を開く。

「よく聞いておくれ、佳奈。とうとう話す時がきたようだ」

そう言つて水虫（ついにただの“水虫”になった！）は、佳奈の茶色の目をじっと見つめる。

シルクでできているのだろう仕立てのよい服を着ていて、手首の力フスキラリと開く。ついでに佳奈の涎もきらめく。なんとって金持ちを発見したのだから。

（ヴィジュアル最強ユージンと、財力最強の水虫……両方ゲットだぜ）

佳奈は1人、勝利の高笑いをした。

しかしその後カフスよりも、彼の後頭部が眩しいのに気付き。さすがに初対面の相手に

「そのハゲ晒してんじゃねーよ」

とか言つて爆笑した。水虫も爆笑した。カメラに額から上だけ移さなければ美形なのだが……。 (なんにしろ、佳奈よりましなのは間違いない)

まあその水虫は、はたと気づいたように台本に目を下ろし深刻そうな顔をした。

「時間がない。今は急がなくてはならない……」

「佳奈との結婚？」

……はたして、この言葉も台本にのっているのだろうか。作者はその台本に激しい興味を持った。

つーか、台本とかどこで貰ってきたのだろう。そこにはきつとわたしの輝かしい逆八 天国が……！

涎を垂らす佳奈を放置して、話はどんどん進んでいく。なぜか台本は2冊目に到達していた。いったいそこまでには、何が書かれていたのだろうか。

「ああ、申し遅れた。私の名はリドウオール伯爵セドリネ・シエルデフ 勝手に呼び出しその上挨拶も遅れたことは、本当にすまなかつた」

しかもいまさら自己紹介。崩壊した台本である。今さらすぎて、名前は水虫に決まってしまったのだが……。しかし、それにしても表情が乏しく口調が妙に威厳に溢れていてポール・ ツツさん並みの声量があるため、何となく老人のような印象を与える。つーか禿げてるし。水虫だし。

確かに現代日本では見ないタイプだ。近所であつたら絶対に忘れないうちがある。ついでに学校であつたら、絶対にイジめる自身がある。(ちなみに佳奈は、学校ではベランダで飼われている)だが、

佳奈是水虫　セドリネの後ろの赤い物体に目を奪われて……といえは聞こえはいいが、とりあえず目を見開いて半狂乱で叫んだ。

「なっ！！何で！？何でエルモがいるの

！！！！

！！？」

『ヤア！久しぶり』

3度にもわたる？もさもさパンチ？を思い出して、顔を顰めて腹をなでる。佳奈にも怖いものはあったのである！

さらには吐き気もこみ上げてくる。（まさか佳奈にそんな感想を抱かせるとは……）　なぜなら、セドリネの背後には3体のエルモがいたのだ。よく見ると、そのうち一体の腕の中に人間の赤ん坊らしきものが……。

「そ、そそそそそれって！」

『おかげ様で、元気に生まれました。娘です』

違うエルモが言った。

「おかげ様って何？私何かしたっけ？」

混乱して、つつこむ所がおかしいが誰も何も言わない。

『ええあなたが、いい？マト？になってくれたので』

なぜかエルモがぼつと顔を赤らめた。……気がした。エルモは赤いので良く分らない。

『嫌だ、私ったら！そのお子供をかえらせるのってストレス溜まるんですよ』

「か、かえらせる？」

「エルモの子供は卵からかえる」

セドリネが、淡々と答える。その視線がエルモの腕の中で笑う赤ん坊に向いているのを見て佳奈は失神しそうになった。（失神ってなんか乙女っぽいから、しようとしてみた）

「そ……それがエルモの子供？」

恐る恐る聞くと、またもやセドリネが答えた。

「エルモの子供は、生まれて1年ほどで産毛が生え始め2年ほどで大人になる」

見た目人間のエルモがおぎゃあと1つ泣いた。につこりと笑った一体のエルモ（おそらく母親）が、笑みを浮かべて何かをくれた。

「えっとー…なんですか？これ」

手の平に乗っているのは、腐り落ちたチューブのようなもの。コテンと首を傾げる佳奈に、エルモは晴れやかにほほ笑んだ。

『それはこの子のへその緒よ』

泣きそうだ。ホントに……。

「それでは話はこれくらいにして」

セドリネが謎の動きをする佳奈に無視してそういう。彼がポンポンと手を打つと外から侍女が入ってくる。それと入れ替わりに、その姿は消えていた。

巻ノ五 伯爵登場（後書き）

ものすごくお久しぶりです。すいません！  
で、相変わらずのふざけ具合……もう作者にも何が何だか分かりません。

次回はすぐ投稿できます。



## 巻ノ六 見参！黒エルモ族

半日後

「す、すごい！私にぴったりの華麗な馬車ね」

佳奈はウケケケと笑いながら、目の前の馬車を見つめた。2頭の美しい白馬に引かれ、ファンタジックな姿でドドンと鎮座している。

しかし複雑な紋章の納められるべき場所には、なぜかうこのマークが掲げられていた。人類共通の洒落のようだ。

「それは、我が領の馬の中でも、最も美しい馬だ」

セドリネが台本片手に隣で答える。佳奈はしばらくそれを眺めてから首をかしげた。

「ていうか、どこに行くの？」

そう言うとセドリネの後ろからユージンが出てくる。

「主は、これより一足先に早馬で駆けますので…僭越ながらわたくしが説明致します」

「後は任せました」

ユージンが深く頭を下げるとセドリネは舌打ちした。ふさふさしているからだ、佳奈は思った。

佳奈が見つめる先で、セドリネはユージンの髪を生え際を凝視し、何を思ったか髪を数本引きぬく。

そしてそれをさつと握り佳奈には目もくれず、セドリネはさつさつと行ってしまった。願掛けか何かだろうか？

違う使用人に「煎じておけ」というのが聞こえたが、佳奈には煎じるの意味が分からない。

その姿が見えなくなった頃、頭を上げたユージンは蒼白で佳奈に馬車に乗るよう促して、自分もヒラリと乗り込んだ。

「で？」

佳奈は不機嫌そうにそう言って、自分の服を摘まんだ。マジでキモイ。

「これは何？」

それは佳奈の着ていたものではなかった。先ほどの侍女に着せられた、『こちら風』のドレスらしい。佳奈は内心「全人類の男は、こんな佳奈を見たら失神しちゃうわ」とか思ってるが（事実失神はすると思う）、ここで文句を言うのがラノベのお約束だろうと「男に良い顔をする」モードをONにしたのである。

「何と言われましても、ドレスでございますが？　キモスが、くつちゃべつてんじゃねえよ」

「この人たちはみんなこんな動きにくいもの着てるの!？」

「いえ、それは貴族の女性のものですが気に入りませんでしたか？　てめえにはもつたいない上等なドレスだったの」

佳奈は、拳を小刻みに震わせて、ユージンを睨んだ。完全に役にどつぷりつかつてる。ユージンはさつそく失神しそうになった。耐えきれなくなり、窓から外に出て上から顔だけ覗き込んで話をする。  
…彼もたいがいかもしれない。

「今すぐ脱ぐ！」

口調は起こった風を装いつつも、佳奈は嬉々としてナイフを取り出した。

「いけません。ただ今からわたくしたちは王宮へ向かうのですから……てかなもんみたら血液凍りつくわ」

数々の小声も、耳の退化した佳奈には届かない。ていうか、今なんていった？  
しばらく涎で記憶を戻し、コケーとなく。どうやら驚きを表現したらしい。

「はあ!？」

佳奈の、アゴがはずれた。

「頭……打った？」

「打っていません　その前にアゴだろ」

きつぱりと無表情にいうと、ユージンは珍しくため息をつき顔を引っ込めた。こんなもん王宮にとか、恥さらしもいいところだ。セドリネもだけど。

馬車は動き出していて、たくさんの風景が駆け抜ける。ユージンは遠い目になり、再びちよつとだけ顔をのぞかせた。

「主からお話するようにいられています」

ユージンの言葉が妙に耳に響いた。どうやら真面目な話らしい。美

形のマジに、佳奈は大興奮で涎を絶賛増大中だ。でも役には入りこんでいる。

「どづいう… ことなの？」

どっちかっていうと、FUNAKOSIさんと崖の上が似合いそうな口調だった。

「実は…」

と、ユージンがそう言いかけた時。

『曲者じゃー！…！出あえ、出あえー！…！』 (？)

馬車の外から叫び声が届いた。辺りが波打ったようにしんとなる。何事かと馬車の外を見たユージンの顔色がさつとかわった。

「カナ様は、ここでしばらくお待ちを」

「え！？」

ユージンはそう言い残すと、動いてる馬車から飛び降りた！

佳奈も慌てて外を見るとそこにはエルモ ではなく、黒い毛並みのエルモそっくりの団体が武器を持ちながら馬車を囲んでいる。

「ついに現れたな… 『黒エルモ族！』」

ユージンの言葉に佳奈は、ソファからずり落ちた。なんだ「黒エルモ族」ってー！！

それも、そうとうな人数だ。ユージン1人では歯が立たないような。

「ユージン！！危ないわ！馬車に戻って！」

佳奈は思わず馬車から身を乗り出して叫んだ。気分はヒロイン。自分によってみたり…。  
深く意味はないけれど気分はハイになって、さらに身体を押し出した。すると、黒エルモたちの様子が変わった。  
お互い顔を見合わせて何かを呟いているようだ。

『ホラ、あの少女が例の…』  
囁く声からそんな言葉が読み取れた。思わず顔をしかめる。汚い指で私を指さすな。

と、黒エルモたちのスキをついて、ユージンは懐から太刀を取り出した。(?)

「フン…お前らなど、このユージンが成敗してくれるわあ！」(?)

次の瞬間。ユージンは太刀を振り上げ、黒エルモに向かって突進！  
そして、辺りは…。

『どええええ！?!』

『うっぎゃー！！』

『いてえー！！』

『なんて地味な攻撃をするんだー！！』

『うわーっ！！お前髪の毛なくなってる！ハゲだーっ！！』

『マ…マジでか！?!』

というエルモの叫び声で一杯になった。

「……………」

佳奈は呆れて、開いた口が塞がらない。

と、そこで突然馬車が動き出した！

佳奈は我に返り、何で！?!と思ひ窓から身を乗り出した。

すると馬車を動かしている馬に、2体の『黒エルモ族』が！！！！

『フッフ…ハハハ…！この少女、確かに貰い上げたぞ！』 (？)

黒エルモ一体が高らかに叫んだ。

「カナ様！！」

ユージンが振り返るが、馬車は遙か遠く。

「ユージン！！！！」

佳奈も負けじと叫んだが、その声は届かない。

「ワン！！」

ん？何いまの…。

佳奈は馬車の中で、流れる景色を見つめたまま、呆然と立ちすくんだ。

・ …\*・

ガタガタと激しく揺れる車内で、言葉を失う佳奈。(その方が可愛  
と思ったから)

どうやらエルモは、馬を操る2人だけらしく、車内には入ってきて  
いない。

(どうしよう…：飛び降りようかなあ。あ、でも待って。ヒロイン  
だったら大人しく迎えを待つべき？いやいや、この頃は行動派も多  
いからな)

そう思って窓から外を見れば、物凄い速さで走っていた。佳奈は運  
動能力が死滅している。

(うーん。怪我じゃすまないかも…私か弱いし。ヒロイン死んだら  
話進まないし)

佳奈は勢いよくソファに倒れこんだ。どこから「公共の福祉のために死ねええ」という声が聞こえたが、うん。佳奈には届かないのだ。届いても理解できないし。

「くそツセドリネのバカ。もつとなんか対策しろよ。ハゲ、水虫、変態、石田——」

ポツリと呟くと、あのエルモの姿が浮かぶ。戦っていたユージンの姿も。生きているのだろうか？それとも？

「ふむ。やっぱり颯爽と助けにいくのに、弱くて守られる姫みたいのがいいかな」

ちなみに作者はそういう系の主人公は大嫌いである。まあなんだかんだその時。

「ワン！」

足元で何かが鳴いた。ぱつと顔を上げる。懐かしい姿が目映る。

「サブキャラのレイ

！！！！」

叫んでひょいっと抱き上げる。触れられたレイは活動を停止して、がくりとアゴを落とした。

「よく来た！それでこそ日本男児だ！」

もちろん佳奈は気にしない。しばらくそうしてじゃれあって（ぶん

ぶん振り回して）いて、ふと何かが光った。

「ん？金目のもの？」

見ると、レイの首に小ビンがぶら下がっていた。ワインのコルクのようなものでフタがされた、物凄くファンタジックなものだ。金目ではなさそうである。

それをレイの首からはずし、しげしげと見つめる。長さは親指くらい、見るからに怪しげなドクロマークがドドンと描かれている。

「毒？まさか作者はロミジュリを期待してるの！？」

誰がロミオだよ。というか作者は楽しい話しか好きじゃない。

とりえず佳奈は、主人公っぽく悩んでいる、どうしよう。開けようか？死んだらどうしよう。

もんもんと悩んでいると、ビンの底に何か彫られているのを見つけた。

「文字……かな？」

おそらく文字なのだろう。しかし、それは多分、こちらの世界の文字なのだ。佳奈には子供のラクガキにしか見えない。ちなみに漢字も読めない。

「なんて書いてあるんだろう。恋文かもしれないのに」  
絶対違う。とつつこむ人はいない。佳奈は乙女っぽく、ため息をつきながら、その文字をなぞる。

眠り薬。



「へっ？」

ふいに脳内に言葉が閃いた。さすがに佳奈もびっくり。ゆっくりと文字に目を下ろす。

先ほどまでは、何かの記号にしか見えなかった文字の羅列が、今は確かに、意味を感じとれる。日本語より分かる。

霧が晴れるように、雨雲が流れていくように、不鮮明だった脳内がふっとスッキリする。（突然普通の文が紛れることもある）

「そっか…青バラの眠り薬だ」

佳奈は手の中でピンを転がしながら呟いた。

それは始めて知ったというより、忘れていたことを思い出したという感じであった。

佳奈はギュッとピンを握る。

「反撃開始」

……誰か、てめえは顔面が凶器だと教えてやってほしい。切実に。

## 巻ノ六 見参！黒エルモ族（後書き）

は、激しく意味不明。

これ読んで理解できる人いるのか？とかって本気で悩んでいたりします。

と、とりあえず次回は新キャラが登場です。

巻ノ七 バラの女王（前書き）

今回、割とマジメな感じですよ。

## 巻ノ七 バラの女王

舗装されていないデコボコの道を、馬車はただ進んでいた。御者台に座った2人の黒エルモは、とくに言葉をまじわすこともしない。クールな自分に酔う派だった。

普通の誘拐だったなら1人が見張りに入る所だが、彼らは主からの命令で少女と直接会うと言われていた。顔面の問題だとは夢にも思わない。普通誘拐するのは美形だから。

馬の足音、タイヤの回る音、馬の嘶き、そんな音しか響かない、静かな空間だ。自分に酔うのにびったり。

ドガン！！！

そんな所にふいに轟音が轟いた。

『何だ！？』

叫んだエルモが顔を上げると視界が真っ暗だった。バン！と小気味いい音がしてエルモが気絶する。ついでに馬車から落下した。

『なんだ！？』

何が起きたのか分からない。もう一人のエルモは馬の手綱を持ちながら立ち上がる。

すると、丁度そこから顔を出した少女と目が合った。

2人とも、硬直する。

最初に正気に戻ったのは佳奈だった。というかエルモは佳奈を見て、立っただま気絶している。そうとは知らない佳奈。

「正義の味方、けんざん!!」

そう叫んだと思うと、首に下げていたピンをひもから引きちぎり口でフタを開けて、エルモに投げつけた。

「な、なんだ!?!」

エルモが、異常に気付いた時には、もう甘い香りがただよっていた。

「ふう  
」

佳奈は大きく息を吐き、ウゲゲゲと笑った。なんたつて主人公っぽいことをやり遂げたのだから。これで読者の人気は独占ね

.....この話に読者がいればね。by 作者。

先ほど佳奈は、近くにあった荷物やらなんやらを天井に投げつけ穴を開けた。

その時、ぶち抜かれた木片でエルモが1人ご臨終したことは誰も知らない真実だ。

そこからソファに乗って、腕の力と気合だけで馬車から顔を出してあの状況に至ったのだった。

(とりあえず…一服)

そう思った瞬間、物凄い勢いで馬車が揺れた。

「何!?!また誘拐?佳奈大人気?」

適当なものにつかまり、涎を垂らしながらそれをやり過ごす。しばらくすると、静かになった。意気揚々とドアを開け、馬車から下りる。

「佳奈ちゃんを誘拐しにきたのは美形ですかーあ？」

言いながら気づく。白馬が消えていた。御者だった黒エルモがいなくなったのだから、当然と言えば当然である。金目のものだったし、大切な食糧だったのに…。馬刺しは大好物である。辺りを見ると、そこは見たこともない森の中だった。

「やっぱ……これは本気でマズイでしょ」

「ワン！（お前の顔面が）」

まるで返事をするように、レイが吠えた。佳奈には犬語が分からない。

「と、とりあえず進も……」

佳奈はビクビクしながら前進する。

腰と首を屈め、両手を軽く前に突き出す様はかなり怪しかった。

森は、全く人の手が入っていないようだ。青々とした樹木が空高くそびえ立ちに、日光を遮っている。光は、たまに差し込んでくる木漏れ日だけ。

鳥が、鳴いた。

行けども行けども、周りの景色は変わらない。

『パキッ！』

「ヒィッ！……！」

音がした方を見てみると、枝が折れただけだった。

「だ…だめだ…この森、心臓に悪い…私のがらすのはーとが壊れちやう」

佳奈が思わずしゃがみ込んだその時。

『ワン、ワン、ワン、ワン！！』

佳奈の隣にいたレイが、激しく吠えだす。

『ガサツ』

ひっ！！

『ガサガサガサツ！！』

半泣きで立ちすくむ佳奈の隣でレイはさらに激しく吠える。

(こつなつたら…)

佳奈は懐からカラになった眠り薬のビンを取り出すと、音がした方へ思いっきりほうり投げた。

『パツリ

ン！！！！』

お約束の音がして、ピンは何かに当たってくださった。  
や、殺<sup>や</sup>つたか！？

と、佳奈が安堵の息を漏らしたその時。

「なかなか手荒いお出迎えね…」

木の葉をくつつけた1人の少女が木の陰から現れた。年は、佳奈より2、3歳年上だろう。手には粉々になったガラスピンを握っている。

佳奈は、いきなり現れた少女にド肝を抜かれた。

「こつこつこつ…これは誠にすみませんでございましたでございませ…！！！！」

土下座して叫ぶ佳奈を見た少女は、プツと吹き出した。

「フフフ…イジメがいがありそうな子ね」  
な、なんだこいつ。DSか!?

「あつ突然出てきてごめんなさい。水虫伯爵に仕えているマリールよ。よろしくね、佳奈」

いきなり呼び捨てにされ、戸惑う佳奈。ていうか、主人になんてあだ名を…。

佳奈は自分の事を柵に上げて呆れた。

「水虫ハゲ素足伯爵が、佳奈を迎えに行けっというからきたのよ。感謝して頂戴い」

「で、さっきの黒エルモって何なの?今何が起こってるの!?!」

佳奈は容赦なく質問攻めにする。

「あ、それは今から説明するから焦らないで。あんまり煩いと、もう何も分からなくしちゃうわよ」

マリールは佳奈の隣に腰を下ろすと、ほほ笑んだ。語尾にハートがつきそうな口調で、軽く危ないことを言う。

けれど、佳奈はドキリとしてマリールに見とれた。佳奈はGLもいける。佳奈の相手は人類の誰もできないが。(真面目に書かないと話が進まないの、なんとなく普通っぽくなります)

まるで何十年もの間、荒波に揉まれて生きてきたような疲れた…:そして強い顔だった。

(そつえば…:みんなそうだった)

ここに来て会った人たちは、全員自分と変わらぬ年頃なのに、みなひどく大人びていた…:。

「あら?そつえばユージンはどうしたの?」

佳奈は、はたと思い出して遠い目をする。あの時は涎が少量だったので、記憶が遠いのだ。



「ユージンは、黒エルモたちと戦って……それで」

「ああナルほど」

妙に納得したようなマリールベルは、ふと思いついたように瞬きした。

「もしかして、なんの説明もまだ？」

「説明？」

佳奈は、しばし虚空に視線の彷徨させた。

主からお話するように言われています。

ふいに冷静な声が蘇る。見つめるマリールベルに、コクリと頷いて見せた。

「そう」

それなら私から話そうかしら」

マリールベルは、倒れた丸太に座り直し、佳奈にも促した。

「紅茶もお菓子も出せそうにないわね。長い話になるかもしれないけど……聞いてくださいますか？」

なぜか最後まで敬語になった所には気付かず、佳奈は間髪いれず頷いた。

「もちろん！」

ふわりと笑ったマリールベルは、行儀よく座って、どこか遠くを見つめた。

・  
：\*：  
・

クレスティア王国は、600年ほど前に激しい戦乱の中で興りました。

僅かな食糧、人民、土地、そんなものを巡った無意味な戦いに終止符を打ったのです。

なぜ、そんなことが可能だったのか？それは、クレスティアの初代の王や臣下たちに魔法という力があつたからです。

彼らの力は、自然界に存在するものの力を借りつける形のものでした。いわゆる精霊というものです。そして、その全ての媒介となるのがバラ？だったのです。

バラの甘い香りは、他のものをひきつけ惑わします。バラがある所には、自然とそういうものが集まってくるのです。だから、この国にはたくさんバラがあり、服にも髪にも肌にも……いたるものに、その香りをつけます。

30年ほど前までは、魔法は一般的なもので誰もが普通に使っていました。

そう30年前までは

これは、バラたちの話ですので私たちにくわしいことは分かりません。これは、私たちの出した結論であるのご理解ください。

とある所に、一輪のバラが咲いていました。

バラは非常に気高い生き物で、自らの周りを荒らされたりすることを嫌います。それは誰もが知ることでした。600年近くも守られてきた理……。

それを誰かが破ってしまった。 そのバラを折ってしまったのです。

その行為は恐ろしいことです。神を冒瀆するようなもの ひいては世界を否定したも同じこと。

本来なら、すぐに命をもってあながい。手厚く奉る所なのに……あるうことか、その者はバラを手元に置き続けてしまいました。

数日がたち、そのバラは儂く枯れていきました。

かのバラは怒り、そして？バラの香り？を飛ばしたのです。それはバラの警告とでも言いましょうか？全てのバラに危険を知らせ、強制的に身を守らせるのです。

どんな香りなのかは存じません。けれど甘ったるくて、眠気をさそう香りだと聞いております。それは全てのバラに伝わり、バラはトゲをはやしました。小さな鋭いトゲを、いくつもいくつも……。

バラの香りに誘われた精霊は、トゲで弱り、また消滅していきました。

自然界に存在する、ほとんどの精霊が　　です。

ある日の昼、時は止まりました。風も消え、雲も消え、空で輝く太陽は沈まず、月は昇らなくなっていったのです。

けれど、生き物たちはみな生きて何事もなかったように活動していません。

私たちの精霊は、個人と融合しているのでバラに誘われたりしないのです。

けれど失われた時は流れなかった　　。  
私たちはみな、30年もの月日をこの姿のまま生きてきました。食事は娯楽になりました。時が流れないので、空腹はありません。死もありません。…けれど、新たな生が生まれることもありません。

これでバラの復讐は終わったように思えました。けれど、バラはその人間にさらなる罰を与えようと蘇ったのです。

時のない世界でも、人を消滅させることは可能です。燃やしてしまふ：ようは、灰にして何もかも消し去ってしまえば。全てを、なかったことにしてしまえばいいという話です。

しかし、私たちはその人間に死んでもらうわけにはいきませんでした。

クレスティアの人々は、精霊を失い、魔法を失いました。命と引き換えに？バラ？という媒介自体の魔法を使うことはできません。

その死は、全身を茨で突かれるような、激しい苦痛の上に成り立つものですね……。

どちらにしる、情けなくも、私たちにできることはないのです。新たな生の生まれない今、命は個人の問題ではなくなりました。そこで私たちは考えました。バラのトゲがなければ　と。バラには、バラを統べる王がいます……いえ、正確には『いた』という方が正しいでしょうか？

バラの女王。この方は、30年前、？バラの香り？の飛ばされる直前に、危険を察知した臣下によって別の世界へとばされました。

バラの香りは、王の許した一部の者…後継者などにしか使えにもので、拒否することはできなかつたからです。それは王すらも同じ。だから女王はいったん姿を消したのです。

私たちは最近になってその事実を知りました。

そして、見つけました。バラの女王

佳奈、いえ佳奈様を。

巻ノ七 バラの女王（後書き）

ふうー…意味分からへん。って感じですね。

作者にも分かりません。

## 巻ノ八 マリーベルは最強！

「え〜とお？」

こいつ、妄想癖があるのか！？

完全に顔が引きつっている佳奈の手を取り、マリーベルは何かを握らせた。

何となく、それに視線をやると、それは懐中時計だった。

この世界にきてすぐに見たことがあった。しかし、これは燃えてしまったはずだ　なぜ？

そんなことを考えていると、透明なフタの中にぼつりと赤い点が浮かんだ。

「へ？」

まぬけな声を漏らしみつめると。それはどんどん大きくなり、蕾となり、満開のバラの花が咲いた。

「おめでとうございます。佳奈様は認められました。この懐中時計を決して手放してはなりません。これを持つことが、あなたがバラの女王たる証になるのです」

佳奈は呆然とした。何もかも理解できない。なんだっていうんだ？バラ、バラ、バラ…そればかり。おかしい、おかしすぎる。変態か？

ぎゅっと唇をかむ。ふと脳裏をよぎったのは闇の中で出会った子供の姿だった。

真っ赤な真紅の瞳をまっすぐに向けて、どこか悲しそうに言葉をもらした。

あなたは、ずるい。

「ん〜ま、クヨクヨしても仕方ないし〜ま、私がバラの女王って

「ことでいいんじゃない？」

急に口調が変わった佳奈に驚きもせず、マリーベルも口調を戻し、立ち上がった。

「じゃ、行こうかしら」

「へ？行くつてどこに??？」

「ユージンに聞いたでしょう 王宮よ」

ニッコリとほほ笑んだマリーベルは指を鳴らした。

『やあ、始めまして!!』

「エツ…エルモー!？」

そこに現れたのは、まぎれもなくエルモだった。毛並みも赤い。

「違うわ。これは『羽全身黒タイツエルモ族』よ」

「はあ!？」『羽全身黒タイツエルモ族』!？」

佳奈はすつとんきょんな声を上げた。

「そう。おもにフライト用に使用するわ」

フライトつて…飛行機かよ…。

つつこみながらも、佳奈はエルモの背中に乗った。なるほど羽が生えている。

『ピュイ!!』

マリーベルは口笛を吹いた。と、エルモが空に向かって飛び立つ。

『はばたい〜たら〜もどらな〜いっといつてえ〜』(ナ トより)

佳奈は気が動転して歌いだした。

気がつくと、周りは空だった。風が気持ちいい。遥か下には森が見える。

「地球は…青かった…」

「佳奈〜それはパクリよ〜」

2人の意味不明な会話は風に乗ってどこまでも響いている…。

しばらく空を眺めていると、何か前から黒いものが飛んできた。  
ああ、カラスだくと、思った佳奈だが、次第にその黒いものはこちらに近づくとつれて人形になっていく。

「ん〜？」  
よく見るとそれは、黒いエルモだった。

「……………」  
次の瞬間、羽全身タイツエルモは180°回転した。

「なななななな　　！？」

佳奈は前に乗っているマリーベルに肩を掴んだ。

「心配しないで。こういうパターンにはなれてるから……」  
マリーベルは、大きく息を吸った。

『T o g o o ! ! !』

それ、英語違う〜T o g o はお持ち帰りです……ってひえ

っ……！！

羽エルモはマツハ5の速さでただいま飛行中！！

……っていくらなんでも早いでしょ！！あダメ、頭がくらつと……。

佳奈は、エルモから滑り落ちた、下へ真つ逆さま！！……という所でマリーベルが佳奈の腕をキャッチ！！でも、ただいまの佳奈の体重は60kg。それに対して、マリーベルは48kg！12kg分佳奈の方が重いよ〜

「キ、キャ　　ッ……！！！」

エルモの背中から2人+一匹は消えた。

つめたっ！息できない！濡れるっ！

凍えるような湖に、2人は飛び込んだ。いや、自然とそのような形になったのだ。

幸い湖は浅いからよかったものの、深かったら溺れてチーンだった



な…。あーでもあんまし浅くても危ないかあー。

佳奈の横で、マリーベルが、ぷはっと顔を出した。

「早くしないと黒エルモが襲ってくるわ！とにかく陸地へ！」

『ワン！』

佳奈より先にレイが返事をし、陸に向かって泳ぎだした。

「レ…レイ…待ってよ…！！」

佳奈は必死にクロールをするが、水が服に吸いついてうまく泳げない。

「何やってんの、服を脱ぎなさい…！」

すぐにマリーベルのピシャリとした声が飛んできた。

「え　　！？脱ぐの　　！？あ、あのお…私も一応年頃の女の子  
でえ…！」

「死ぬか、選べ…！」

ひいひいひいひいマリーベルが怖い…。

「それに、ちゃんとスクール水着は2着あるのよ…！」

視線を移すとなるほどマリーベルはスク水を着用済みだ。

それならそうと早く言え

！…！！

ゴチャゴチャいいながらも、佳奈は着ていたドレスを脱ぎスク水に着替えた。(ツッコまないで)

「ホラ、もう上空に黒エルモが来ているのよ！はやく陸へ…！」

へ？黒エルモ？

空を見上げると、そこには1・2・3・4・5・6…6体の黒エルモが…！！

しかも1体の黒エルモのお腹には「い」もう1体は「と」さらにもう1体は「し」続けて「の」「か」「な」という文字が書かれている。

繋げて読むと…。

『いとしのかな!!!』

キモキモキモキモキモキモキモキモキモキモキモキモキモキモッ!  
!!

佳奈は無我夢中で陸地に向かった。そして湖から体を出す。

「へっ…ひっ…ひっ…」

荒い息を吐く佳奈をよそに、マリールベルは懐から何かを取り出した。それは…。

「ガンマン!?!」

マリールベルの手に握られていたのは、小さな黒いガンマンだった。それを空に向けて発射!!

『ギヤア!!!』

1体の黒エルモの体が揺れた。同時に湖に落下!派手な水しぶきが上がり、こちら側にも被害が。

「へっ、ざまあみなさい!」

マリールベルがそう言った時には、全ての黒エルモが上空から消えていた。

(す、すい…)

佳奈はマリールベルにちよっぴり感心する。

「ち、ちなみに、それはいつたいどこから…?」

恐る恐る聞くと、マリールベルは瞳を潤ませて、横目で佳奈を見た。

「それは言わない約束でしょ!」

誰がしたんだ。そんな約束…。

全身ビショビショのまま佳奈はため息をついた。

その瞬間。いきなりマリールベルに押し倒される!

「うお!何?私そういう趣味ないです!ヘルプミー!!!」

「生憎、私にもないわ」

そう言ったマリーベルは、ちよっぴりマジメな顔で佳奈の手に何かを握らせた。

受け取ったと同時に、2人の上空を何かが通過!!

「ななななな、なに!?!」

「チツまだいやがったか!」

男らしい仕草で、ガンマンに弾をつめたマリーベルの見つめる先を見れば、森の木々の間から黒い何かがやってくる。

「また黒エルモ!?!」

佳奈は叫ぶ、けれど次の瞬間、盛大に顔をひきつらせた。

「ち、違う……あれは……」

「タランチュラ型エルモよ。毛に毒が含まれてるのでご注意を、ちなみに略してタラモ」

「タ、タラモ!?!」

何だ? そのちよっと美味しそうな名前は!?!

8本もの手足をうねうねさせて、なぜか2本足で直立するタラモはかなり気色悪い。何よりも吐き気を誘うのは、顔はエルモで、口だけリアルに蜘蛛な所だろう。

佳奈は先ほど握らされたものを見る。それは

「マ、マシンガン!?!」

「8連射が可能だけど、ストッパーをかけているので今はムリ」  
そこ問題じゃないだろう!?!

マリーベルがじつとこちらを見ている。

「私にやれと!?!」

「私、気持ち悪いもの苦手なの……」

悩ましげにため息をつくの、佳奈は呆然として見た。

「meはお客様デース。ローズクイーンデース、エライ人なのデース」

Meって何だ？ジャーズの社長か！？つかローズクイーンって何だハズすぎるぞ！

佳奈は自分につっこんだ。

「カワイイ配下を、苦痛から救ってください。バラの女王？」クイーン・オブ・ローズ

「カッコよく言っな！私の英語の間違いを正すな！！」

赤面する佳奈が、マシンガンを下ろそうとした瞬間。

ゲボツ！

不吉な音がして、手に何かが纏わりついた。

ふと視線を下げる。白いぬめぬめしたものが、右手を覆っている。

3泊の沈黙。そして。

「ギヤ  
！！！！」

断末魔のような悲鳴が轟いた。

「何？なにになに？なんなのこれ！？うわっクサ、ゲの臭いがするよ！！」

「お食事中の方、スイマセン」

マリーベルがぼそりと言った。

錯乱した佳奈がそれを取ろうと暴れる。すると。

ドン！！…ドカ  
ン！！！！

轟音が響いた。恐る恐る見ると、マシンガンから煙が立ち上がっている。そして、タラモは……。

「なっな、な、な、な」

「分離したわね」

マリーベルが落ち着き払った声で言った。

「なんでやねん！」

「その低レベルなつつこみの方が、なんでやねんよ  
ガン。」

「って、それどころじゃないでしょ。このねばねば何？タラモどう  
なってるの？」

マリールは、佳奈の手を一瞥した。こいつこそ女王じゃないのか  
と思う、傲慢な仕草で……。

「それはタラモの糸ね。残念ながら私にはとれないわ  
ちなみに、あつちはタラモの子供。メスだったみたいね。母親の欠  
片から生まれたんでしょ。きしよい事この上ないわね」

マリールは、佳奈が落としたマシンガンを取った

ドガガガガガガガ                    ！！！！

「つつ」

目をそむける佳奈の隣で、マリールが華やかに笑った。

「行くわよ」

(苦手なんじゃなかったの!?)

マリールは心を読んだように答えた。

「ガキは大丈夫なの」

キアラ崩壊しとるがな。佳奈はこっそり呟いた。

どこからか『お前もだ』という声が聞こえたがムシだ。

巻ノ八 マリーベルは最強！（後書き）

…マリーベルは当初、こんな派手なキャラではなかったんですがね  
！。

いったい何が起こったのか……摩訶不思議。

巻ノ九 マリーベルは最恐！！

「ていうか、これ！放置！？」

右手を差し出すと、メンドウそうにマリーベルが指を鳴らした。

いきなり、どこからか現れたのは……。

「こ、こいつは……」

「リンカーンエルモよ」

「リ、リンカーン」

そいつは、顔だけ確かにリンカーンで首から下は赤い毛に覆われていた。

「元アメリカ大統領。ケンタッキー州の貧しい農民の出身よ。ずっと南部から出てた大統領だけど、彼は北部出身だったから当時は南部の11州が『アメリカ連合国』を立て分離を図ったわ」

まるつきりリンカーンじゃないか！！なんだよ、いつたい。

「ガヴァメンテユGovernment of the ビーパーpeople, by ザthe フオーpeople for the ビーパーpeople」

「は？なんだつて？」

「『人民の人民による人民のための政治』ゲティスバーグの激戦の戦没者追悼式典でリンカーンが行った演説の一部ね。けどこれはリンカーンが考えたんじゃないやなくて、説教師パーカーの著書から引用したらしいわね」

「NO!NO!It is not mimicry, it is a fellow that mimicked!」

「何だつて？私英語は1なんだよ！」

「マネじゃない。マネしたのは奴だつて言ってる」

佳奈はマリーベルを尊敬の眼差しでみつめた。

ふいにリンカーンエルモが佳奈の手を見た。

「oh to poor!!」

「おお、可哀そうに。だそうよ」

「何が？」

「the handd!」

「その手」

「何？直せるの？」

「It leaves it to me」

「私に任せなさい」

「おお」

いきなりリンカーンが右手をくるりと回して、天へ掲げた。

「Magikal ruchenji!!」  
マジカルチエー  
ンジン

その手の中に、ハート型の飾りのついたロットが現れる。さらに、ピンクと白のフリフリの服が現れキャピキャピと体をくねらせる。完全に引いている佳奈の右手を、ポンと叩いた。

「おお！治った！」

「Happiness to you」

「あなたに幸福をつて」

マリーベルは、うつとうしそくにマシンガンを構えた。

ドガ　　ン!!!

リンカーンエルモは星になった。

つていうか、さつきからへんなエルモ多くない？

佳奈は首を傾げた。

「しょうがないじゃない。ここはエルモ族の村だもん。それとも黒エルモの方がいい？」

いえ…遠慮しておきます。

と、その時、目の前に何かが立ちふさがった。

「ん〜？」



佳奈はその目の前のものをポコスカ叩く。  
上を見上げると、顔があった。人間の顔だ。っていつかこの顔どこかで見たような…？

すると、その人間はいきなり叫んだ。

『そこしりば どうりりサクチ』

「あ ……」

私は思わず叫んだ。この人、ば どうえいじさん…。  
そう思った瞬間。

「ズドドドガボン！」

隣にいたマリーベルの手にはガンマンが…。

「わわわわわわ ……」

佳奈はマリーベルにダメでしょ！と叫んだ。

この人、一応芸能人なんだよー！？偉いんだよー！？何、倒してんの…！

「だってハゲてるじゃん」

そういう問題じゃなああ ……！なんだコイツ。主人か？

主人が原因か？

っとうかさつきからどんだけつつこめばいいの！？私…！！

「大丈夫よ。もうすぐ、エルモ族の村は抜けるから」

マリーベルがふつとガンマンから出ている煙を消す。

そういう問題じゃないと思うんだけどな…。

ていつかさっきの、ば どうえいじは何だったんだ…！！文字数がムダになっただけじゃん…。

つつこみながらも、佳奈はマリーベルを追った。すると、急に視界が開けた。

そこは一面の野原！でも、その中に誰かいる…ってよく見るとエルモ…？

なんあのあれー！と、マリールベルの肩を叩く。

「あれは『赤地牡丹唐草文天鷲絨洋套エルモ』ね」

読めね　　！！なげ　　！！

佳奈は盛大につっこんだ。

するといきなり赤なんとかエルモが口を開く。

「信長の私物で最も有名。西洋の素材、ビロードに東洋の牡丹唐草の文様が……」

『ズドガンボド　　ン！』

エルモは一瞬にしてグチャグチャになった。

「知ったかぶりもいいところよね」

「……」

マリールベルって恐ろしい…。

そしてしばらく野原を進んでいると…。

『ワン、ワン、ワン、ワン、ワン！！！』

レイが立ち止り、激しく吠えだした。

「レイ子ちゃん！？どしたの！？」

『ワン、ワン、ワン、ワン、ワン！！！』

「どうやら来るようね…ラストボスが…」

マリールベルが静かに懐から何かを取り出した。

と、それと同時に…。

『ウガアー！！』

「ひっ！！！！」

奇声を発しながら巨大なエルモが現れた。

「出たわよ。『How manyエルモ』が」

「How manyエルモ？」

佳奈が質問したとたん、砂ぼこりが舞い、エルモが動き出す。

『How many Kanas do you have? I

have one Kana! oh!! my Kana!  
『!』  
……何あれ……。

「ラスボスよ」

いや、そうじゃなくて…。

「ズドオン!!」

はやくもマリールベルがガンマンを発射!!  
でも、全然きいてない!!

『How many How many? h a h a h a h  
a!!』

…相変わらず呟いている英語は意味分かりません…。

マリールベルは舌打ちすると、2発目を発射!今度はライフルとガンマン、ダブルだ〜!

『ズドガン!!』

でもやっぱりきいてない!!それどころか笑ってるし…。

『How How many many many』  
……。

「もうこうなったら切り札よ。佳奈!!」

マリールベルは佳奈に向かって何かを放りなげた。見ると、ハート形のステッキ。

「これ、さっきのリンカーンエルモが持ってたヤツ…」

「それを振って、『majikaruche~nji!!』!」と叫びなさい!!」

え ……!!いい、一応私にも羞恥心というものが…。

「死にたいのか!?!」

ハ…ハイ…言われた通りにしまあす…。

佳奈は1つ咳払いすると、ステッキを振った。



……うわあ…なんとも個性的な必殺ですね。

エルモは硬直した。そして、次の瞬間。

『ウガ ツ!!!』

思いつきり地面を叩くエルモ。そのせいで地面に亀裂が入る。

そして、丁度佳奈の真下の部分に亀裂が入り、2つに割れる。

そして、その真ん中にいる佳奈はその隙間に落ちる!!!

「キ、キヤアアアア!!!」

「カナ様!!!!」

その時、誰かが佳奈の細い手をキャッチした。見上げてみると…。

「ユージン!!!!」

それは紛れもなくユージンだった。清潔で質素な服が汚れ戦乱の後が窺える。

「ユージン!!!無事だったのー!?!」

佳奈はビツクリして目を見開いた。

「この私が、黒エルモごときに負けると思えますか?」

ユージンは笑みを浮かべた。

「あのさあ…感動の再会はいいんだけど…」

マリーベルは、2人の肩を叩いた。

そして視線を移したその先には…。

「…………へ?」

「さきほどのHow manyエルモが怒りのあまり進化したようです。あれは、キング・コングエルモです…」

そこには、顔だけエルモで、体が巨大なキング・コングという何とも奇妙なエルモが仁王立ちしていた。

(うわあ…なんか、すっごく死の予感……)

巻ノ九 マリーベルは最恐！！（後書き）

何ですかね、この話し。ゲスト多すぎですよー……まあっこん  
じゃダメです。

サブタイトルも意味不明ですね。

## 巻ノ十 K2エルモ

さすがにやばいなあ。なんて考えていると、ふいにポンツという軽い音がして煙が湧き上がった。

「な、なに!？」

あわあわと煙を払うと何と、オカンの呪いが解けた。

「おおあ

!!!!!! 我は自由じゃあ!!!」

誰だよ……。

マリーベルはそつと呟いた。

キング・コングエルモ 略してK2エルモ（どこの科学兵器!？）は、大きな目をパチクリさせて3人を見た。

「すごい、本物は始めて見たわ。……本当に虹色なのね」

「ええ」

僅かに興奮した様子で2人の使用人が言う。佳奈は顔を引きつらせた。

まるで玉虫を滅茶苦茶に張り付けたような鮮やかな色で、K2エルモは立っている。

一番キモチワルイのは、顔が金の所だろう。すごく堅そうだ。

1分ほど無言でお互いを見つめた後、K2エルモは口を開いた。

『! “ # \$ % & ? ”』

「……………」

「……………」

「……………」

「ねえ?」

「何かしら?」

「何でしょう?」

「今何て言った?」





「いえ、リンカーンエルモのせいよ」

……なぜ、心の声が？

まるで先生に怒られた小学生みたいに、罪のなすりつけ合いをしていると、いきなりK2エルモが膨らんだ。

「まずいわね。攻撃の準備をしてるわ」

「どんなだよ！」

マリーベルはチラリと佳奈を見たが答えなかった。面倒くさそうに舌打ちはしたが……。

代わりに、しばらく首を捻り指笛を吹いた。

ポワーン。

『呼ばれて飛び出てパンプリリン！』

「こ、この声はアクビちゃ」

「ナポレオンエルモよ」

「ナツナゼ？」

確かにピンクの煙が消えると、首から下がエルモのナポレオンが馬に乗って現れた。

『余の真の栄誉は40回の戦勝ではなく、永久に生きるのは余の法典である』

「いきなりなにさ……」

英語じゃないのにホツとしつつ、思わず眉を顰めた。

「ナポレオン。ちょっと盾になりなさい」

マリーベルがさらっと恐ろしいことをいった瞬間、K2エルモがボーンと奇妙な音をたてた。細い針のようなものが次々に放たれる。

『ああー！』

野太い悲鳴がした。見ればナポレオンが馬からずり落ち血を吐いていた。

『げぼっ！フ、フランス……ぐ……ん……たい ジョセフィーヌ』

ナポレオンも星になった。

「えっもしかしてホントにただの盾？ていうか、ジヨセフィー又つて誰？」

マリーベルは右手で髪をかき上げて、億劫そうに説明した。

「ナポレオンの最初の妻よ。6才年上だったらしいわ。でも彼は離婚して、オーストリア皇帝の長女マリー・ルイーゼ19才と結婚したの。年の差22歳よ死ぬロリコン。これによってナポレオンは大陸の王になったけど、ルイーゼは故国の敵ナポレオンを憎悪して、子供の頃一番嫌いな人形にナポレオンって名前をつけてイジメてたらしいわよ。まあ結婚後は心を許したらしいけど。死ぬロリコン」

「そ、そうデスカ…」

やや圧倒されて引きつった笑みを浮かべる佳奈を放置して、マリーベルは九字を切った（誰かつっこめっ！） 主人公はいったい誰？

「臨・兵・闘・者・皆・陳・列・在・前」

K2エルモはその力で一瞬足止めをくらう。

マリーベルは指笛を吹いた。∴現れたのは？

「今度は何？」

「孔子エルモよ」

ドドンという効果音付きで現れた場違いな服装のおじさんエルモは、K2エルモを振り仰ぎ、いきなり人生を諭し始めた。

『子曰く、「学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦楽乎。人

不知而不愠、不亦君子乎」』

「な、なんじゃらホイホイ」

佳奈チーン。ご愁傷様…。

「勉強したことを繰り返し考え、繰り返し行っているうちに、その道理が（中略） 本当の君子なのではないか…ということね」

「おおお！！」

こいつは天才か？なんでも知ってんなあ！

「お褒めに預かり光栄です」

「いや、だから人の心を読……まあ、いいいや」

孔子エルモに諭されたK2エルモはなぜか泣いている。意味が分かったのか……？

何という疎外感……。

1人冷たい秋風に吹かれていると、マリーベルが何かを取り出した。「な、なんデスカそれ……」

どこから取り出したのは、両端に金属の重りのついた紐のようだった。

「何って？流星錘りゅうせいすいだけど？」

「何だソレツ！」

明らかにアブナイものだ。

「中国武術におこる暗器の一種よ。こんなふうに使うのよ」

ふわりと笑ったマリーベルが紐を握って振り回した。紐は思いのほか長く、6mほど先にいた孔子エルモの後頭部に直撃する。

孔子エルモは星になった。

「分かった？」

「ハ、ハハハハハヒ！」

怪しい笑い声のような返事をした佳奈は、そつと手を合わせた。

こいつはヤバい奴だ。逆らったら殺やられる！

「何か？」

「いえ！」

2人が会話していると、ふいに涙を流したK2エルモが鼻水を啜りながら声を上げた。

「私は本当に感動しました。ぜ、ぜひあなた方の旅にお供させてく

ださい』

「どうぞ」

マリベルは言下に言った。

「マ、マジでか!？」

「ええ、おおマジよ」

逆らったらやられます

。

チャラチャタチャツチャツチャー

キング・コングエルモがパーティーに加わった。

巻ノ十 K2エルモ（後書き）

本当に申し訳ないです。

ミスで、投稿の順番を間違えました。

始めに読んで下さった希少な読者の方、本当にすいませんッ！！悪気はないですッッッ！！

## 巻ノ十一 それはシリアスへの予兆

「さてさて、そろそろ王宮に向かいましょう」  
マリーベルが汗を拭いながら言った。

あ、そうだった…本来の目的を危うく忘れかけていた。

「っていうか読み返してみると文字数すごいムダじゃない？」

「空は青いわねえ…」

マリーベル、誤魔化すな！！！！

そんな佳奈を窘めるようにユージンは言った。

「カナ様、このままでは大遅刻です。はやく王宮に行かないと私の首が飛ぶことになります」

うお、さらし首の刑か！獄門獄門！マジグロいんですけどお！  
気が付くと佳奈の周りには誰もいなくなっていた。急いで後を追う。

森を疾走する美女&美男。ちなみにこの美女というのはマリーベル  
のことで、佳奈は含まれていない。

と、森を抜ける佳奈はおかしなものに出くわした。

そこは川のほとりだった。一匹の赤エルモが、体育座りしてため息  
をこぼしている。

「人間（？）って、何分息を止めれば呼吸が止まるんだっけ…」

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

呆れてものも言えない空気の中で、佳奈は口を開いた。

「マリーベル。あれ、何…？」  
「……あれは自殺願望エルモね。見てるだけでブルーになるわ」  
そういうと、マリーベルは佳奈が持っているハート形のステッキを手に取ると叫んだ。  
「M a j i k a r u c h e n j i ! ! !」  
ポンツと自殺願望エルモからケムリが上がる。  
するとエルモは急に立ち上がった。

「うわあっはあ〜い 生きるのってチョー楽しい〜 オレっち恵まれてるな〜 ホラ、空はあんなに赤い！って間違えた。青じゃ〜ん 楽しいなあ〜」  
「そ、そんな使い道が……？」  
「ちよつと脳に電流を流しただけよ」  
「  
どうやって？その疑問を佳奈は必死で飲み込んだ。

「それにしても、このままじゃ王宮までたどり着けないわ…」  
思案気な顔をしたマリーベルは、ふと思いついたように指を鳴らした。

ブウウ  
独特のエンジン音をさせて現れたのは……。  
「ビ、B29」

佳奈は呆気にとられて、バカみたいに口を開いたままそれを見上げた。

「さあ、これでひとつ飛びよ」  
何からつつこんだらいいのだろう？  
何だかよく分からなくなり佳奈はうふつと笑った。  
B29は、5人の上空で停止して梯子のようなものを落とした。  
「それではお先に……」





「ムサイのはお断りよね」

お前がOK出したんだらうとは、言えなかった。ああ、恐ろしや…

「さあ、王宮へ行きましょう」

エンジンは爽やかに言う。この状況で爽やかでいられる奴が普通のわけない！

ヴウウウウウ。

エンジン音が激しくなり、B29が大空を羽ばたく。そういえば、誰が運転しているのだらう？

「さあ、楽しい旅を

」

そつと呟いたのはいつたい？

・ …\*… ・

クレスティア王国。王都ベルディルズ、王宮。

そこについたのは、かなりの時間がすぎた時だった。朝も夜もないため正確には分からないが、あの懐中時計はピタリと6時を指している。AMかPMかは不明……。

スクール水着から、マリーベルがどこから取り出したドレスに着替えた（無理やり）佳奈は、裾をふんずけないように恐る恐るB29から降りた。

「やっぱりこのコルセットがいただけじゃない……」

「それなら、腰ごと取ってさしあげましょうか？」

ピカピカの笑顔で言ったマリーベルは、チェーンソウを掲げた。…敬語が怖い。

「いえ！結構です！ゴメンナサイ！！」

必死に叫びながらペコペコする。

しばらくして許してもらった時、ふと違和感を覚えた。どこがとか、何がとか、そういうことではないけれど、何かチグハグな感じだ。マリーベルも気付いたのか、首を傾げ辺りを見回している。

そこは庭園だ。広大な花畑。色とりどりの花が咲き乱れ溢れている。すぐ近くには噴水があり、中心にある少女の像の手から水が湧き上がっていた。

ちょこんと置かれたテーブルやイスが可愛らしい。

確かに始めて来て、見た場所だが。けれどそういうことではない。

「なに　かしら？」

マリーベルは敵でも潜んでいるのかと花畑を窺ったが、そういう様子でもない。けれど殺気を感じた。

ふわりと香った、甘い香り。甘美な香りが鼻腔をくすぐる。

レイがピョンとジャンプして、佳奈の腕の中におさまった。不安そうにクウーンと鳴くのが妙に耳に付く。

「ね、ねえマリーベル……いったい？」

「分からないわ」

珍しく真面目な顔で言いながら、マリーベルはガンマンを取り出した。

佳奈もマシンガンを渡される。

妙に不安で、佳奈はユージンを振り仰いだ。

「ユージン……」

話しかけると、ユージンがふわりと笑った。佳奈は驚いて目を見開く。それと同時に本能が告げていた。

アブナイ……キケンだ。

たたらを踏むように、ふらふら後ろへ

「どうしたんですか？」

ユージンは言う。今度は妙に抑揚が少ない。おかしい。記憶を遡る。地面の亀裂に落ちかかった時、どこからか現れたけれど、よく考えてみるとありえない。

だって佳奈はエルモの暴走馬車に乗ってやってきたのだ。

いくらこの世界がおかしくたって、あの数の敵を倒し、あまつさえ馬車に追いつくことなど絶対に不可能。けれど、なら。

これは、誰？

急に恐ろしくなる。佳奈は金縛りにあったように硬直した。頭痛がするほど濃厚なバラの香りが佳奈を絡めとる。

その人物がユージンでないと分かった瞬間、ふいにその姿がとろけるように崩れる。

その人物を見て、佳奈は息をのんだ。

「あなたは」

菜の花色の髪をした美しいその人は、ボクと同じ赤い…赤い色の瞳をして優しく笑んだ。

『いつまでも、私はあなたを支えます。あなたに仕えましょう。小さな私の陛下…』

跪いて、忠誠を誓い。そしてその人が、王になった。

巻ノ十一　それはシリアスへの予兆（後書き）

こんなこんなでとうとう十話です！

でも、あまり嬉しくないのは何故でしょう？

次からはいきなり雰囲気が変わって戸惑う方も多いと思われそうですが、  
どうぞついてきていただけると有難いです！

巻の十二 destiny いつか、きっと。遠いところまで

マリールベルはその人物を凝視したまま、得意のガンマンも構えられず呆然と立ち尽くしていた。

そこにいる子供をマリールベルは良く知っていたから。だからこそ。

「なんでこんな所に…？」  
理解できなかった。

夢の中の、暗い闇の底で、佳奈はその人物を見た事があった。身を切るような激しい叫びをあげて、こちらをじっとみた。そして呪いの言葉を残して、黒いバラの中へと消えた。

黒いバラ……花言葉は？いつかあなたを殺しに行きます？。

さようなら。次は 殺しに行きます。

2つの言葉が絡み合って強固な縄となり、佳奈のノドを少しずつ締めあげていく。

確かな殺意が、自分に向けられている。

その事実が、佳奈に焦りを与え戸惑いを与え、けれど何より確かな恐怖を植え付けた。

「あなたは、何？」

堪え切れず佳奈は誰何の声を上げる。

口元だけを笑みの形に歪めて、子供は皮肉るような笑声を零した

「何、だって？ あなたにそんなことを聞かれる日が来るとは思わなかった。自ら忠義を誓った相手すら忘れ去るなんてね」

「ちゅう…ぎ？」

聞きなれない単語。

胸の奥が、うずく。臓腑をかき回されたように気持ちが悪かった。視界が小さく揺れる。脳全体を、何か大きな力で抑えつけられているように感じた。

「くく。くくくくッ！」

あははははは！…！

小さな身体から、地を響かせるほどの笑声が迸る。

佳奈は戦慄した。

おかしい。狂っている。狂ってしまったのだ、この子供は。

ふいに袖をひかれ、佳奈は振り返った。

そこにいるのは、青い顔をしたマリーベル。

彼女は笑い続ける幼い子供を示し、短く言った。

「彼は、私の弟よ」

「？ ツ。弟！」

マリーベルは躊躇いがちに首肯した。

「そう。シエーズス・ディア・カルデオス・クレスティア。正真正銘、私の弟…」

「名前、ながつ！というか、え？なんか今最後に『クレスティア』って言わなかった？」

「ええ、言ったわよ」

「えと…」

佳奈はまさかと思い。けれどあまりに突拍子のない考えに、質問を躊躇した。

バカけてる。あまりにバカけている。でも。  
佳奈はゴクリと唾を呑んだ。

「……この国の名前ってなんでしたっけ？」

「クレスティア王国」

「もしかして、もしかします？」

「おそらく。ご想像の通りかと？」

マリーベルは自嘲気味に笑んだ。

そして、ドレスを少し持ちあげて見せる。

「お初にお目もじ仕ります。女王陛下<sup>クイン・オブ・ローズ</sup>。クレスティア王国王女のフ

エルデニア・エル・マリーベル・クレスティアでございます。以後

お見知りおきを」

「なっなっ…！」

確かにいつも超自分勝手に、女王様な感じだったが、まさか本物の王女様だったとは…。

現実が小説よりも奇なり。とはよく言ったものだ。

「いえ、佳奈。これは小説よ」

「だから心を読むなっ。ていうか、そういうことは言わないの！ 私たちにとっては現実でしょ？」

「可哀そうに…妄想変態少女が思いつきで書いただけのバラの世界が現実なのね……」

「マリーベルもこの世界にいるんじゃない！」

「いえ、実は私は現実の日本に……」

「マジでかー!!」  
「冗談よ」

まったく、もう何やってんだか。  
と、ぶんすか怒りながらも、佳奈は身体から力が抜けたのを自覚していた。

いつの間にか放置されていた子供　シエーゼスに視線をやると、  
彼はすでに笑いやんでいた。  
佳奈の方を見て、泣いるのか怒っているのか、良く分からない表情  
をしていたが、何か激しい感情を抱いているのは明白だった。

落ち着いて、1つ息をつく。  
知らず入っていた力が抜け、肩がストンと落ちる。  
引き攣らせつつも、何とか笑みらしきものを浮かべることができた。

「えっと…それじゃあシエーゼス？」  
「それはこの身体の名前だよ。ボクの名前じゃない」  
「身体…？」

言っている意味がよくわからない。  
うん。バカだから。私。

問いかけるようにマリーベルを振り返る。  
リンカーン、ナポレオンの生い立ちや、孔子…はたまた陰陽道に通  
じる超天才王女様は、どうやら何か察したらしい顔をさっと青くす  
る。

再び首を戻した先の、シエーゼス。

コテンと首を傾げる。



「……つまり？」

「彼はシエーゼスじゃないのよ。佳奈」

「え？でも今さっき自分で……」

いきなり弟宣言を撤回したマリーベルに、ますます眉を顰める。

「身体は確かにシエーゼスね。けれど、中身は何か別の物らしいわ」「はあ？」

思わず情けない声がもれた。  
ますますわけが分からない。

ラノベならお約束…な気がする展開だが、生憎佳奈は本を読まなかった。

本を開くと目がシヨボシヨボして、一瞬で眠りについてしまう。一時本気でギネス挑戦を考えたほどの速さでだ。

そんなおバカちゃん佳奈にイラリときとマリーベルは、ああもう！と唸り早口に説明した。

「つまり！元々私の弟だった人物……仮にAとしようかしら。

そのAがいて、そこに違う“何か”BがやってきてAの中に入り込んだと、そういうことよッ」

「は、はい」

「バカは嫌いよ。これ以上イライラさせると体中に風穴あけるわよ」「了解しました。隊長！」

びしりと敬礼。 お前いつから隊長になったとか、絶対思っちゃいけない。うん。

……で。

「それなら、あなたは誰？」

再び視線をシエーズもどきに。

「誰って？」

子供は笑った。くすくす、くすくすと。

そして、ぎゅっと口角をつり上げて笑って見せた。

「当ててみてよ」

それが泣き笑いに見えたのはなぜだろう。

まるで、世界を手に入れたとでも言うような、壮大な笑み。だけれど。

「どうして、泣いてるの…？」

佳奈の声は、風に霧散してしまうほどに小さく。近くにいたマリ―ベルにさえ、よく聞えなかった。

佳奈は、目の前の子どもを見つめた。

知っている？ いや、知らない。

会った事は？ ない。

でも、子供は私を知っている。それも、よく。  
？

そこで何かに気付いた気がした。

けれど、そこから思惟を深める間もなく、むせ返るようなバラの匂いが佳奈の思考を立ち切った。

「うつなに？」

見れば、子供が右手を掲げ笑みを深くしている。

彼を守るように、赤いバラの花弁がグルグルと廻っていた。

その花弁は手の平の辺りに集まって、ねっとりとした赤い粘土のようなものに姿を変える。

光が、膨れ上がった。

マリーベルが顔色を変える。

辺りの空気が、佳奈をからめとる。

叫び声。

誰が叫んでいるんだろうと思うと、自分の口から声が迸っていた。

赤い、赤い、いや、もっと生々しい、黒みがかかった色。そう、鮮血のような赤黒い光が、弾けて、佳奈を睨む。

目を閉じる事もできない。

けれど、その目には何も映っていない。何も見えない。

見えない。

闇。

戦慄。

恐怖。

ねええ、みんなどこにいるの？

一瞬して訪れた衝撃。

けれどそれは、思っていたのと違う方角から。

肩にズキリと痛みが走り、押し倒されたかと理解するのにまた一瞬。

そして、上に誰かが乗っていると気づくのに、さらに一瞬。

緩慢に首を持ちあげ、佳奈は目を見開いた。

バラの花弁、血のように赤黒い花弁　　ッ。

「　　ッ！」

そう思い込もうとした。

けれど違う。それはもっとどろりとしていて、バラさえも押しつける鉄のような異臭を振りまく。

本物の、血だ。

「マリーベル!?!」

左の肩だ。そこだけドレスが破れて、変色した肌が見える。

そこから、止めどなく血があふれ出す。

染める。染める。

自身のドレスに、佳奈のドレスを。

そして、草を、花を、目に見えるもの全てを。

染める。染め上げる。

そこを、小さな花畑のように。赤い、バラの、花畑のように。

狂っている。

最初に子供に抱いた感情を、再び抱く。

子供は、まだ、笑っていた。

赤い花弁を浴びて、笑っていた。

それが目に焼き付いて、佳奈の眼裏まで赤く焼いた。

これは何？

全身が燃えるように熱い。

今さっきまでの恐怖もない。

マリ－ベルが傷ついた哀しみもない。

何も、ない。

けれど、無ではない。

あるのは、赤い光だけ。

これは何？

これは 怒り。

ドクンと鼓動。一瞬、時がとまる。

閃光が散った。

巻の十二 destiny いつか、きっと。遠いところまで (後書き)

なんかすごいことになりました。

一体あのパワフル変態コメディー(？)は何処へ…

ちよっぴりあのバカな雰囲気の名残惜しくなった作者です。

巻ノ一三 overture 始まりの旋律

バラたちの本体は花だが、その香りから別の形を取ることでもできた。別の花や虫、色々な動物に人間。または全く別のモノ。その中で最も好まれたのは人間だった。

その姿を取るためには、大量の魔力が必要で、それはつまり自らの力の誇示に繋がったから。

しかし雨の日など、香りのしずらい日は形をとれない。

一年のうちで雨の多い雨季は、バラたちは不便な姿での生活を強いられた。

けれど、自分はそんなことを感じたことはなかった。

どんな雨の日だろうとも、私の姿は揺らぐことすらない。どんなに力を使おうと、この魔力が尽きることはない。

王家の血には連なるが、分家の令嬢にすぎない私に、その力は何ももたらさなかった。

本能で何かを感じるのか、動物たちは近寄ってもこなかった。使用人たちも、恐怖の眼差しで見つめるだけだった。

社交の場で、やっかい事になりかねない私に、関わる者はいなかった。父は私を冷ややかに見降ろした。

実の母は、

「きゃあああ！！来ないでッ殺さないでッ化け物ッ！！」

叫んで、座り込んだまま後ずさった。

私は、差し出しかけた腕を、すっと引っ込めた。

化け物。

化け物。

化け物ッ！

「ひっ！」

飛び出した廊下で、耳にこだます叫び声。  
両手で顔を覆って、床に蹲る。

「化け物……わたしは、ばけものなの？」

答えはない。ここなら、肯定の言葉は帰ってこない。

けれど、誰も否定してくれない。

誰も、誰も、誰もいない。

私の周りには、誰もいない。

私は1人。

私は、何？

みんなと違う。

母とは違う。



母から生まれたのに、母とは違う。

何で？

「化け物だから。私が」

ヒトじゃない。

ヒトではないんだ。

傷つき過ぎれば、痛みも感じない。

その傷は、塞がることを知らず、ただ穴を広げていく。

暗い暗い闇。真っ暗な深淵の闇。

私はそこを覗きこんで…そして。

私の眼は、光を失った。

見えない。

何も、見えない。

私は闇を抱いて、闇は私を抱いて、ただ、そこにあるだけ。

私の目が見えないと知っても、誰も嘆きはしなかった。

「天罰が下ったに違いないわ」

耳に届いたのは、そんな言葉だけ…。

何に対する天罰なのか？そんなことは関係ない。

私の存在が、罪に値するから。

昔、何かの書物で読んだ事がある。

人は何か大きなショックを受けると、光や声、音を失ったりすることがあるらしい。

けれどそんなこと、誰も思い当たりはしないだろう。

だって、私は化け物だから。

化け物には、人の理ことわりは通じない。

私に与えられた部屋の片隅で、両耳を押さえて座り込む。

明りはつけていない。

付けたところで、私には分からないから。

今は何時？

もう時の感覚もない。

もしかしたら数分だったのかもしれないし、数日だったのかもしれない。

けれどぬばたまのごとき闇の中、それを知るすべはなかった。

誰も気づいてくれない。

みんな、どこにいるの？

どうして、話しかけてくれないの？

お願い。教えて。

教えてよ。

ワタシハ、ドコニイルノ？

闇の中に、光が散った。

バラが、濃厚なバラが、私の嗅覚を麻痺させる。

締め切った室内に、風が吹いた。

どこから現れたのか、オレンジ色の花弁が全てを染める。  
頭の奥が、石でも詰められたみたいに重かった。

おぼろな意識の中で、1つの考えだけが全てを支配する。

みんないなくなればいい。

私に苦痛を与えるモノを、全て粛清しよう。

殺せ、殺せ、殺せッ！

全て壊してしまえ。

たてた膝の中に、頭をうずめる。

風は激しさを増し、丈夫な壁や天井が悲鳴を上げた。

私の周りの空気が、ふっと粘度を増して膨れ上がった。

全身に熱が廻り、瞬間的に浮遊感に包まれる。

それから後はもう、なんの記憶もなかった。

気付いた時、私はベッドの中で眠っていた。  
あの魔法の衝撃で、どこか遠くに飛ばされたのだろう。ぼんやりそ  
う考えた。

寝返りを打つと、美しく飾り立てられた家具たちが目に映る。  
これだけのものを無造作に置く事ができる部屋の主は、いったいど  
んな身分なのだろう…？

？

ふと、何か引つかかった。  
おかしい。おかしいけれど、いったい何？

「  
！」

ふいに気付いた。 見えている。

「目が、見える…」

あまりクリアではないけれど、確かに全てが見えていた。  
全身が歓喜に震えた。

そういえば、こうしてしつかりと眠ったのはどれだけ振りだろう。  
ずっと眠れなかったから、こうして眠ったのがよかったのだろうか？  
それとも、あの母がいないと知っているから？

興奮して、大量の思考が絡まった。

私は、自由だ！

その時視界に何かがつつり、私はそれを追う。子供が、いた。

柔らかなそうな胡桃色の髪の毛、赤い瞳の子供。

ぴよこんと跳ねた髪と、くりくりと大きな目が、どこかウサギを連想させた。

その首が、コテンと傾いて私をジッと見る。

「名前は？」

好奇心にきらきら瞳を光らせて、子供は言う。

私は視線を逸らした。

穢れのない子供が、妙に心をざわつかせる。

そして自分の名が、重い錨を落として私の思考を止めさせた。

だって、そうでしょう？

名は、化け物のモノだもの。

私は違う。

この子供は知らないから。

だから私は化け物じゃない。

私は、化け物の名なんて名乗らない。

それなら、私は誰？

「私は」

口ごもった私を、子供は遠慮もなく見つめた。そしてしばらくして、ポツリと呟く。

「忘れちゃったの？誰も呼んでくれないから？」

ドキリと心臓が跳ねた。

それは秘密を当てられた時の、焦りと不安、ちよっぴりの怒りが混ざった気持ち。

「ボクもそうなんだ。みんなボクを忘れちゃったんだ。見えないみたいに、いないみたいにするんだ。ねえ、あなたには、ボクが見える？」

穢れない子供。純粹で、真綿のように真っ白で……。

けれど、違う。

子供は、透明だった。

何だか分からない衝動にかられて、私はベッドから飛び降り、子供の手を掴んだ。

「私には、あなたが見える。見えるから」

驚いた表情をした子供は、ふと笑みを浮かべる。

「ありがとう。あなたの名前、みつかるまで、ボクと一緒にいてくれる？」

それが、私と子供の出会いだった。

全ての感情が、佳奈の元に流れていた。

彼女にとって長い物語も、佳奈の元にはほんの数秒で届く。

脳の中で、記憶が絡み合う。

何が何だか分からない。

分からないけれど、全身に熱が廻っていた。

これは、記憶の中で、あの恐ろしい考えをした時と同じ。同じだった。

子供のものとは違う、新たなバラの、香りがした。

巻ノ二三 o v e r t u r e 〱 始まりの旋律 〱 (後書き)

えーとお…なんかもう、気にしないでください。



巻ノ十四 a c c e l e r a n d o 不協和音の調べ

その子供は、王族の子供だった。

とは言っても、王位継承権なんて回ってくるはずもない第8子。その上魔力も安定せず、この辺境にある城で幽閉同然の生活を送っていた。

だからなのか、私がこの城に住むようになるのに、対して苦労はなかった。

城に住む誰も、この子供に干渉しないのだ。

まるで腫れもののように、できるだけ触れないように、けれど膿んではしまはないように、必要最低限だけの管理をする。

子供が、こんな空虚な存在になってしまふのは、当然ともいえる環境であった。

その中で、子供がねじ曲がらずに真っ直ぐに育っているのは、奇跡のように感じられた。

「姉さま。今日もボクの勉強みしてくれる？」

屈託ない顔をして、子供は私にそう語りかける。

名を名乗れない私のことを、子供は『姉』と呼んでくれた。

誰にも相手にされず、やることもなく詰め込んだ知識が、こんな所で役立つなんて思いもしなかった。

私はもちろんというように頷いて、子供の待つデスクの方へと向かう。

この頃では少し、『楽しい』とか『嬉しい』とか、そんな感情に触

れられるようになった。

そんな気持ちにしてくれた子供が愛おしくて、この子のためになら、なんでも出来る気さえした。

子供の開いている本を覗き込んで、順番に、丁寧に、たくさんのこと話を話す。

時々雑談も交えて、笑いあって、時折お互いの間に触れて……。けれどそんな所まで、自分たちは繋がっているように感じられた。

こんな時が、いつまでも続いてくれればいい。心から、そう思った。

けれど、壊してしまったのも、確かに私だった。

ある日私は、ふと忘れていたことを思い出した。

私の生まれ育ったあの家は、今どうなっているのだろうか？

知る事は簡単だ。

城にいる使用人たちに、ただ何気なく私の家の名を放るだけ。

こういつちゃ何だが、私の生まれ育った家は、それなりに由緒のある家柄だった。

前述した通り、系譜を叩けば王家にまで繋がっている。

誰もその名を知らないわけがない。　なのに……。

使用人の1人が、洒落だとも思ったのだろう。笑いながら答えてくれた。

『その家は、何十年も前に断絶しているだろう?』と。

意味がわからなかった。

ただ1つだけ理解できることもある。

これらはすべて、私がやったことだということだ。

あの後も、たくさんの使用人に話しを聞いた。

家の名を出しても無駄だということに気づき、途中からは私の名を出した。

その2つに、関連性を見出したものは1人もいなかった。

けれど、代わりに誰もがこう言う。

『それは、王家の姫の名だ』と。

もちろん、そんなわけではない。

けれど、今落ち着いて考えて見ると、そうだったらどんなに良いだろうと考えずにはいられなかった。

我が身には大きすぎるこの力も、私が王女だったなら、何か違ったのかもしれない。

周りの視線が、態度が、言葉が…。

何もかも…私の人生そのものが。

その誘惑は私を飲み込みかけて、さらにこう問いかける。

私が王女だったなら、あの子供は、本当に私の弟なのだよ。と。それは素晴らしくないだろうか？  
姉さまと、呼ばれるだけではない。私は本当の、姉になれる。

「えさま…姉さま！」

そんな甘い妄想から目覚めさせるのも、私が求める子供のものだった。

イスに腰かけて、ぼんやりと思惟を巡らしていた私を、子供は心配そうに覗き込む。

その様子も愛おしくて、もはや私はこの子なしに生きていけないだろうとさえ思えた。

「どうしたの？」

問いかけ。

答えは笑み。

「どうもしてないよ」

「ウン」

言下の返答。

私はどうしたらいいのか分からなくなった。

「どうして、嘘だと思うの？」

「姉さまが、とても悲しそうな顔をしているから」

子供だからこそ、率直な答え。

それは私の心にも、真っ直ぐに響く。

私は、悲しそうなの？

少し思考を巡らせ、答えはすぐに出る。

そう、確かに悲しかった。

この子の本当の姉ではない自分。

自身の手で、家族の存在すらも消し去った自分。

そして、そんな力を持つ自分が。

「ボクには、話してくれないの？」

この子に話す？

話しても、楽しい話でもないのに？

「ボクは信用できないの？」

違う。

そんな風に言わないでほしい。

話しちゃいけないの？

むしろどうして、話してはいけないの？

そんな理由はない。

それよりも、子供に隠しごとをしているのが、酷くつらく感じられた。

だから。

「私は」

本当のことを全て話した。

これまでの半生。自信の持つ大それた力。

親や、周りからの迫害。

母親に拒絶されたこと。

そして…。

「私が、全てを消し去ってしまったの…嫌だと思ったもの全て、何もかも……」

そう、多分自分自身さえも。

私は名乗らないんじゃない。

本当に、名前を無くしてしまったのだ。

けれどそれでは、昔の自分の名を持っている、王女の実在は何なのだろうか？

少なくともこれまでに、そんな人物を聞いたことはなかった。

淡い期待が、心を染める。

それは、誰かの教唆の声。

甘い…甘い囁き。

最後に、その王女の話までしてしまった。

これを、後にどんなに後悔するかなんて、考えもせず……。

「私が、その人だったらよかったのに」

勝手な望みを言霊にのせて、この世界に放ってしまった。  
深い意味を考えず。ただ欲望のままに。

どれくらいかは分からない。

けれど、長い話になっていたらう。

なのに子供は、最後まで聞いていてくれた。

真剣に、相槌を打つのも忘れて。

ただ、最後の言葉を聞いた時。久しぶりの表情を滲ませて、何か言いたげな様子を見せた。

しんとした静寂。

お互い何を言えればいいのか、全く分からなかった。

軽蔑したろうか？こんな私を。

それは、言えや家族を失うよりもずっと、私に恐怖を与えた。

「ボクは、姉さまの過去がどうでも、姉さまが好きです……」

だから、ポツンと零れた言葉には、感動すら覚えるほどに安堵した。  
私はまだ、ここにいられる。

それだけでよかったのに、子供はさらに言葉を続けた。

「ボクも、姉さまが本当の姉さまだったらと、時々考えます。今だ  
って姉さまの言うその王女が、本当は姉さまだったらなんて考えず  
にはいられません。…姉さまが話してくれたので、ボクも少し、自  
分の秘密を話します」

そう言つて、小さく深呼吸をした。  
その瞳には、ありありと不安の色が窺える。  
なんだろうと想像して、けれどそれはどれとも違った。

嫌われないか？

そんな風に戸惑っている様子で、言葉は紡がれる。

「ボクは、王になりたいんです」

小さな子供が、そう言った。

その時ふと気付いた。その意味に。

ずっと放っておかれた子供。

誰からも、気にしてもらえずに、1人ぼっちでいた子供。

夢見たのはきつと、誰もが言葉をくれる存在。

誰かに必要とされたい。

みんな自分に気づいてほしい。

そして誰かに支えてもらい、支えたい。

そんな存在は、子供の中で『王』だった。

その資格を持ちながら、おそらく永遠に巡ってこないチャンス。

可能性がゼロではないからこそ、捨てずにいられない望み。渴望。

この子のためなら、なんでも出来る気さえした。

そう、そんな気がした。

そして、自分にその力があることも知っていた。

望みを捨てられないのは私自信。



子供の、たった一つの望みを、叶えてあげたいと思った。

巻ノ十四 *accelerando*（不協和音の調べ）（後書き）

うん。なぜにこころ暗いのでしょうか？

しかもサブタイトルは毎回音楽用語。いったい何が起きているのか、摩訶不思議。

……もう放置しちゃってください。

巻ノ十五 a b a n d n n e 狂喜のエリア

どうやったたら、子供を王にできるだろう？

まず、王にいらなくなつて頂く。

次に、皇太子殿下に…そして王位継承権第7位までの人物に……。

障害となる者たち全てに、消えてもらわなくては。

それにはどうすればいい？

いなくなる。放棄せざるおえない状況にする。

怪我？病気？事故？失踪？はたまた罪を犯したり？

ダメだ。そんな生ぬるい策で、8人も人を引きづり下ろすことなんてできない。

もっと確実な方法があるでしょう？ そう。あの時だってそうした。

「殺せ」

殺してしまえ。この世からいなくなれば、王は…あの子供だ。

正直に言ってしまえば、そんなことは簡単だった。

私の持つ魔力は、強い弱い次元ではない。本当に、城1つ、町1つ、国1つさえも、消してしまえる。

たとえば今。私が王宮にワープして、そこを火の海にしたら？…いや、王宮は戴冠式にも使われるし、傷つけてはならない。

中の人のみを選択して始末しよう。できることなら私の時のように、歴史まで変わってくればありがたいが、そう上手くいくかは分からない。

…そうだ。私と同じ名を持つ王女。彼女の存在も確かめなければならぬ。

確かめて…いったい何になるのかは分からない。それでも、行かなければいけない気がした。…魔力のおかげか、私の勘は良く当たる。

ここで急にはつとした。

自分は何を考えているのだろうか？

邪魔な存在とはいえ、彼らは子供の父や兄弟なのだ。死んでほしいとまで、思うのだろうか？

思わなかったら？

そうだとしたら、今私が考えていたことを知ったらどう感じるのだろうか？

嫌われる。嫌われてしまう。

コワイ。否定しないでほしい。

嫌わないで。私のことを好きだと言って。

「私は、あなたお望むようにするから…」

何度も深呼吸して、平静を装えるようになっても混乱は収まらない。殺してはいけないなら、私はどうしよう？

捕まえて、監禁しておく？そんなことをしたら、いつかバレるのは目に見えている。

いったん。殺すという選択肢を除外しよう。

そう考えるのに、どんなに考えても最後の結論は変わらない。

しまいには疲れ果てて、私はぐったりとベッドに倒れ込んだ。

翌朝ふと目を覚ますと、妙に辺りが騒がしかった。

いつも気味が悪いほどに、決まった時間に決まった通りの仕事をこなしていた使用人たちが、慌てた様子に行ったり来たりする。

私はその中で、比較的親しい人物を呼び止め事情をきいた。

『つい先ほどのことだよ。ここに初めての客人がやってきたのさ。それも聞きな、第2位王位継承者の王子殿下だってよ』

天は：私に、どれだけ試練をお与えになるのだろうか？

その王子殿下がどんな目的で来たにしろ、子供がその面会を喜ぶとはどうしても思えなかった。

昨日考えたことを、実行しないとはい言い切れない。

急に寒気がして、私は自分の肩を抱く。歯がかみ合わないまま、力チカチと音をたてる。

怖い。理屈じゃない。私には抑えきれないモノが、私の中に存在する。

何か大きな化け物が、自らの存在は誇張し始める。

嚴重に鎖で縛りあげ、身動き1つできないようにしたのに…その鎖はとつくの昔に噛み切られている。

後はもう、鈍い軋みを上げながら、順に拘束を緩めていくだけ。

私にはどうにもできない。

私はずっと黙っていた。周りの人々の言葉に、間違いがあることを私は化け物ではない。化け物は、この身体の中に巣くっているのだ。だから厳密には私は化け物ではない。

なんて、そんな些細なことを気に留める人が、いるはずもないが。

妙な倦怠感が身体を苛み、私は思わず蹲った。

それとほぼ同時に、いきなり膝に衝撃が走り私は尻もちをつく。

なんだ、と顔を上げると、そこには愛しい子供の姿。

けれど常のような笑みはなく、代わりに泣きそうに歪んだ顔。どうしよう。小さな声で、それだけ言った。

「お兄様は、好き？」

私は独り言のように、問いを漏らした。

子供は座りこんだ私に抱きついてきながら、震える声で答える。

「分からない。…ボクは、兄様に会ったことがないから」

「それなら」

死んでも構わない？

その問いかけは、かろうじて飲み込んだ。けれど伝えたくて…。

「……私は、あなたのためなら自分の手を汚せるわ。それが私の幸せ」

俯きがちにそれだけ言った。  
抱える子供の身体が、いつもより頼りなく感じる。それも仕方がないだろう。

生まれてから一度も会ったことのない弟に。先に訪問の窺いを出さないほどの見下しよう。

いい結果なんて、期待するだけアホらしい。

「臣籍降下ッ!?!」

子供特有の甲高い声が、決して狭くない部屋に木霊した。

その向かいのソファに腰かける王子は、眉間に皺を刻みつけると深く頷いて見せる。

もつとも、でっぷりと肥えた彼の首元は、脂肪と皮膚で首肯が困難な様子だったが。

そんな王子と相対すれば、子供の線の細さは際立ち、今すぐにも押しつぶされそうで私は気が気ではなかった。

使用人だと偽り入室を請求して、なんとか話に立ち会っているが、今の自分には何もできない。

あのブタの口を塞いでやる？

ふと危険な考えが脳を満たすが、それでは子供の立場が悪くなるのは目に見えている。

「どうということなんですかッ!ボクがいったい何をしましたッ!?

そんな酷い仕打ちを受ける、明確な理由を提示してください!!!」  
「ぎゃーぎゃーとうるさいなあー。わたしが直々に来てやったのだから、それだけでも感謝するべきだと思うが？」

「それなら感謝の言葉を述べさせていただきます。このような境界の地に、わざわざご足労いただきありがとうございます。お疲れの所申し訳ないですが、ボクの問いに答えて頂きたい」

「ちッ」

必死な様子の子供に、なぜそんな態度を取れるのだろうか？

これ以上、あの汚い物体をここに置きたくなかった。

握りしめた拳。爪が食い込んで、皮膚が裂ける。

「理由なんて簡単だ。継承者は増えすぎた。あまりに増えれば争いに転じかねない。だから減らす。それだけだ」

「…それ、だけ」

勝手にそう思った権力者たちが、本人の意思も聞かず、そうやって

その時私は普通じゃなかった。だから、子供も普通ではないことに気付けなかった。

ただ抑えようのない怒りが体中を駆け廻り、明確な形を成そうとしている。

「お姉さま……」

ふいに子供が呟いた。王子が怪訝そうな顔をする。

その該当者を探したのだろう。部屋の中を彷徨った視線が、私の元で止まる。

徐々に目が見開かれ、唇が動く。



アマールエ。

ああ、その名は。

化け物のもの？それとも例の？

「なあに？」

できるだけ自然に答えた。

ふと振り返った子供が、先ほどとは違う風に顔を歪ませて嗤う。

「殺して。ボクのために。この男を」

王子の顔が、一瞬きよとんと緩む。

返事の代わりに、私は右手を掲げた。私も嗤っていた。

私の中の化け物が、完全に鎖を振り払う。

先ほど裂けた皮膚から異常なほどに血が流れ続ける。

「丁度いいわ。惨たらしく殺してあげる」

むっとするほどのバラの香り。そして。

もうそこに、ヒトの形をしたものはなかった。

「臣籍降下？」

子供が言葉を繰り返した。

あたりに散らばった肉片を踏みつぶしながら、嗤いながら。

「おかしい…おかしいよッ！意味不明！あはッあはははははは」

狂気の渦が巻く。取り込まれたら、もう戻れない。

これは妄想じゃないから。実現可能なユメだから。諦めない。たとえ死んで、妄執だけとなっても。

そこに扉をけ破って、数人の男が乱入してきた。

「なッなんだこれは…」

「このブタさんの世話係かしら？」

私が問いかけると、彼らの瞳に恐れが過る。

知ってる。いつもこうだったから。

みんな自分を見るだけで恐れた。忌み嫌った。

もう、我慢して耐えたりしない。

再びバラの香り。

悲鳴すらなかった。

「この王子が戻らないと不審がられる。……ねえ、お姉さま？今から、大丈夫？」

何がなんて聞かなくても分かる。

頷くに決まっている。

「掴まっついて」

子供を抱えて、私は目を閉じた。

ワープ。

王宮へ。

卷ノ十六 z i t t e r n d 途絶えた主旋律

1時間を待たずして、宮殿の中から王と7人の継承者が消えた。残りは1人。

私はあたりを見渡した。

抵抗しようとした者全てを惨殺した。

当然辺りは血の海。けれど私は一滴の血も浴びていない。子供も同じだ。

頭痛のするような鉄の匂いと、思考をマヒさせるようなバラの香り。2つの混じり合ったここは、もはや正気を保つことは不可能な場所。

私はきつと、うつとりとしていた。もう少しだ。もう少しで、この子供が王になる。

この子の、たった1つの望みを叶えて。

私の思惟は、その子供によって破られた。胸を押さえて蹲っている。姿が、かすかに揺らいでいる。

さーと血の気が引いて、急速に正気に戻された。

何？なに、なに、なんなの？

ただ少し、身体を崩しただけ？

けれど、それにしては…。

子供の姿は、何度か激しく歪み、そして意識を失った。頭の中が真っ白になる。

もう少しだ。もう少しで。望みを。

信じたくなかったただけだ。本当は、すぐに理由は分かった。初めに胸を押さえ、姿が揺らいで。そして気絶。

バラを、つまれたのだ。

人間の世界の方に残されている本体。こちらに持ってきても、バラはすぐに枯れてしまうから、本体は人間の住むのと同じ場所に植えられている。

それで問題があったことは、これまでほとんどない。

人間たちはバラを尊び。バラたちも人間に親しみを覚え。

そうした均衡が今、崩れる。

「誰？」

やったのは、子供の花をぬいたのは？

人の形をとっていても、所詮本体はバラの花。それは命そのもの。抜かれれば、命はない。

色々な感情が一気に押し寄せてくる。

何が何だか分からない。

もう、いい。私は愛されない。愛しても、ろくな結末は待っていない。

これは天からの試練なんかじゃない。ただの罰だ。咎に対する、代償。

巻き込んだ、私が。

あんなにも愛おしいと思っていた子供を。私ガッ。

…もしも本当にバラがつまれたのなら、子供の命はおそらく3日前後。

けれど、目覚めることは、おそらくもうない。

どうすればいいのだろうか？

もう王にはなれない。それとも意識のない状態でも、たった一時でも、王になりたいのだろうか？

何も、見えない。

光を失った時と同じ。分からない。何も何も分からない。

どれくらい経ったか分からない。

はたと気づくと、目が腫れぼったかった。泣いていたのだ。

けれど泣いて、なんだか少し見えそうな気がした。

残り最後の、継承者。…化け物と同じ名前を持つ、王女は？

いや、とつくに逃げたろう。

これだけ騒いで、異常な匂いがしているのだ。

とつくの昔、この宮殿の外に出ているはず。

そう思っているのに。

ああ、会いにいかなきや。

そう思った。

子供をおぶって、廊下を進む。

生きていたものは、死ぬか逃げるかした。もはや命あるのは、私とこの子供だけ。

あらかじめ聞き出していた王女の部屋を、開ける。  
そこだけ、静かだった。  
血の匂いもしなければ、戦いの気配もない。

まるで普段通りというように、ベッドに腰かけた少女が、人形遊びに興じている。

いた。まだ、いた。

まさか、と思いつつ。常に希望を消せない自分がある。  
あたふたする私に、王女は気付いた。

私と同じ、赤い瞳が細められる。

刹那、視界が反転した。

「んか…殿下……」

どこか遠くで声がある。

それは私の知らない人物のもの。けれど、その言葉は確かに自分に  
向けられていた。そう私に。

そう意識した瞬間。急に声が鮮明になる。

「アマーリエ王女殿下！」

急に意識が回復した。

私の見開いた目は、真っ白な天井を映す。見慣れない場所だ。  
辺りは妙にざわついて、悲鳴や怒号が響き。浮足だっても感じられ  
た。

「殿下……ご無事だったのですね……」

いまだ覚醒しきらぬ私の意識に、その声が滑り込む。

声の主を求め、そろそろと首を廻らせる。

私ははっと息を飲んだ。

その人物にではない。

その背後の、開けはなられた扉の奥が。

私の視線に気づいたらしいその人物が、さっと立ちあがり扉を閉める。

けれど、ただよう異臭までは防ぎきれなかった。

改めて、声の主を見る。

見た事のない人物だ。

40代ほどの中年の男だ。身を包むのは近衛の制服。王族を守る騎士のモノだ……。

その人物が自分を見、殿下と呼びかけた。

目まぐるしく移り変わる状況の中、心だけはそれについていけず妙に冷静だった。

男の話聞き流し、意識が途切れる前の記憶を手繰る。

なぜ私はこんなところにいるのだろうか？

ああ、そう。子供を王にするため。

たくさん人を殺して、もう少しで、でも……そう！そこで　　ッ。

記憶が戻り始め、さっと血の気が引く。

ぱっと身体を起こすが、目眩がして立ち上がれなかった。



けれどそんなことは構ってられない。  
無理やり立ち上がると、例の男が目の前に立ちふさがった。

「まだ休んでいてください。首謀者は捕えましたが、ここはつい先  
ほどまで戦場だったのです」

別に男の言うとおりにしたわけではない。けれど私は気づけばベッ  
ドに座りこんでいた。

首謀者は捕えた？

どういうこと？私はこちらにいるのに。でも。

なぜ、子供はいないのだろう。

やっぱり行かなきゃ。

私は再び立ち上がる。そして男がふさがる。

「どいて」

傷ついた獣の、唸りのような声だった。

男が目を見開く。

私は、自分の周りに魔力が渦を巻くのを感じた。  
いつもは伏せる赤い瞳を真っすぐに向ける。

「分からないの？退きなさい」

「しかし……」

「退けていつているのッ！……！」

私の双眸は、きっといつもよりまなお鮮やかに染まっているのだろ  
う。

男は一瞬息をのんで、次の瞬間身体を退けた。

背中に絡みつく視線を感じながら、私は扉を潜る。そこには、生々しいまでの現実が広がっていた。

人から正気を奪い去る、凄まじい臭気が身体を包む。

けれど、これは現実なのだ。自分が作り出した。禍々しい光景は。自分の力の大きさに吐き気がした。どうしよもなく身体が震えて、地を蹴る足が滑りそうになる。

強く噛んだ唇の薄い皮が破れ、ぷくりと血が浮かんだ。

口の中いっぱい、鉄の味が広がる。

だが、そのどれも気にはならなかった。

子どもがどこにいるのかわからない。けれど、魔力の気配で何となく感じる事ができる。

その気配が今にも消えそうなほど希薄だったから、焦りで足元が疎かになったのだろう。

あっと思ったときには遅かった。

声を出す暇もない。

何かに足を取られ、正面から床に激突する。

繊細に編み込まれた精緻な模様のレースが、何枚も何枚も重ねられたドレス。

上品でいて可愛らしく華やかなそれが、赤黒く染まる。

振り返れば足元に、人の形をとらぬモノが転がっていた。

どうしよもなく惨めで、心細くて、泣きたくなった。

早く、子供の元に行かなくては……。

今やそれだけで、正気を保っている状態だった。

泣いてる場合じゃない。　そんな資格は私にはない。

その時、視界に階段が映った。

妙に目につくその先に子供がいることを、確かに感じる。

冷たく無機質なその様子から、おそらく地下牢への入り口だと思われた。

目につく人々を全て蹴散らし、ひたすら進む。　自分でも不思議

だが、それらの人々は死んではいなかった。

そうしてしばらく行った先に、その姿を見つける。

求めていた姿を見て、けれど湧き上がったのは恐怖。

小さな牢。冷たくて、暗くて、決して清潔とはいえない。

その隅に壁に背を預け、小さな四肢を投げ出した子供……。

その手足は、いつもよりもなお細く見えた。

顔は白と言うよりも蒼白で、いつさいの血の気を感じられない。

震える手を格子に押し当て、魔力の圧力をかける。

粉碎するなり駆け込んで、小さな口元に手を翳し、安堵のあまり腰が抜けた。　生きている。

だが、それも安心していられない。ことは一刻を争うのだ。なにしろバラを抜かれてしまったのだから。

人の形をとっていてもバラはバラ。本体はあくまで花だ。

バラは自分で、生きるための力を作ることができない。

生まれた時に神より与えられた力以外は、他のものから得るしかない。そのために、バラは強い匂いを放つのだ。

その匂いにつられ近づいた精霊から、力を奪う。あまりキレイな生き方とは言い難いが、そうするしか生きる術がないのだ。

だが大地から引き抜かれたバラには精霊が寄り付かない。  
だから、もう本体は死んだも同然。

今子供の姿は、人の形を取るために送られた力の余剰分で、なんと  
か保っているにすぎない。

なら、力を注ぎこめは、子供が消える事はないのではないか？

それはもう、賭けに近かった。

誰も試した事はない。だから、不可能とも言い切れない。

不可能ではない。

その言葉に弄ばれて、ここまで来てしまったのに、また同じことを  
しようとしている。

でも、試さない理由がどこにある？そんなのバカらしい。

生まれてからずっと、疎み続けたこの力。今使わなくてどうする？

子供の額に手を翳し、魔力を注ぎ込む。

一気に送ってしまったのは負担が大きすぎる。少しずつ、緩やかに。

額から、丸く汗が噴き出した。

強大な魔力を持つがゆえに、力の加減が難しかった。

どれくらいそうしてうたかは分からない。

窓のないうす暗い地下牢に、時を知るすべはなかった。

やけに時を長く感じたが、実際にはそう経っていなかったのかもし  
れない。

緩く瞼が震えた。

長い睫毛が揺れて、赤い双眸が現れる。  
焦点を結ばずに宙を彷徨うその姿を見て、私は思わず抱き寄せていた。

「お姉さま？」

その言葉が紡がれる。

またその声を聞いた。

奇跡のような、この瞬間。私は確かに幸福を感じた。

「どうして泣いてるの？ここはどこ？僕は、王になれたの？」

矢継ぎ早の質問。

その全てに、私は答えあぐねた。

だから、私は子供に笑いかけた。

「いつまでも、私はあなたを支えます。あなたに仕えましょう。小さな私の陛下……」

妙に改まった言葉。それが可笑しかったのか、その内容に安堵したのか、子供は小さく笑んだ。

けれどそれは、決して安息を感じるものではなかった。頭のいい子供は何か気づいたのかもしれない。

湧き上がるのは、対象も分からぬ後悔、憎しみ、苛立ち。何よりも恐怖と絶望。

それらが思考を絡めとり、あれ以上は何も言葉を継げなかった。

後になって考えてみても、どうすればよかったのか、何も分らない。

…そう。もうあれは過去の事。

そのすぐ後のことだった。

抱きしめた子供の身体が急に重くなり、小さな顎が力なく肩をたたく。

私は目を見開いた。

信じたくなかった。知りたくなかった。認めたくなかった。

けれど、どんなに叫んでも、揺さぶっても、再び力を注いでも、二度と子供は声をあげなかった。

私の愛した子供は。私のせいで、こんな惨めな死に方をした。

巻ノ十七 r i t e n u t o 愛しき日々への鎮魂歌

「死」という言葉は、ただ一言でも単純で……。その定義も、なり方も、これ以上ないくらいに明快だ。

実際それは、とても簡単に突きつけられた。

城の広大な中庭で、吐き気と倦怠感だけを抱えながら、私は歩いてきた。

あの殺戮の折り、城の奥深くであるここまでたどり着いた時にはすでに人はなく、そのおかげでこの美しい庭園は損ねられることなく残っていた。

咲き乱れるのは、彩りも鮮やかな様々な花々。よく見ればそれは、どれも不可思議なものだった。

花卉の色がクルクルと変わる花。鈴音のような音を紡ぐ花。透明で触れることのできない花……。

ここには、自力では手に入れることのできないモノが溢れている。けれど私は、ここで失った。失ったモノの対価は、きつと一生手に入らない。

絶望とか、恐怖とか、悲しみとか、後悔とか、そんな言葉にできる感情は、もうとうに尽き果てた。

私にはもう、何も感じるられない。

薄く水が纏わりついたかのように、身体が動きづらかった。

もういい。何も分からない。分かりたくない。

どうだっていいのだ。私の存在する理由はなんだろう？

死んだっていい。死ねばいい。

私は何人殺した？今さら、子供のいないこの世界に、どうして留まらなくてはならないのだろう。

ナノ二。

「ふふふふ……あはッあはははははッ」

自分でもどうにもできない。笑いが止まらない。

笑声は澄んだ昼の空に舞い上がり、虚空に木霊した。

私は、死ねなかった。

自分で死のうとしても、どうしてもできない。

幾人もの命を奪っておいて、私は死ぬのが怖いのだ。

それに私は、この強大な魔力のおかげで、生半可な傷では死ぬことができない。

「ッ」

ノド凍りついたかのように声が出なくなる。

激情が身体を廻り、瞳からこぼれ出しそうになる。

私はその場に座り込む。

妙に穏やかな微風に乗る、もはや嗅ぎ慣れた死の香りが漂ってきた。

涙は出なかった。

そんな資格はないのだから。

だから泣けない。心を鈍くして、何も感じていないフリをする。

そうすればそうするほど、どんどん自分がなくなっていく。



思いだすのは、あの母の声。耳を劈く、悲痛なまでの叫び。

『きゃあああ！！来ないでッ殺さないでッ化け物ッ！！』

そう、私は「化け物」だったのだ。

愛しいのなら、触れてはいけなかった。関わってはならなかった。生きていれば、どこかで幸せになっているかもしれないと、そう思えればよかったのに……。

私は、身にすぎた望みを持ちすぎた。

私に会わなければ、きっと子供は「王になりたい」などと言わなかつたろう。

その思いをそつと封じて、もっと穏やかに過ごしたのだろう。

そうすれば、あんなに冷たい牢で、ひっそりと。

オモイダシタクナイ。

思考は急激に緩やかになり、何も考えられなくなる。私はゆるゆると首を振って、ふらりと立ち上がった。

ここから去ろうと思った。

こんな場所にいたくない。この場所をほしがった子供は、もういない。

けれど同時に、ここは私と子供を結びつける最後の場所でもあった。

この時、早く立ち去ってしまえばよかったのだ。

私の人生で、もう何度目かも分からない後悔をした。

けれど私は、中々その場から動けず、ぐずぐずと居座ってしまった。

「王女殿下」

ふいに後ろから声がした。  
はっとして振り返る。すっかり周りが疎かになっていた。  
見ればそれは、目覚めた時に見た騎士であった。

「……私は、あなたの王女サマじゃないわ」

吐き捨てるように言う。

いったいどうなっているのか分からないが、誰も彼もが、私を王女だと思っている。

そうなりたかった理由の子供は、もういないのに……。

本当にその王女になったというのなら、私が持つこの記憶はなんなのだろう？

けれど男は、私の言葉をどうとつたのか神妙に頷いて見せた。

「はい。存じております」

存じている？

どういうことだろう。私が王女ではないと知っているとということ？  
それならば、なぜわざわざ王女などと呼んだのだろう。

すっかり錆びついた思考回路を、ぎこちなく動かします。

けれど私が結論を出すよりも、男の言葉の方が早かった。

そしてそれは、きっと私の結論とは違っていたことだろう。

男は、礼をとった。

ただの挨拶ではない。そんなのとんでもない。

決闘で負けようと、相手に決して膝をつかない誇り高き騎士が、私の前に膝を折った。

そして自らの剣を、まるで捧げるように、こちらに差し出す。

「わたくしダニエル・リツシュは、忠誠と忠義を誓い、一生をあなた様に捧げ、この剣を持ってお守り申し上げます。お許しただけますか？」

問いかけていながら、それは断定的な口調であった。

…この儀式は知っている。臣下が、王に対する忠誠を誓うものだ。今では誰も行わない、古めかしい伝統。例外はない。

「王？」

思わず零すと、律儀に反応したダニエルが、伏せていた瞳を少し持ち上げ、かすかに頷く。

「継承者は、もうあなた様をおいていらつしやいません。先ほど、正式に発表されました。次期…いえ、今上陛下は、アマーリエ・ロザリー・オラールさま。あなたでございます」

ああ、考えて見れば当然の成り行きではないか。確かに、継承者は私が全て始末したのだから。けれどそれは違う。それは、私が王になるためではない。これは、私のモノではない。

今、目の前にいる騎士。彼の持つ剣を受け取り、その鞘を抜き捨て、彼の額を浅く裂けば、それで「血の契約」が成立する。つまり、彼は言った通りに、忠誠と忠義を持って、一生私に仕えることにするのだらう。

でも、私は仕えられないのではない。私は仕えたかったのだ。こんな、子供を裏切るようなマネは、私にはできない。

「わたしは…わたしは、王なんかじゃないッ!!」

それはきつと、心の奥底で、私が一番望んでいる答え。何よりも自分のためにこそ。

誰かに否定してほしい。簡単なことではないか。いつも誰かが私を笑ったように、ただニヤリを笑って、冗談だと、そう言ってくれば、それで……。

「王なんかじゃ、ないんだから」

なぜだろう？今頃になって涙があふれてきた。

どうして私の人生は、何もかもがうまくいかないのだろう。

欲しいモノが、欲しい位置に収まらないのだろうか？

何もかもがズレたまま。そしてそれは、私自信も……。

私の存在が狂っているから。

私の周囲も狂いだす。

その輪は大きく広がって。

世の理さえ曲げて見せる。

…私の元に、常識なんて通用しない。

定義？自明？世の理？

そんなの意味をなさない音の欠片。

「いいえ、あなたは王です」

ぴしゃりと返ってくる言葉。

私がつたとえ、全てを狂わす強大な磁力を持っていても、その狂わす先は分からない。

そしてそれが、私の望む結果を、もたらしたことはない。

「現在民たちは、王族の方々の喪に服されておられます。けれどそれが明ければ、民の誰もがあなたを祝福し、奉りましょう。あなたが王でないと主張しても、今やこれは決定事項です。王位を譲るご兄弟もおられない今、僭越ながら、陛下にこれを拒否することは不可能かと思われませう」

その言葉は理論然としていて、今だ動き出さない私の脳は、すっかり混乱してしまった。

「民？ いったい何を行ったというの？ こんな状況の中、そんな… 何で…」

うまく言葉が思いつかない。

こんな分かり切った質問を、なぜするのも分からなかった。

ダニエルは、いったん礼を解いた。

「王が不在という状況では民が不安がります。しかしこの事態を隠し通すことは、私たちにはできかねます。必要なことだったので」

私たち？ それでは他にならでできる人がいたのだろうか？

錆びついた音をたてながら導いた答えに、思わず私は自嘲した。いたのだ、きつと。私の殺したあの中に。

「こんな状況になったなつたと知るだけで、どちらにしろ民は不安がるわ。大差ないじゃない」

「いえ。首謀者は捕えたと話しておりますので、大抵の民はそちらよりも、今後の国のことを不安がっております」

「首謀者……」

私はたまらず、声を張り上げた。

「いったい何と言って回ったの？その通りに言ってみなさいッ」

小さく首を傾げたように見えたが、ダニエルはすぐに、朗々と声を張った。

本日、王族の方々が身罷られたし。

国民の皆はこれよりひと月、喪に服すべし。

次期国王は、第3王女アマールエさま。

陛下は皆の導となり、明るき道へ導かれよう。

件の首謀者は、すでに陛下の裁きが下った。

国に混乱を与えし、反逆者の名は

クレール・アシエル・オラール。

耳を塞げばよかったなんて、今さら後悔しても、もうそれは過ぎた

۱۳۰

巻ノ十七 r i t e n u t o 〱愛しき日々への鎮魂歌〱（後書き）

どうも。作者其の1です。

暗くなってからの話し、実は全部私が書いていました。すいません  
！！

次回からは、ギャグ担当其の2さんががんばるので、きっと明るくなる……かな？

まあとりあえず、これでこの陰険な世界から抜け出せると、ほっと一息の作者其の1でした。つきあっていただいた方、ありがとうございます。  
ざいます。



## 巻ノ十八 瞳に映るInferno

黒い、黒い、黒い。

色はない。ただ、闇一色の世界。

その絶望の溢れた空間で、佳奈は一人立っていた。乱れた髪に汚れたドレス。その瞳には感情というものがなく、ただひたすらに虚空を見つめている。

ここは何処なのだろうか。

意識が朦朧とする。自分は生きているのかも分からない状態だ。どろりとした嫌な感触が身体を包み込む。

辺りに、ヒュウウと風が吹いた。一体どこから？だが、霞む視界のせいでその疑問に対する考えは遮られた。

酷く、気持ちが悪い。風が甲高い悲鳴を上げ、身体に突き刺さる。とたんにひやりとした冷たい感じに襲われ、佳奈は思わず身体を両手で擦った。

「シエルミア・ローゼ  
ッ、風停止」

呪文を唱えた途端、ピタリと風が止む。こんな魔法は知らない。だが、体が勝手に反応したのだ。何かがおかしい。

一瞬見えたあの映像 あれは一体何を意味していたのか。小さな愛らしい子供と少女。そして、辺りに飛び散った血。見るだけでむせかえすような鮮血の海に女はいた。

「…あ…っ！」

凄まじい頭痛が佳奈を襲う。まるで、記憶が思い出すのを拒んでいくかのよう…

痛みは止まらない。それどころか、激しさを増す。佳奈はたまらず吐いた。

自分のゲ　でぐちゃぐちゃになりながらも（お食事の方、スミマセン。byマリーベル）、必死に前進する。

だが、空中に伸ばした小さい手は空を切るばかりだ。

「誰か…誰か…助けてよおおっ！！」

必死に叫んだ声は闇に吸い込まれ、誰の耳にも届くことはない。それを知っていても、足掻き続ける。

ナント哀レナコトダロウ　…

人間八、皆哀レダ。不可能ダト分カツテモ、マダ、足掻クノカ…。

そう言ったのは一体…誰？

セリフの一部がカタカナだと読みづらんだよ、とつつこもうとしたが視界が激しく回転する。半開きの口から掠れた悲鳴が漏れた。

何か、この状況を何とかできる方法はないのか…？

刹那、佳奈の全身がドクンと跳ね、体の底から魔力があふれ出す。

その異変に気付いた時には、彼女はもう呪文を唱えていた。

「バストラ・フィガーネ  
存在解除」

視界の隅で光が弾けたと思った瞬間、辺りが真っ白に包まれた…

「…なっ…な…ま…!!」

少し目を開けてみる。ピントの合わないカメラのような視界が徐々に形を成してきた。一人の男が心配そうにこちらを見つめている。

「佳奈様ッ!!」

ユージンの大喝が飛んだ。慌てて体を起こそうとする。

「な…何!? 私、このまま襲われちゃう感じ〜い!?!」

ユージンみたいな美形だったら襲われてもいいかも〜と呑気なことを思う佳奈。いつも襲って来るのは小汚いジジイばかりだからである。

「なにを馬鹿なことを言ってるんです! はやく起きろポケッ、ついでに死ねッ!」

「こらこらユージン、本音が出てキャラが崩壊してるわよ」

もう一人の声の主　マリーベルの言葉に何かがひっかかったが、とりあえずお目覚めの時間のようだ。

「二人共…どうしてここに? というか何処?」

佳奈はすばやく辺りを見渡す。鉄でできた見るからに丈夫な壁。一つだけの窓には細長い鉄が何本も埋め込まれていた。どうやら逃げるのを阻止するためらしい。

じめじめ、どよどよとした何とも薄暗くて気持ち悪い空間である。

「ここって…牢屋? ファイナルアンサー??」

「ザッツライト! です。デイスイズア、カンゴク!!」

「ホワイ?」

「トウ… キャッチングユス」

ここでしばし、分からない人のために今の佳奈とマリーベルの会話を翻訳します。

『ここは牢屋ですか？』

『正解！ここは監獄です』

『何故？』

『私達を捕まえるため』

以上、翻訳者は執事のユージンでした。

話を戻そう。

「でも、何で私達はこんな場所に閉じ込められてる訳？」

佳奈の素朴な疑問にマリーベルが肩をすくめる。

「どうやら反王国側の者に捉えられたみたいよ。こんな怪しい三人組、恰好の標的だものね」

そのマリーベルの言葉に付け加えるようにユージンも口を開いた。

「それも、敵はかなり腕が立つようです。この超美男完璧執事と美貌の最強王女の前で完全に姿を消し、あまつに気絶させて閉じ込めるなど」

ちなみに、この美貌の最強王女というのはマリーベルのことであり、佳奈ではない。

「どうやら、私達をすぐに殺さないということは…なにか拷問の一つでもする気でしょうか？」

やけに落ち着き払った口調のユージンとは対照的に佳奈は混乱状態に陥っていた。

「拷問つて…何か秘密を吐かなきゃいけないの！？援助交際とか、富岡製紙工場でのアルバイトとか、強盗に窃盗…あ、あと殺人もやっただことあつたっけ…！！」

全部自分でしゃべってんじゃねえか、あと内容がリアルに犯罪だぞ！と思いつながらもあえてつつこまない執事と王女。実にいい人だ。

「とにかく、落ち着いてください。まだ助かる可能性がゼロという訳ではございませんよ」

ユージンの視線の先はマリーベルの腰。ええ〜！？ま、まさかの禁断の恋〜！？とか思っているとお上からタライが落下する。

そんなタライにつぶされた佳奈をド無視して、二人は会話を続けた。何とも悲惨な絵図らである。

「マリーベル様、その腰のベルトにマシンガン二つとショットガン六つ、あと感知式爆弾を五十二個隠していらっしやるのでは？」

「ド えもんのポケットか」

佳奈は突っ込んだが誰も相手にしない。

マリーベルは悲しそうに首を振ると腰のベルトをはずした。

「弾が丁寧に抜き取られてるわ、抵抗するなというメッセージかしらっ？」

「感知式爆弾ですか？」

「ええ。五十二個、すべて取り外されてるわ」

「歩く戦車か」

またもや佳奈は突っ込んだが誰も相手にしない。

すると突然、ユージンが何かを思い出したようだ。顔がみるみる真っ青に染る。

「と、いうことは…私愛用の小太刀、クジャクヤママユ丸も…！？」  
あわてて腰を探るが小太刀は見つからない。ユージンは体を折って

崩れ落ちた。

「くっ…クジャクヤママユ丸…ア　ゾンで13586円のキャ、超お得！見てみて！これいくらに見える？の感じな素晴らしい一品だったのにっ…無念じゃあああ…！」

「安いな」

二人は覚めた口調で同時に呟く。チームワークはバッチグーのようだ。

「でも、武器がないとなると…脱出は難しいわね」

佳奈の呟きにうんうんと頷く。でも、どうにかしてこの監獄から脱出しなければならぬ。

そこで、佳奈の脳裏に何かがはつきりと蘇った。酷く、気持ち悪いあの悪夢。

「魔法…」

「え？」

目を点にさせる二人に佳奈は慌てて質問した。

「この国の人は、魔法が使えるのよね？」

一瞬驚き、目を逸らしたが、ユージンはきちんと説明してくれた。

「…昔は、そのような力が存在したと言われています。あのバラの女王…」

「黙りなさい」

氷のような鋭い声　マリーベルだ。ユージンはそれを見ると、罰が悪そうな表情をし、口を閉ざす。

険悪なムードがじわじわと広がった。明らかに二人の態度がおかしい。マリーベルはずっと顔を伏せたままで、ユージンは苦虫を噛み潰したような表情。

だが、まるつきり空気の読めない超KY少女、佳奈は勝手に話を進める。

「私、魔法が使えるかもしれないから、それで脱出しよう！」

「え」

「いっくぞ〜」

ポカンと口を開ける前で、佳奈は両手をゆっくりと前にかざす。そして瞳をきつく閉じると、鼻に刺していたピアスを引きちぎった！

「風切空ー！！」  
リユウ・ツギアキ

『ズドツカ

ンー！！！！』

後には、無残にも吹っ飛ばされた牢屋の残骸と、佳奈の輝くばかりの鼻ピアスのかけらが残されていた。

巻ノ十八 瞳に映るInferno（後書き）

はい。と、いう訳で『ココクリ』（ココをクリックの略）によろやく君臨できました。作者其の二です。

今回からは前回までの『伸し掛かるシリアスムード』からガラリと変わってかなりコメディ要素が入ってきました。でも、作者自身何も考えずに勢いだけで書いてしまったので、イマイチつながりがありません。（おい！）

そんな崩壊寸前の物語ですが、読めばハッピーになれること間違いなし！（？）なので、見捨てられないことを祈ります。



## 巻ノ十九 進むべき道

いつ牢屋に入れられた?とか、ユージンいつからいるわけ?とか、いつから佳奈は鼻ピアスしてたの?とか…とりあえず疑問はつきないが、とりあえず佳奈たち御一行は牢屋を脱出した。

「マリーベル…それで?これから何するの?」

「そうね…」

「あ。なんかその腕組んで小首傾げるバランスが絶妙だねっ。よしマネするぞお……ユージン、どう?」

佳奈はマリーベルのマネをしてみたが、超絶美形天才王女さまの隣でやられてもユージンの頬は引き攣るばかりだ。

「エエ。カナサマ。トテモ、オキレイデスヨ。ホント、ホント、アハハハハ」

「そう?キヤアあ佳奈、照れちゃう!」

タライが落ちてきた。佳奈は活動を停止した。

そんな意味不明な3人は、進めていた足を止め、ふむと顔を突き合わせる。

前後左右、どこを見てもバラ畑。バラ、バラ、バラ。

頭が痛くなるほどの極彩色が、視界を塗りつぶしている。

ぐっと目に力を込めると、遠くに王城の姿が見えた。振り返れば先ほど出てきた屋敷。マリーベル曰く、とある貴族の持ち物だそうだ。マリーベルは、佳奈の視線を確認してうなずいた。

「そうね…今後の方針を考えないといけないわ。とりあえずわたし

の意見としては……」

彼女はふっと眼を細めると、少し自嘲気味に笑んだ。

「わたしは、もう逃げるべきだと思うわ」

「逃げる？」

佳奈は問い返し、ユージンは黙った。

「元々、反王国派の人間は少なからずいたの。穏健派がほとんどだったけれど、過激派も時々事件を起こして被害がでてたわ。でも、ここにきて事情が変わったようね。佳奈は覚えてる？あの……シエーゼスにあつた時のこと」

「シエーゼス…？ ああ！」

あまりにも壮大な物語を見せられたせいで、すぐには記憶が戻らなかった。

王宮についてすぐ、ユージンだと思っていた人物が、いつの間にかマリーベルの弟になっていて…えっとおでも、本当の弟ではなくて…王子様で……。

「もう良く分からん！」

思わず叫ぶと物凄く怪しい目でみられた。

マリーベルが小さく咳払いする。その姿も美しい。マネしてみたけど、ユージンの顔面は硬直していくばかり。

「まあ覚えているならいいわ。シエーゼスは…いえ、シエーゼスじゃなかったけれど あれは、魔法を使っていた」

「そうね」

「つまりあの人物は、人間じゃない。なのに王子に扮している。そして私たちは彼の去った後、反王国派らしき貴族の手の物に落ちたわ」

「だから？」

「ああもう！鈍いわねッ！　つまり、反王国派の掲げる王さまはシエーゼスの可能性が高いってことよ。でも、シエーゼスは本物の王子じゃない」

「王さまになるうとしてるってこと？」

「そう！」

問いかけるようにユージンを見ると、コクリと頷かれた。

「……」

「ユージンはいつ合流したの？」

「ああ、そうですね。佳奈様は気絶していらしたから……私は佳奈様とはぐれた後、黒エルモたちを倒しすぐに追いかけてしましました。のですが」

曰く。

すぐに彼の雇い主である水虫&ハゲ、しかも素足。なのに何故か青年という謎の伯爵リドウォール卿よりハトが飛ばされてきたらしい。どうやら早馬で駆けつけた彼の元にも黒エルモが出たそうで、佳奈の方には面白かったマリーベルが勝手に迎えにいったので、こちらの護衛にこいと頼まれてしまった。

と、いうわけで彼について王宮にいったのだが、中々佳奈たちが来ない。

リドウォール卿ことセドリネに頼まれ外に出て見ると、丁度佳奈たちは大ピンチ。

マリーベルは怪我をしているし、佳奈は軽くトランス状態だし……それで駆けつけた直後気絶させられたって……。

「ユージン。ダッサあい」

「だ、ダサ……うう」

「ってそれどころじゃないじゃん！マリーベル、怪我してたよね？大丈夫なの？」

「もちろん。どうってことないわ」

「ないって……」

思い返してみる。

マリーベルの白い肌は焼けて、血の匂いが染みだしていた。

「絶対んなわけないでしょうー！」

佳奈がマリーベルの腕をつかみ、無理やり見ようとすると……。

「大丈夫だって言うてんだろっうがっ」

低い声で呟き足蹴にされた。

「あら、御免なさい。おほほほほ」

「う、ううう。でも、何でだろっう？」

マリーベルの細い腕に、同じように細い足。なのに、漲るエネルギー。私の身体を……足蹴に……。  
なんか、なんか。

「ドキドキしちゃっ……」

ぽっ。



## 巻ノ十九 進むべき道（後書き）

久しぶりの投稿です。

というか、作者2が書かないので、再び1の登場です。

今回は色々整えただけの話なので、何の進展もありません。  
ついでに面白みありません。

## 巻ノ二十 再会と出会い

「さて、もうすぐ王宮に着きますが……」

ユージンが、暗い沈黙を落とした。

「どうやって侵入する気ですか？」

そう、その通りだった。

3人は牢獄を脱出して、ここまで歩いてきたのだが、よく考えるとどうやって入るかなんて考えてなかった。佳奈はジツとマリーベルを見つめる。

「何よ」

「マリーベルならなんか持つてるでしょう」

「…あるにはあるけど」

「マリーベルさまの持ち物は華美なものが多いので、警戒されるでしょう」

「派手で悪かったわね」

「た、確かに」

そもそも先頃王宮に入った時は、マリーベルの呼んだB29に乗っていた。

んなものが上空に現れたら攻撃されるのは必須だろう。むしろ何で今無事なのかとヒヤヒヤする。

「前回ならまだしも、今は多分。完全に警戒されてるわよねえ」

「でも、中にはリドウォール卿がいますよ」

「あの水虫伯爵に何ができるのよ」

「それは…でもないよりはマシでしょう」  
「どうだか」

うぐんと首を傾げる2人。…何という疎外感。  
ちなみに今は、王宮の門がすぐそこという場所のバラ畑の中に潜んでいる。

「シエーゼスの勢力がどこまで伸びているか分からないのに、迂闊に行動できそうにないわね」

「陛下は無事ですかね」

「今まで無事だったんだから、今日明日でどうにかはしないはずだけど」

寂しい佳奈は、2人の周りのバラを揺すったり、無駄に相槌を打ちまくったりしてみた。

「うん。そうだよね」ホントーこまるうー大問題じゃーん」

するとピタリと会話がやんだ。顔を輝かせる。

マリーベルは聖母のようにほほ笑んで、近くに咲いていた小さなバラを示す。色は、黄色。

「え？何？」

「分からないの？」

「佳奈様……」

「ユージン」

説明をくれるなら彼だろうと見ると、彼は感情の乏しい顔に小さく笑みを浮かべた。





佳奈は泣いた。

「で？」

そんな佳奈を無視してマリールは視線を巡らせる。

バラの間に、柴犬の姿が見えた。

超神童女神王女は、天才的な記憶力によってすぐに該当物を見つけ出した。

「あなた、クリステイアー又じゃない！」

「クリステイアー又ですね」

「いやいやレイだし。わたしの可愛いレイちゃんだし！」

相手にされない佳奈。

「ほらクリステイアー又おいで」

「いや、だからレイだって。レイおいで」

「わんっ」

レイ…改めクリステイアー又は、一目散にマリールの腕の中に収まった。

佳奈は再び泣いた。

「ん？何か知ってるのクリステイアー又」

「おや、抜け道を教えてくれるのですかクリステイアー又」

「じゃあ付いていきましょウクリステイアー又に」

「そうですね、ついていきましょウクリステイアー又に」

「ねえ、だれか助けて。私いつからこんなキャラになったの……」

もう本当の本当に、佳奈は泣いたのだった。

というわけでレイについて言った一向は、どうやらレイが掘ったらしい地下トンネル（！？）で王宮に侵入した。

「あのだっかの女と違って賢いのね」

マリーベルは頻りに呟いていた。

その腕の中で、レイが笑って見えるのはどうしてだろう？

「あつう」

けれどどうしてだろう。

そうやって虐げられ。

「もういいわ！」

「うわっ。また口に出てた」

そんな風楽しく足を進める一向。

目的地、未定。

「今からどこに行くの？」

「元々我々の目的は王宮にくることでしたからね、佳奈様」

「いや、だから何のために？」

「そりゃまあ王宮にきたんですからね。陛下に会いに来たんですよ」

「陛下って、王様？」

「佳奈が人間の言葉を話していればね」

どうやら未定だと思っていたのは佳奈だけらしい。  
何気にレイもバカにするような顔の気が……。

「王様の部屋なんて知ってるの？」

「バカにしているの？私は王女さまよ」

「あう………すみません」

「佳奈様大丈夫ですよ」

「ユージン………ありがとう」

「だって、天才的美少女カリスマ王女様のマリーベル様に、あなたが敵うわけないじゃないですか！」

佳奈は両手で顔を覆った。

「だって、女の子だもん」

マリーベルの足取りには迷いがなく、また邪魔する者を排除するユージンの動きも滑らかだった。

「っていやいや。排除？それってまずいんじゃない……」

「マズイのは、あんたの存在よ」

佳奈はさらなる暴言を回避するべく口を閉ざした。

しばらく行くと一直線の廊下になり、突き当たりに巨大な扉が見えた。

ぱっぱつと警備を切り伏せ、マリーベルが怪力によって扉を開け放つ。

そこはどうやら執務室のようだった。だが、そこには誰もいない。

「え？まさかの不在？」

焦る佳奈にも構わず、マリールベルはズカズカと足を踏み入れ、壁際にあつた本棚の本を薙ぎ払う。

やばいッ！マリールベル様がお怒りだ！と頭を抱えた佳奈だが、全員それをド無視してマリールベルに近づく。

マリールベルは何やら奥の方を引っ掻いていた。

ガゴ。

何かが外れる音。そしてマリールベルの手には本棚から伸びた取っ手のようなもの。

ニヤリ、と。マリールベルが凄絶に笑んだ。

バン。

大きくはない可動音の後、本棚がズゴゴゴと右にズレ、そして…。そこを覗き込んだユージンは、乙女のように顔を背けた。その頬は、鮮やかな赤。

「見つけましたよ。お父様」

マリールベルの声で振りむいた主は、その男は…。

ベッドの中にいた。金髪の、全裸の美女と共に。

ひょっこり現れた佳奈が、マリールベルの肩越しにその様子を見る。

佳奈は…。

「うわぁあああああ？」

なぜか興奮した。

「もうやめてください佳奈様。キャラ崩壊はもう十分ですよ」  
「うわあああああああ？」

ユージンの叫ぶも届かない。

暗いが、仄かに日の光の差し込む妖しい形相の部屋の中から、中年の男が顔を出した。

さすがマリーベルの父親というだけあり、滑らかな金髪も、シミ一つない白い肌も美しい。

彼は、腕の中に女性を抱いたままこちらに笑みを浮かべた。

「やあ、フェルデニア。今日も美しいね。そしてそれよりボクは美しいよね。フツこの世の誰よりも、やはりボクは美しいんだね。ああ、なんて罪作り…ボクが女神の愛情を一心に受けてしまったせいで、この世の人々はみな、見劣りするばかりになってしまったんだねえ、君もそう思うだろう？」

彼が腕の中の女性に問いかける。彼女はもごもごと動いた。

ユージンはキャツと声を出して顔を覆うが、指の間からチラチラと様子を窺っている。そして、啞然とした。

「はい。その通りです陛下」

そう答えたのは、野太く低い声。

顔を上げた拍子に、髪の中の顔が見える。髭が…ヒゲ…ひ、げ……？  
そう言えば、長い髪のせいで気にならなかったが、肩幅が……。

「ふふ、正直でよろしい」

そして彼が彼女の頭を撫でると……。

ズリ。

ズレた。長い、金髪が。ズレたせいで、胸元が露わになる。  
見事な豊満…ではなく、豊毛。  
彼女は…彼だった。

「お父様。相変わらずですね」

「ま、マママリールベルさまは、あの方から生まれたんですか!？」

「ユージン…大丈夫?そんなわけないじゃない。彼は真正正銘の男  
よ」

「きゃっ」

「きゃつて、あんた……」

「ねえねえ、やっぱりあなたはそういう趣味なの?」

「何だ、いまいち残念顔。今のボクの姿は全て真実だよ」

「きゃあああああああああああああああああ?」

「あんたのきゃあは絶対おかしい!」

マリールベルは必死につっこみに徹したが、処理不能だった。  
はあとため息。

彼女は佳奈の首根っこを掴むと、寝室にずかずかと踏み込み男の前  
にぶら下げた。

「この残念顔が、お父様の言ってたバラの女王よ」

「なに?この残念顔が?」

「結局今は別人なんだからしょうがないんじゃない?」

「うゝむ…なら完全に覚醒すれば、あるいは……」

「元の姿になつたりして?知らないわよそんなこと」

「これから共同戦線をはるんだぞ?美しい方が言い方決まっている。  
せっかくあのリドウォールの頭を相殺するためにユージンをやった





アルフォンソはベッドから身体をおこした。  
ユージンと佳奈は、再びニュアンスの違う叫びを上げたのだった。

巻ノ二十 再会と出会い（後書き）

いやー……かなり初期の段階で王宮に行くと言い、理由の判明が今  
回って……。

なんか本当にすいません。

ていうか、この後書きを呼んでいるあなた。あなたほどの我慢力が  
あれば、日本は救われます！

…とかつて意味不明なこと、気にしないでくださいーい。

## 巻ノ二十一 面影

「改めて、ボクの名前はアルフォンソ・ロジタ・リド・クレスティア。女神の祝福を受けし、世界の美を極めた者だ」

アルフォンソは服を着ながら朗々と自己紹介をした。やっとなり通常モードに戻ったユージンが、それを手伝っている。

先ほどから無駄に流し目をしてくるが、佳奈はただただ引くばかりだった。

「よしっと…ありがとうユージン。君も中々美しいね。もちろんボクには敵わないけど」

「お褒めにあずかり光栄です」

「うん。それで、残念顔」

「立花佳奈です」

「変わった名前だね。どちらが姓だい？」

「立花が姓で、佳奈が名前です」

「うん。で、残念顔。ボクは君に話したいことがあって、わざわざ無理を言っで連れてこさせたんだ」

「何なのこの人！」

「だから世界に溢れる輝きを、全て封じ込めた宝玉だよ。で、話を進めてもいい？」

「だからっ ひッ！ままま、マリールさん？何でピストルをMYの頭に…？」

「あんたが黙らないと話が進まないでしょうが」

「わかった…分かったから…落ち着いて話し合おう。ほら、すつてえ…はい うごっ！」

マリールは一切の手加減なしで鳩尾に膝をめり込ませた。

佳奈は死んだ。

アルフォンソは両手の平を天に向ける。ついでに首を左右に振った。

「その子は中身も残念だね。もう何もかも残念だよ。フェルデニア、本当にそれがバラの女王なのかい？」

「疑うんですか？その毛、むしりますよ」

「おっと、それはマズイ。女神が泣いて、この世が涙に流されるよ。すっかりピツカリの残念へアーはリドウォール卿だけで十分だよ」

「試してみてもいいんですよ？」

やれやれとでも言うようにアルフォンソの首が揺れる。

どうやらそれがクセらしい。

ずっとマリーベルと話しつつ、その目が佳奈から離れることはない。マリーベルは、舌打ちするように息を吐いた。

「佳奈。前に私が渡した懐中時計があるでしょう？出しなさい」

「へ？懐中時計？」

佳奈の首が徐々に傾いていく。

もう身体が倒れるんじゃないかと言っほど傾いてから、ふいに手を打つ。

「ああ！」

佳奈はポケットを探り、ドレスを叩きまわり、最後に袖に手を突っ込むと、なぜかそれは出てきた。

水晶に似ている透明の材質。けれどそれは、誰も知らない未知の物質。

確か佳奈が持ったとたん、赤い斑点が浮かび、それは満開のバラになったのだ。

今もその赤いバラは健在でる。だがあの時と違い、大きな葉っぱがその大半を覆い尽くしていた。

「な、何これ。マリーベル…この模様動くの？」

「そうね…バラの葉の花ことばは、希望ありよ。良かったわね」

マリーベルはそのまますつと父を見上げる。

「で、分かった？」

「バラの国の継承物か…宝物庫に忍び込んだのか？」

「忍び込んだ？まさか！普通に正面から入って、正面から出たわよ」  
「なるほど。さすがフェルデニア。美しく鮮やかだったことだろう。」

……これは、信じざるおえないな。失礼したなクイーン・オブ・ローズバラの女王」

「な、なんかこれ、すごいものだったの？」

「そうよ。バラの国を統べる権利のあるものにだけ、その印が現れるの」

「権利……」

佳奈はそれに視線を下ろし、ふつと瞳を凍らせた。

きゃあああ！！来ないでッ殺さないでッ化け物ッ！！

ボクは、王になりたいんです

いつまでも、私はあなたを支えます。あなたに仕えましょう。

小さな私の陛下…

あなたは王です

頭の中に、あの記憶が交錯する。

あれは、彼らが言つところのバラの女王の記憶。

彼らが望む者の記憶。

けれど、王座を望まなかった者の記憶。

自らの愛しい者のためだけに、何もかもを捧げた少女の、狂った記憶。

「でも…わたしは女王じゃないわ」

「え？」

マリーベルは眉根を寄せて問い返してくる。

「だって本当は、あの子供を王にしようとしたんだもの」

「あの子供？」

「そうよ。たった1人だけ、私を受け入れてくれた子供。……ああ違う。私じゃないんだ。彼女を、アマーリエを」

「アマーリエ？」

先ほどからマリーベルは問い返してばかり。

佳奈はこめかみを押さえて、とにかくと堅く目をつぶる。

「彼女は多分、あなたたちが望むような人物じゃない」

マリーベルとアルフォンソは目を見合わせた。

そして顔を厳しくする。

それは佳奈に詰め寄らんばかりの剣幕だ。

佳奈のまな裏は鮮やかな朱に染まっている。それはあの悲劇の時、美しい城を染め抜いた色。

「どういうこと？佳奈はバラの女王のことを知ってる？」

「ちよつとだけね。ていうか、マリーベルたちは全然知らないの？」

「知らないわ」

「ボクたちはただ、バラを枯らしたり折ったり折つたりしないように管理して、敬つて、それで力を借りていただけだからね。直接の面識はな

いんだ。というか、バラというのはどうすれば話をできるんだい？  
だって、ただの花じゃないか」

本当に何も知らないのか。

バカな佳奈だが、バラの事に関してはこの国の誰よりも詳しいかもしれない。

「バラはその香りを力に変えることができる」

「そうだね。ボクたちはそうやって魔法を使っていた」

「それと同じ要領で、自分のカラ…のようなものを作って、自分の意識を移せるの。でも、そもそも本体は花だから、枯れたり折ったりしたら死んでしまうけれど。ずっと聞きたかったんだけど、この国だとバラの花はどのくらいの間枯れないの？」

「…そうだね。30年は枯れないかな」

バラが30年咲き続ける、と。

花屋は商売上がったりだなあ、とかどうでもいいことを考えつつ、なるほどと納得もする。

「でもやっぱりボクには分からない。花に意識があるのかい？」

「どの花にも意識はあるの。でも、それを具現化できるだけの力を持つのはバラだけ」

「へえ…それで、意識を移したカラとやらはどこにいるんだい？」

「……」

佳奈は記憶を必死に手繰った。けれど誰もそんなことを喋ってはいなかったし、アマーリエの読んでいた本にもその手の記述はなかった。

「この世界ではないと…思うけど。平行世界バラレルワールドっていう感じでもない。

もつとふわふわしてて、不安定で、おぼろげな世界。どこかっ言われてもいまいち説明できないけど」

「じゃあどうやったら行けるの？」

「勘違いだと思っただけど……ないと、思っ  
ない？」

この声は親子で重なった。

佳奈は頷く。…先ほどからアルフォンソに誘導尋問されている気がするが。

「ある感じがしないもん」

先ほどから、あの記憶がどんどん鮮明になっている気がする。眩暈がする。泣いている時のように、視界が緩くぼやけた。

アルフォンソが首を振る。

「参ったなあ…これは本物だ」

「私も驚いたわ。…そういえば佳奈、魔法を使っていたわ」

「何！？魔法ッ！　これはますます……」

アルフォンソはこれまでになく真面目な顔をした。しっかりと佳奈を見て話をする。

「残念顔くん。君を呼んだのは他でもない。ボクたちに協力してほしいんだ」

「残念顔って…しつこいなあ、はあ…もういいや。で？協力って？」

「今、内戦が起ころうとしている」

「シエーゼスと？」

「その通りだ」

「でも、あれはシエーゼスじゃないんじゃない？」



「だからさらにだよ。君に彼を殺してもらいたい」

ノドが、ひゅうと悲鳴を上げた。

「だって…あなたの子供なんじゃ」

「そうだよ。でも、だから何？」

「何って……」

佳奈はアルフォンソが、得体のしれない生き物に見えて、怖くなった。

だってそれに、シェーズスは、私の……いや違った。彼女の、愛しい子供なのだ。

その記憶を継いでいる私に、殺すことなどできるはずがない。

「彼は得体のしれない生き物だ。魔法を使う。バラたちはトゲを生やして眠りにについている。じゃあ彼は何だ？」

「彼は……！」

そこで言葉を失った。

彼は、何だろう？と。

だって、そうではないか。彼は死んだ。彼女の、アマーリエの目の前で。

バラを摘まれたから。死んでしまったのだ。

それを思い出すだけで、凄まじい怒りと憎悪に気が狂いそうになる。

死んで、完全に消滅してしまったと思った。だから絶望した。

なのに、生きていた。何で？彼は何？

でも、そんなのどうだっていい。今彼が存在しているのは確かなのだ。

そうだ！リドウォール卿の屋敷で夢を見た時、彼は泣いていたでは

ないか。

何か、悲しいことでもあったのだろうか？会いに…会いにいきたい…！そう思うのに。

黒いバラ…：花言葉は？いつかあなたを殺しに行きます？ですね  
さようなら。次は 殺しに行きます

それは絶対的な拒絶だ。  
私に対する、失望の証。

私が、子供を王にできなかったから。  
約束…したのに。

「私は…」

どうしたい？どうすればいい？

子供に拒絶され。でも、この男の言うように、子供を殺したりできるわけがない。  
なら、なら……？

「私は、あなたの言う通りなんかにはしないッ！…！」

とりあえず、力いっぱい叫んだ。

アルフォンソは驚いたような顔をする。けれどすぐ、とろけるような微笑に変わる。

「まあ急がなくてもいいや。しばらくここに住んで親交を深めようじゃないか」

「は？」

「ユージン。連れて行ってあげて」

「…分かりました」

「ちよ、ちよっと待ってよ！」

「じゃあね〜。大丈夫。君のための歓迎会を開いてあげるから、寂しくないよ。ボクって心まで美しいから」

「つくうつく」

呻き声を残して、佳奈は引きずられて言った。

残されたのは、ひと組の親子。

「…佳奈を閉じ込めて、どうする気ですか？」

「さて。何だか今にも逃げ出しそうな気配だったからね。今これ以上話するのは得策ではないと思ったんだ。それだけ」

「狙われているくせに、随分悠長ね」

「にしても、あの残念顔くん。見た？」

「見たわ」

アルフォンソが、彼は誰？と問いかけた後の沈黙。その時……。

「誰か違う人物の面影が、重なって見えたね」

「何か深くバラに関わる話でもされると刺激されるのかしら」

「シエーゼスの話が、バラに関わっているかい？」

「さあ…」

そして、静寂。

「あの重なって見えた人物。彼女が例の、クイン・オブ・ローズバラの女王なんだろ  
うね。ふふ」

「何よ」

「いや…」

アルフォンソは、心から楽しそうに笑った。

「もうそろそろ、世界に時間が戻ってもいい頃だと思わない？」

卷ノ二十一 面影(後書き)

えーと、一日に3話書いてみました。  
…わりかし疲れますね。そついの。



わかんなくなってきたぞ。頭痛くなってきた」

と言った瞬間。佳奈の頭上にタライが出現。

「ウゴツ」

乙女らしからぬ悲鳴と共に、佳奈は撃沈された。

タライの中には、誰かからのメッセージが…。

『そういうのって、みんな黙ってスルーする所じゃない？』

佳奈はタライを投げ捨てた。

この世の真理を見た気がする。いや、真理が具体的にどういうものなのかも良く分かんが…。

「うん。まあいいや。でもね、でも…でも…」

佳奈はぐつと拳を握った。

「腹がへったんだああああああああああああ」

部屋に1人ではいるとは到底思えない声。

先ほどから佳奈の部屋の外には野次馬が集まっているが、そんなことを知るはずもない。そもそも知っても叫びは止まらない。

「こうなったら最高の秘術。立花家一子相伝の技。本当は使いたくなかったけど、いづくぞおおおおお」

すううと息を吸い込む佳奈。

どこからかハートの飾りのついたピンクのロットを取り出した。

「マジカルチェンジ！」

それはマリールと王宮に向かう時に、リンカーンエルモなる物体が持っていたものだった。

リンカーンエルモはふりふりとピンクのコスチュームになったが、佳奈が使ったとき、呪文を間違えてオカンにされたのだ。

「ていうか、絶対立花家の秘術じゃねえじゃん。とかつつこんではいけない。」

「はっはあ見たか！私は真理を理解しているのだー！」

扉の外の野次馬は、一気に逃げ出した。これはある種の効果かも知れない。

しかし肝心の佳奈には何の変化も現れない。

五分経過。

ロットを頭上に掲げた姿勢のまま硬直しているのも、そろそろ限界だった。

佳奈はロットを下から見上げ、あることに気づく。

ON、OFF。

「ああ、スイッチ入ってないのね。なるほど」

何がるほどなのっ！とは誰もつつこんでくれない。  
改めて、もう一度。

「ごほん。ああーなんか改めてやると緊張するなあー。……マジカル、ユージン？」



「ああ、お取り込み中の所失礼します」

ユージンは完璧に身だしなみを整えた姿で立っていた。その瞳には、ある種の怯えのようなものが滲んでいる。

部屋の中央。ピンクのロット。大きな赤いハート。さらに「マジカル…」とか叫んじやっている。

「いや、ぜひ失礼させていただきます」

ユージンは素早く踵を返し、部屋を出て行くこととした。

佳奈は慌てる。

「いや待ってって！だから私はお腹が　　っつうをおおおおおお  
お」

尋常じゃない叫びを聞いて、さすがにユージンも振り返った。そしてそのまま動けなくなる。

なんとロットから光の粒子が飛び出し、佳奈の姿を覆いつくしたのだ。

リンカーンエルモ登場のおり、ユージンはいなかった。従って今から何が起こるのか想像もできない。

それに引き換え佳奈にはだいたいの想像がついた。次は何？ピエロ、お相撲、バニーガール…。ああ、バニーガールがいいなあ。お相撲は全身モザイクにされるし。

ずっどおおおおお。

思ってたよりもかなり凄まじい音と共に、佳奈を覆っていた光が消える。

ユージンは出ていきたいのに、身体が動かず半泣きになった。

佳奈は、望み通りの姿になっていたから。

ユージンが盛大に悲鳴を上げ、駆けつけたメイドの1人が気を利かせて服を渡した。

佳奈はその格好に着替える。

「なぜに全身タイツ」

玉虫色だ。

隠していた腹が出てしまい、佳奈は頑張って引っ込めていた。

「……たく、お前にはお似合いだろうが」

ユージンが小声でつぶやいた。佳奈にはいまいち聞き取れない。

「何か言った？」

「いえ、何も　それより、用件を伝えにきました」

「用件？」

「ええ。歓迎パーティーです」

「ああ、あの変態王がそんなこと言ってたね」

佳奈は大きく頷く。

「日付が決まりました。今からです」

「つてはあ？日付も何も今からつて？それはまたまた……」  
「時が進まない世界ですからね。みなさん暇なんですよ、声をかければ国中の貴族が全速力で駆けつけてきます」  
「それにしたつて、そう簡単に集まらないでしょ」  
「まあクソみたいな小国ですからね　つておっと、失礼。まあ、だから行きますよ」

ついでこいというようにアゴをしゃくられる。

佳奈はさすがに自身の格好を見下ろした。

「これで？」

「ああ、大丈夫です。羽と水かき、細々した装飾品も用意しております」

「何でだよ」

「なぜつて……」

ユージンは物凄く怪訝そうな顔をした。

「仮装しないでどうするんですか」

「ハロウィンか！」

「そんな低俗なイベントを王宮で行いますか！陛下の配慮ですよ……」

「はあ？」

「だつて、佳奈様がドレス着ても、みんな引くだけじゃないですか」  
「……」

佳奈は死んだ。心が。

でも、何でだろう。そうやってみんなに貶されると。

「佳奈様。マリーベル様がいらっしやらないので、それ以上は……」  
「いや、別に期待してないし　ねえ、話しながら着せつけないで」

「そうですね。失礼しました」

なんて言いながら、ユージンは佳奈に小物を装着させる。背中に羽をつけて、水かきつき手袋をつけて、額に「肉」と書かれたシールを貼り、目玉が書かれたアイマスクをつけられて……。

「ねえ、何これ？」

「全身黒タイツエルモです」

「って、あれか。マリーベルと乗ったフライト用エルモ……」

「一応あなたに敬意を払って、キング使用ですよ」

「どんな敬意の払い方!？」

「ぐだぐだ言っただけで行きますよ」

「ぐだぐだ!ぐだぐだって言ったよ!　　ってえ?待って、気配が遠のいてるんですけど!見えないし!いつの間に手錠をツ…でも、そういうのってドキドキしちゃう?」

「黙れ下郎」

「下郎!?ねえ本当にこの格好で行くの?ドレス、乙女の夢のドレスを着せてツ!」

その悲痛な叫びに声を打たれた…わけではなく。悶える佳奈の姿が恐ろしすぎてユージンは情けをかけることにした。

よく分からんが、急にポケットに手をつっこむ。そこからはシャンブーハットが出てきて……。

「はい佳奈様。ドレスですよー」

一部を切って、佳奈の腰に装着させようとした。が、三段腹が邪魔してはまらない。

ふうごおおおっと叫びながら佳奈に押し付け、ユージンはやっと務めを果たした。

「え？ホント？ドレス？でもなんかヒラヒラしてないよ」

「うざいなあ」

「え？なんか言った」

「いえ何も。はい、ひらひらです」

ユージンは窓際に近寄って、カーテンを引きちぎった。そしてそれを適当にシャンブーハットと合体させる。

「満足ですか？」

「髪型は？」

本棚にあったペンをさす。

「化粧は？」

青いインク壺をぶつけてやる。

某3Dの生き物そっくり。

「ほぐら完璧。オキレイですよ佳奈様」

「アイマスクのせいで良く分かんけど、そつかあ…みんな私に悩殺されちゃうねえ」

「はいはい。ヨカッタデスネエ」

「うふふ。なんか私シンデレラみたい。もしかしてガラスの靴があったり…」

ユージンはポケットから取り出した袋を履かせ、輪ゴムで縛る。ついでに油性ペンで「G A R A S U」と書いてやった。

「ガラスの靴ですよ。良かったですね」

「よし。じゃあパーティーへ行こう！」

佳奈はアイマスクをしたまま、ふらふらと歩きだした。

巻ノ二十二 乙女の身だしなみ（後書き）

何ですかね。この話。

まあ適当に流してやってください。

## 巻ノ二十三 変態たちの終結

「ねえ、あの人もパーティーの参加者なのかしら？」

「さあ…でも誰も追いつかないからそうなんじゃない」

「じゃあ誰か飲み物持って行きなさいよ」

「いやよ。怖いし」

「ていうか、あれは何？」

「深く考えちゃダメよ。見てもダメ」

「そうね…そうよ！みんな、これからアレを気にしちゃダメよ！全力でド無視よ！えいえい」

『オー！！！！』

なんて話をされていることも知らず、佳奈はご満悦だった。

アイマスクで視界は利かないが、佳奈の周りからは勝手に人が消えていくので心配ない。

ユージンはそうそうに退散した。素知らぬ顔で使用人の中に混ざる。

「うーん、クッキーの匂い」

佳奈はふらふらとテーブルに近づく。だけど見えない上に背中で手錠をされている。

仕方がないので、直で齧りついた。周囲から悲鳴が上がる。

「　　　　　つうぐ…はは。あはははははは！」

正面から笑い声が上がった。

誰だろうと思うって近づこうとするが、正面にテーブルがあるのを忘れていた。

悶絶する佳奈の様子に、笑声は大きくなる。



「ボ、ボクの美しさを際立たせるためにそんな格好をしたのかい…  
はは」

「ってその声は変態王か！」

「変態って。それを言うなら君だろう。変態残念顔女王殿」

「私のどこが変態なの!？」

「…本気で言ってるのかい?これは本物だ。正式に称号をあげよう  
か?変態残念顔女王?<sup>クイーン・アクリー・プロバート</sup>」

「くううう…なんか意味は分かんないけどムカツク！」

「ははは……で、結局その格好はなんなの?」

玉虫色の全身タイツ。顔は某3D映画のように青。目玉の描かれた  
アイマスク。肉に食い込んだシャンプーハット。そこからぶら下が  
るカーテン。額には「肉」の文字。手錠。手袋は水かき付き。足に  
はビニール袋。G A R A S Uの文字。

髪にはペンがつて、おいおい。全身タイツなのに髪とか関係あるの  
か?…まあいいか。

楽しく思考を巡らせるアルフォンソの後ろに、そつとユージンが近  
寄った。

「私の判断です。楽しんで頂けましたか?」

「おおユージンか!さすが美しい君だ。完璧。まあボクの方が美し  
いけれどね。この世の光は、全てボクから発生しているのだよ」

「もちろんでございます」

「っておい!お前陛下の判断とか言ってただろう!?騙したのか?  
騙したのかオイ!」

「それに引き換えアレは中身も口調も最悪。本当に残念顔。残念セ  
ンス。残念スタイル。残念思考。残念」

「もついいよッ」

佳奈は半泣きだった。ありがたいことにアイマスクで分からないが、アルフォンソはまだ笑っていたが、しばらくすると息をついた。

「まあ確かに面白いけれど。それじゃあさすがにマズイかなあ…ユージン」

「はい」

「この残念顔が普通に見えるように頑張ってくれるかい？」

「…できるかは分かりませんが、力の及ぶ限り」

「いやいやいや！普通にはなるでしょう、普通には！確かにファンタジーの主人公にあらざる体型だけど！他のみなさんが完璧過ぎるんだよコンチクショウ。なんか私のほうが親しみやすいしアットホームでしょう。ねえそうでしょう！？誰かそう言って！そうしないともう立ち直れないから！！！」

誰も行ってくれなかった。

へにゃあ。

佳奈の心が折れる音がした。

その佳奈を、まるで汚いモノに触れるように、ユージンが掴む。

「って、なんでユージン？衣装チェンジでしょう！誰か女の子を…」

「無理だよ。だってみんな怖がってるから」

「えええ？？？私の魅力で、全員悩殺大作戦なの？」

「大丈夫。残念顔君の代わりに、ボクがみんなを悩殺しておくから…：：：ほら国民たちよ！ボクの美しさを存分に愛でるがいい！！特に健康的な肉体を持つ男性諸君。ぜひ仲良くしよう。IN THA

BEDだよ。ハッハッハ」

「ヤバいだろ！あれマズイでしょ？」

「早く行きたまえQUP」

「何QUPって！タイピングでQなんて使わないから、なんか嬉しくなっちゃっただろう！」

「にぶいねえQueen ugly pervertの頭文字だよ」「マジで死ぬ！」

なんて処刑されかねない言葉を吐きながら、佳奈はユージンに引きずられていった。

「なんかデジャブだね」

と、いうわけで衣装チェンジした佳奈。

「…うくッ。くくくくくくく」

くぐもった笑い声。その主の姿が、今度はしっかり見れた。ユージンはアルフォンソの脇で、申し訳なさそうにしている。

「いや…いや…ねえ」

「申し訳ありません。私の力が及ばずに……」

「頑張ったよ。さすが君だ」

「恐れ入ります」

「何なの。もう！」

佳奈の姿はなんともコメントしがたかった。

美しくない。でも敢えて言うほど醜くもない。完全なる中途半端さ。やっぱり。

「残念顔だねえ」

「黙れ変態王！」

「はっはっは。嫉妬かい？しょうがないな。なんていったて、ボクは月の女神と美を競うほどの美しさ…創造神さえも震えあがった美しさなんだから！」

「黙れ若づくり！」

「君は若いのに美しくないねえ」

完全に遊ばれる佳奈。

そこに新たに選手入場。

「あんたたち何やってんのよ」

「おや？フェルデニアじゃないか」

「…前から思ってたんだけど、フェルデニアってマリーベルのこと？」

「……………」

激しい沈黙。

アルフォンソが、眉間を揉みながらため息をつく。

「残念頭」

「黙れ異常性癖！」

「どちらも正しいわよ」

「佳奈様……………」

公式の場にも関わらず、使用人であるユージンも思わず口を挟んだ。

「あなた、私の自己紹介聞いてた？」

「はあ？自己紹介？」

「シエーゼスにあった時のよ」

「……………」

## 回想

「お初にお目もじ仕ります。女王陛下。<sup>クイーン・オブ・ローズ</sup> クレスティア王国王女のフェルデニア・エル・マリーベル・クレスティアでございます。以後お見知りおきを」  
「なっなっ…！」

確かにいつも超自分勝手に、女王様な感じだったが、まさか本物の女王様だったとは…。

## 回想終了

「フェルデニア。さすが我が娘だ。美しい名乗り上げだね」  
「お父様に言われても」

「何だつて！この朝露のように清らかで、燃え上がる炎のように激しい美貌のボクなのに……」

「…え？で？結局マリーベルはフェルデニアなの？」

「そうだつて言ってるでしょ。偽名よ偽名」

「何でまた…」

「面白いじゃない」

「マリーベル…それは叔母上の名前だねえ」

「は？叔母さん？もう良くわかんないんですけど」

「私たちみたいなのは、本気で名乗ろうと思ったら果てしない名前があるのよ。その中に親しい人の名前とかも入ってるの」

「は、はあ」

もう佳奈はどうでもよくなった。

ため息しか出ない。

「まあそれはいいや。それよりも気になるんだけど…変態王の隣にいるのは誰？というか何？」

アルフォンソの隣には、赤い巻き毛のヒゲが立っている。肩幅はかなりでかい。なのに佳奈のよりも可愛いドレスを着ている。

筋骨隆々としていて、ぜひ土木現場にいつてほしかった。

アルフォンソは、そんなヒゲを抱き寄せて腕の中におさめた。…と言っても、ヒゲの方が背が高い。

さらに愛しそうに首筋に口づける。…そんな様子でも絵になる美形の不思議。

「何って、そんな言い方をするんじゃないよ。君よりよっぽど美しいじゃないか！輝く三角筋！計算されつくした腹直筋！芸術的な大殿筋！ああ、何をとつても美しい。肉厚の唇に、今すぐにも口づけたいいいいいい」

「ゴメンナサイ。人類のために死んでください」

「何を言っているんだ！ボクが死んだりしたら世界が闇に包まれてしまうよ！！世界中の筋肉美を持つ男性諸君が、胸の筋肉をびくびく言わせて悲しんでしまうよお！！」

「今だけは佳奈の味方かしら」

「今だけ！？」

そんなアホな人々の周りから、徐々に人が離れていく。

いや、まるで嵐のように近づいてくる影がある。開け放たれた扉の奥から、この広間に向かってかけてくるのは……。

「フェルデニアさまあああああああああああああああああああ」

「きゃあああ本当にフェルデニアさまだわあああああああああああああああああ」

ドレスをたくしあげた軍団。

砂煙をあげたイノシシ軍団。けれどその面々は、みな一様に美しい。

「おや？フェルデニアの親衛隊じゃないか。どうやらご帰還が伝わったようだね」

「そうね。でも、このタイミングはマズイんじゃない？」

「そうだね。シェーゼスの息のかかっていない貴族をこっそり集めての会なのに、これでは……でも彼女たちの情報収集能力には恐れ入ったね」

「そんな大事な会だったんかい」

とか話している間に、軍団が近づいてきた。

『フェルデニア様！本日も最高に麗しくございますね！……！！……！！……！！……！！』

「そうね。みんなも相変わらず綺麗よ」

『きゃああああああああああああああああ』

「つて、マリーベルつてそんなキャラだっけか」

「マリーベル様は、元来の女の子好きですよ」

「そうだったの！？え？やだ！私襲われちゃう！？」

「いえ、それは絶対大丈夫です 身の程を弁えるよな……」

「え？なんて言った？」

「いえ、何も」

なんて話していると、急に親衛隊の視線が佳奈に集まる。なぜか、その瞳には殺気が宿っていて……。

「その不細工！何でそんなにフェルデニア様の近くにいるの。今すぐどきなさい」







巻ノ二十三 変態たちの終結（後書き）

とかで終われるかッ！って叫びたくなりますね。  
でも、果てしなく壊れているので、書いてる方は楽しいです。

## 巻ノ二十四 王の虚構

「というわけで、この残念顔がボクたちの探していた<sup>クイーン・オブ・ローズ</sup>バラの女王の立花佳奈だ」

アルフォンソの声が、広い広間に響き渡った。

誰の耳にも今の言葉は聞こえていたが、全員が聞き返したい思いだつたろう。

「ちなみに、クレスティア王国における正式な称号は<sup>クイーン・アグリー・プロ</sup>変態残念顔女王だから、みんなよろしく」

「黙れ変態王！…えーとそういうわけで、佳奈ちゃんです。よろしく」

佳奈はそう言つて自分的には最高に行儀よく礼をした。

のだが、さらに上質なシルクのドレスを着ているのだが。…アルフォンソの隣に立てば、なんだか…なんだか…見ている方が悲しいばかりだった。

…まあ、それだけならまだしもだ。ここに集まった貴族たちは見慣れている。

だが、なぜか逆隣りには超天才的美貌最強王女のマリーベル…公式にはフェルデニアがいる。

自他共に認める最高の美貌に挟まれた、三段腹の主人公立花佳奈。

「何だか…哀れだな……」

とある貴族の言葉は、そこにいる全員の声を実に表していた。

まあ、そんなわけで。ある意味その場の人々は、佳奈に親近感を抱いたかもしれない。

アルフォンソは、広間に向かって笑いかける。

「だが、こんな残念顔じゃ皆が信じられないのかもしれないだろう。だが、残念ながら事実だ」

「残念！？勝手に連れてきて残念！？」

「完全に予想外だった。この世界の至宝である、驚天動地の輝く美貌を持つとしても、この残念顔のことは予想不能だったのだ」

「ていうか口調なんか違うよね？人前だから？人前だとそうなるの????????」

「これを見たまえ」

「ド無視かいな」

アルフォンソは、どこからか懐中時計を取り出した。

水晶のように透けた、けれど誰も知らない未知の物質でできた時計。そこには赤いバラの花が浮かんでいるが、今はほとんどが葉に覆われている。

「って、それ私のじゃん！いつの間……」

懐を探るが、あるはずがない。

王様は窃盗団。とか、なんだか某児童文庫のタイトルっぽい名前が浮かんだ。

「これはバラの国の継承物だ。バラの国を統べる権利のあるものだけに、証が現れる。コレが触れた瞬間このバラが浮かび上がった」

おおおとざわめきが満ちる。

アルフォンソが、どこか満足そうに頷いた。

マリーベルは、つまらなさそうに目を閉じている。

「さらに、コレはバラの女王の記憶も持っている」

「さつきからコレ言うな！」

「うるさいなあ空気を讀みたまえよ。人前で残念顔と呼ばないだけ感謝してもらいたいね」

「さつき言つたやん」

彼はゆるゆると首を振った。

「まあ仕方ない。コレは本物だ。ボクが認めている。仕方がないから皆、受け入れてやってほしい。質問がある者」

最前列にいた貴族の男が、おずおずと手を上げた。

「あのお……」

「なんだ。そこそこの美貌の持ち主よ」

「恐縮です、陛下。…それで、彼女は戦力になるんでしょうか？」

「ああ、そうだった。コレは魔法を使うらしいよ」

「なッ！ま…マホウ！？」

先ほどとは比べ物にならないほど、その場は雑然とし出す。

それほどまでに、それは驚愕の言葉だった。

元々、クレスティア王国には魔法があった。それはバラの香りを具現化する力だった。

けれどある時それは使えなくなった。全てのバラがトゲを生やし、長い眠りについてしまったからだ。

バラの香りに誘われた世界の精霊たちは、トゲに刺さり消滅してしまった。

そうして、時はとまってしまったのだ。

バラは元々、自らの力でエネルギーを作り出せない。だから強い匂

いを放ち、精霊を呼び寄せろのだ。  
そうして寄ってきた精霊のエネルギーを取り込み、力に変える。  
だから今、魔法は使えない。  
自分の命と引き換えに、眠りにつく直前に取り込まれた力を使うことはできるが。

それはトゲに全身を突きぬかれるような、激しい苦痛の上に成り立つ。

こんな世界で、もしも魔法が仕えらしたら、それはどんな存在なのか？

30年前。全てが起こる直前に、バラの国の臣下によって異世界に飛ばされたという女王。

果たして、その話は本当なのだろうか？

「あ、あの……らしいとはどういうことでしょうか……？」

「ああ、ボクは見ていないからね。見たのはフェルデニアだ」

「女王殿下？」

「それと、ユージンもよ」

「ほ、本当なのですか」

「残念ながら、本当よ」

「何でみんな残念っていうの!？」

『口を挟むな!』

親子の声が重なる。

佳奈はどこか嬉しげな顔でしゅんとなった。

「使った魔法は、ユウ・ユウ・ユウ・ユウ・ユウ風切空。初級魔法だけどね」

「懐かしい響きだな。まあそういうことらしい」

何だか、マリールが言っていると信憑性がある。  
全員が黙った。

先ほどの男が、再び眩きをもらす。

「クイーン・オブ・ローズ  
バラの女王を見つけた。ということは、戦いは近いのですか……」

「さあな。それは向こうの出方次第だ」

「しかしッ！もうかなりの数の貴族が取り込まれています。後手に  
回るばかりでは取り返しのつかないことになりかねません」

「だからだよ」

「え？」

「かなり取り込まれてしまったから、下手に手を出せない。戦力は  
互角……いや、向こうの方が上の可能性だってある。先走っては向  
こうに開戦の理由を与えるだけだ」

「だからと言って何もしないのは……」

「…皆に黙っていたことがある。実は、反王国派の貴族の元に間者<sup>スパイ</sup>  
をやっている」

「ッ！それで……」

「内々に寝返りを求めたりした。だが、彼らは反応しなかった。  
…まるで自我がない様子だったらしい」

「自我が？それは」

「操られているんだろう。魔法で。いいように利用されているらし  
い」

「そんな力があるのですか！」

「ああ。不安を与えなくなかったのだな。これまで黙っていた。  
…奴の力は、強大だ」

何か衝撃が、さざ波のように駆け抜ける。  
けれど佳奈は、別の思惟を巡らせていた。

私は、あの子供の力を知らない。

彼女の　彼らの言うところのバラの女王　、アマーリエの前で、  
あの子供が力を使ったことはなかった。  
どう考えても、アマーリエ以上の力があつたとは思えないけれど。  
…けれど、私がアマーリエと同じだけの力を持っているともかぎら  
ない。

というか、私はまだどうするか決めていない。  
あの変態王につくか。子供につくか…。

けれど佳奈の心中には関係なく、物語は過ぎていく。

「しかし、きつと。戦いは遠くない」

アルフォンソの声が鈍くぼやけて聞こえる。

「我らにはバラの女王クイーン・オブ・ローズがついている。2人の王がついているのだ。  
負けるわけがあるか？」

不敵な笑みは、無意味な自信に溢れている。  
けれど佳奈は、それが虚構だと知っていた。  
本当は誰よりも不安なのだ。王キングとクイーン言う存在は。

広間が、揺れる。

そこにいた全ての人々が、歓喜の声を上げたのだ。

…いつの間にか、佳奈はこちら側になつたらしい。  
いいのか。悪いのか。私にはわからない。けれど、どこか身体  
の奥深くでザワメキが響き出す。

違う。違う。違う。違う。違う。



その言葉が…いや単語が、思考回路を犯す。  
どうすればいい？どうすればいい？

必死に問う。誰も答えてくれない。誰も気づいてくれない。

あの時と、同じだ。

闇だ。闇が、私を抱く。

私は闇しか、抱くことができない。

あの子供に会うまでそうだった。

アイタイ。

擦じれた感情。けれど深く、心に根差す感情。

佳奈は知るはずもなかった。

アルフォンソとマリーベル。2人の瞳に、再びあの面影が映っていたなんてことを。

巻ノ二十四 王の虚構（後書き）

暗い心配が……！

ヤバいです。ヤバいので全力で逃げます。

次回、なんとか明るいうムードに……なれるのでしょうか？

巻ノ二十五 新キャラ、ですの

「ハミルトンですの」

「は？」

「ハミルトンですの」

「え、だからなに？なんなの怖いんですけど」

「だからハミルトンですの」

「……」

さすがの佳奈も後ずさった。

するとハミルトンと名乗る少女もついてくる。

華奢な身体はか弱そうだが、漲るエネルギーはもはや地上のものは思えなかった。

そんな少女に瞬きもせず見つめられたら、なんか泣きそうにならな  
いだろうか？

歓迎パーティー終了後、一夜明け部屋から出た直後の出来事だ。

「あの…どいてくれませんか……？」

「ハミルトンですの」

先ほどからずっとこんな感じ。

ただハミルトン、ハミルトンと繰り返す。赤ん坊が初めて知った言葉のように、まるでそれが万能の意味を持つとでも思っているように。

…いや、そんななんか真面目な解説はいいのだが。

「ハミルトンさん…？だからどい」

「そうですね。わたくしはハミルトンと申しますの」

初めて違う単語を喋った。  
佳奈は感動に打つ震えたが、ハミルトンはやれやれと言うように首を振った。

「本当に残念頭ですのね。その頭に詰まっているのは不埒な妄想だけですか？わたくしはもう128回も名前を名乗っていてよ。いつまでたつても名を呼ばないんですもの。疲れましたわ」  
「なぜに不埒な妄想…」

いつからそんなキャラになったのだろうか？  
そんな役目はあの<sup>アルフォンソ</sup>変態王に任せておけばいいのだ。  
というか、こいつは誰だ。

「だから、ハミルトンですの」  
「心を読むな」

さらにドツと疲れた。  
佳奈は両手をあげて見せる。

「わかった。何が分かったか分かんないけど、とりあえず分かった  
で結局」

「きゃああああああああああああああああああああ」

絶叫が轟いた。

佳奈は耳を塞ぐこともできずに凍りついた。  
しばらくして正気に返った佳奈が、慌ててハミルトンを止めようと手を伸ばす。

「触れるな下郎おおおおお変質者あああああああああああだー」

「……………かあ……………」

全く取り合ってもらえない。

すると周りに人が集まりだす。みな一様に青い顔。

しかも全員武器持参。大量の花瓶がこちらに向けられている。

「誤解いいいい誤解だからあああああ」

佳奈が再び両手を上げる。

空気が凍りついた。

花瓶が…宙を舞った。

「…ほんっもう何なんですのぉ」

真っ赤な顔をしたハミルトンが吐き捨てた。

佳奈はなぜか正座して、大量の女の子に囲まれている。なぜか全員目を合わせようとしない。

「で、両手を上げることの意味を知らないと言いますの？」

「え、ええっと多分、あなたたちの知る意味では」

「ふん。変質者め、ですの」

「いやいや、なんかギャグみたいになってるよ」

「それで、意味は…意味は………」

周囲の全員の顔が熟れきった果実のようになる。

ハミルトンがぼそぼそ言う内容に佳奈も次第に慌てだした。だ、ダメだ読者さまには聞かせられない。

ここは主人公としての権利を最大限に発揮して。

しばらくお待ちください。

「じほん」

今度の咳払いには佳奈だった。

もうピーーどころか、ドカーンと被せられそうな放送禁止用語が飛び出しまくった。

ハミルトンがキツと佳奈を睨む。

「もう！何を言わせるんですのっ」

「す、すいません」

佳奈もさすがに謝った。

なんだかホントにすいません。こんな可憐な人に…なんかすいません。

佳奈にはプライドがないので、地べたに這いずるように土下座した。全員引いた。

「本当に本当に残念残念残念残念残念残念」

「怖いっ怖いっ！」

「アルフォンソさまの言うとおり。何もかも残念ですの」

「言い過ぎ…って変態王アルフォンソおおおおおお」

佳奈は叫んだ。奴が、奴の差し金なのか。

「何しに来たの？マッチョ探し？」

「…それも否定しませんけど。わたくしはあなたに会いに来たんで

すわ」

「だから何しにって」

「今なお目覚め切らない残念人生プランのあなたに、魔法を教えにきたんですの」

「目覚めるって…今起きてるけど…?」

「バカは黙って聞いてればいいんですの。とりあえず、あなたはどんなに残念でも貴重な戦力なんだから、使い物になるようにしなければいけないんですの。アルフォンソさまが…アルフォンソさまが、わたくしにまかせてくださったのですわ…」

なぜか恍惚とした表情。

佳奈も引いた。

どうやら変態王の信奉者らしい。何がいいのやら。

「たとえどんなに、あなたに死んでほしくても…わたくしは我慢して、自らの務めを果たすんですの!」

「いやいやいや!聞き捨てならないからねっ死んでほしいってなに? なんなの?」

「つまりわたくしはあなたの師匠になるんですわ。跪いて教えを乞うんですの。ハミルトン様と呼ぶんですの。泣き叫ぶがいいわ、そしてわたくしに救いを求めるんですの!…!!…!!」

「危険だ…やばい危険な奴が増えた」

「さあ、呼ぶんですの!このわたくしが、下賤なあなたに名を呼ぶことを許しているんですのよ。さっさとなさい」

「ひっなんか出てるよ!出てるって!!黒いのがッ」

「呼べっていつてるのよ…!ですの」

「演技か!演技なのか!??」

ハミルトンが足を一振りした。なぜかクツの底から刃物が覗いて、首に……首筋に。

「た、助けてください。ハミルトン様」

「分かれればよろしいんですの。さあ、アルフォンソさまに褒めていただくんですの。そのために早くしないといけませんわ。早くするんですの」

「な、何を…?」

「修業を始めるんだから、準備に決まっているんですの」

「し、修業もおおおおお????」

こうして、なんだか分からんが修業が始まったのだった……ですの。



巻ノ二十五 新キャラ、ですの(後書き)

あ、頭がおかしくなりました。

とりあえず、平和な日常がやってくるってことか？(いいのか?)

## 巻ノ二十六 修行は危険の香り、ですの

「ところで、修行ってなんですか？」

王宮を出て2日。ハミルトンに先導されるまま歩かされた果て、待っていたのはそんな一言だった。

佳奈は巨大なリュックに押しつぶされながら激しく顔面を引き攣らせる。

「？何ですか？醜い顔が見れたものじゃなくなってよ」

「……泣いても、いいですか」

「気色が悪いからわたくしが見えない場所だなさいよ」

というか、泣いた。

そこはなぜか山の上だった。どうやら随分と高いらしく遠くに王宮が見える。雲が随分と近かった。

佳奈はラフな格好だったがかなりズタボロである。対してハミルトンは、繊細なドレープをたっぷり重ねたドレス。傷ゼロ。

ここに他人の目があれば、捨てられた奴隷とそれを助ける女神の構図が成り立つだろう。

しかしその女神は、幼く見える容貌に一滴の笑みをにじませることなく仁王立ちする。

「修行と言えば何か、言ってみるんですの」

「えー修行ーあ？」

残念ながら現代日本に、修行を行う風習はない。いくら佳奈があらゆる面で浮いていてもだ。

知識があるとすれば、いつとも知れぬうちに刷りこまれた映像。



「いいですわよ!！」

「なにがあああああああ!?!?!?!」

佳奈の絶叫はむなしく響く。その時急に空がかげろ。それも佳奈の周りだけ。

ふつと視線をあげて佳奈は言葉を失った。

これまたお決まりの展開。丸太が、眼前に迫っていた。

「さあ起きるんですの。次の修行ですわ」

「…返事がない。ただの」

「変態のようなんですの。役に立たない変態は社会の害ですの。害虫は駆除しますわ」

ハミルトンは信じられない動きで、短剣を目玉にすれすれにセット。

「暗殺術では国でも1・2を争いますの。跡形もなく、キレイに処理してあげますわ」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。もうしません」

「頭の悪い子には身体で教えてさしあげて?が我が家の家訓の1つですの」

そついうなり、短剣が小さくなぎ払われた。

額に稲妻形の傷ができる。カナー・ポッター。

そして例のあの人はほほ笑む。ちゃんと鼻はあるのでご安心。

「ついでに言うなら、迷うなら殺しちゃえー も我が家の家訓です



たくしの別荘は一生完成しないんですわ

「え、じゃあやつぱり中止ちゃう?」

「これは修行なんですの」

ハミルトンは腕を組んだ。

「魔法ですわ」

おっと。なんだか真面目っぽいぞ。

佳奈はちよつと慌てた。というか、何で滝に打たれたのだろう?

「クレスティア随一と称されたこのわたくしが指導するんですの」

「えー…でも私、魔法とかよく分か」

「黙るんですの。あなたに選択権を与えた覚えはありませんわ」

「……」

「ただわたくしの言うとおりにするんですの」

捲し立てられて、佳奈はうふつと笑った。

やつぱる人間、賢くいきなきや。

「分かりましたー あたし、ゼーんぶ言うとおりにしちゃいますっ

」

だれ?とかつつこんではいけない。

なんだかこの世界にきて、世渡り上手になった気もする。

ハミルトンは満足そうに頷いた。

「でも教えようにも今わたくしは魔法が使えないんですの」

「え?そうなの?何で?」

「アルフォンソ様の言うとおり、残念頭なんですのね。何度いわせ

るんです？今この世界で魔法を使える人は存在しないんです。アルフォンソ様に害なすあの勘違い王子とあなた以外にはですけど」  
ああ、なんか聞いたきもする。  
しかし…。

「それならどうやって教えてくれるの？」

「1から教える必要なんてないんですの。だってあなたはもう魔法を使っていたんですもの」

「ええ…そんなこと言われても……」

使おうと思うと使えない。勢いか、または危機的な状況があつて使えていたのだ。

いざ考えてみると、いったいどうしていたのやら。

ハミルトンはふんと鼻を鳴らし、腕を組んだ。そうすると、頭一つ分も小さな少女に見下ろされているような気分になった。

「あなたには無駄な固定観念が染みついているんですよ。これだから外の世界の住人は……。仕方がないですわね、アルフォンソ様に頼まれてしまったのだからわたくしが教授して差し上げますわ」  
そついうなり、佳奈に荷物を下ろすように指示を下す。

「静かな方がいいですわね。森に入りますわ」

そしてさつさと歩きだした。

佳奈も慌てて追いかける。

夕方の森は薄暗く、木々の指先からこぼれ出す飴色の空が際立って見えた。

それと同じ甘い色の髪を持つハミルトンは、まるで太陽と月の狭間

に住む精霊か何かのようだった。

「さあ、さっさと始めるんですわ。ばあやの歯並びより酷いスカスカ頭には一分一秒もおしいんですの」

いや…悪魔かもしれない。

とりあえず佳奈は、悪魔師匠に従順に従う。

「何すればいいの？」

「そうですね…とりあえず木の葉のざわめきでも聞いているんですの」

「はぁあ？」

ギロリと睨まれる。それになぜだかキュンとする私は変態だろうか？  
うん。とりあえず実行しておこう。

ふうーと息をはく。

意識して見ると、静かだと思った森の中はざわめきに満ちていた。  
ごくわずかの微風でも、木々たちは敏感に感じ取り、くすぐったそうに身体を揺らす。

何やら生き物の声のようなものもする。

小さなさえずりが聞こえた。羽ばたく音がする。

地を覆う野花たちは、愉快そうにざわめいていた。

思わずくすりと笑みが漏れるほど、そこには“声”が溢れかえっていた。

そこに、ハミルトンの声が心地よく響く。ごく自然に、森に入り込んだ声だ。

「自分も森の一部になったように意識するんですの。森のエネルギー



「が身の内に入る…それと同じだけ、森に出す……。循環を、巡りを強く意識するんですわ」

声に合わせるように、ごく自然にそれはなっていた。

清々しくも力強い森の力が、体内に満ちる。

何やら妙な解放感に包まれた。気持ちがいい。まるで自分が空気にもなったようだった。

空にたゆたうような…小さな頃に想像した、雲の乗り心地にも似ているかもしれない。どこまでも行けそうな気がする。

「意識を、大きく広げるんですね。大きく両手を伸ばすんですね。大空を全て覆い尽くして、自分の中に抱え込むんですねよ」

すうと奇妙な風が吹き抜けた。（作者は真面目に某伝説の勇者様の話を再現したくなりました。頑張ってお付き合いください）

それに運ばれるように、意識が大きく拡散する。霧散…といった方が正しいかもしれない。

その範囲が広がるにつれて、自我がどんどん薄れていく。しかしそれも心地よい。

きつと心を持ったまま許容できるような状態ではないのだろう、と何となく思った。もしかしたら、神様もそんな風なんだろうか？

「意思是絶対捨ててはダメですよ。感覚を広げたまま、かつバランスよく自分の存在を意識するんですの。…そうしなきゃ、戻ってこれなくなりますのよ」

なんとなく声が聞こえる気がした。けれど上手く理解できない。…いや、理解している。ちゃんと聞こえている。けれどそれは、どこか人ごとのよう……。

その間も、どんどん感覚が研ぎ澄まされて、知覚できる範囲が広が

っていく。

まるで自分が、この世界の全てを抱きかかえているように。

先ほどまではわずかだった風が、勢いを増し始める。

木々の不安げな声は高まる、生き物たちはとたんに黙り込む。

風が渦をまく。　甘い香り。この頃馴染んだ、あの香り。

「ッ！やめるんですの。そのままでは危険ですわっ！」

また声がする。でもそれだけ。

それに対して何も感じない。

ただぼんやりと、言葉の意味を咀嚼しているだけ。

だってそんなの、拾い上げるに値しない微々たるものだから。

私の抱えるこの世界の、ざわめきの1つにすぎない。

そんなものを一々聞いていられるろうか？

世界にはこんなに“声”が溢れている。

笑い、嘆き、怒り、嫉妬、憐れみ、喜び、期待、裏切り、絶望……。

誰もが自分勝手に声を上げ続ける。

その全てが、私には聞こえる。

頭が破裂しそう。

そう思ったから感覚を鈍くする。すると意味を深く考えなくなる。

鈍く、鈍く、どんどん鈍く。

“声”が、廻るめぐるメグル。

もつと意識を遠く話して…。

「自我を失うんですの！身体を見失いますわ！永遠にこの世界に揺られるつもりですの？」

聞きなれた音楽のように、それは自然と耳に入り、すり抜ける。

「もっと耳を凝らすんですの！ 辺りに哀れな意識の残骸がありましたよ！ そのままでは… あなたもそうなりますのよッ！」

そう言われても… 今でも吐きそうなほどに“声”が響くのに、これ以上耳を凝らす？

自然と身体はそれを拒否する。

視界の中には、テレビで見た田舎の星空のような景色が広がっている。

その1つ1つに触れば、それは誰かの意識と交わる。

そう… それはまるで神のよう。

うっとり、心地よい波に揺られた。

恍惚と、力の渦に絡みとられる。

私は神。

神は私。

神は世界。

世界は私。

どうしよもなく楽しい気分には酔いしれた。愉快で愉快で堪らない。もしかしたら私は笑っていたのかもしれない。

誰かの悲鳴が、美しいユニゾンデュエットを奏でる。

私と誰かの二重奏。

タクトを振る神と、世界と言う名の管弦楽団オーケストラによる大合奏。

ああ、バラの香りがする。

混沌が、濃厚なそれに覆い尽くされていく。

「あ、ああああ…」

身体の近くで誰かが呻き、膝から崩れ落ちる。

そして私は深い闇の中へと、くずおれた。

巻ノ二十六 修行は危険の香り、ですの（後書き）

…どれだけ振りの投稿でしょう。

そしてどうしてシリアスに？

作者の気分ですかね。すいません。

うーん。良く分からないです。

巻ノ二十七 シリアスより帰還、ですの

目の前で繰り広げられる光景に、ハミルトンは、なすすべもなくずおれた。

恍惚とした表情で、鈍く瞳を輝かせるのは、先ほどまでバカな掛け合いをしていたはずの少女。

残念頭とどんなに罵っても、やはり彼女はバラの女王。クイーン・オブ・ローズ その圧倒的な力を前にして、自我を保つのが精一杯。

全く…情けない。

敬愛するアルフォンソ様より、せつかく授かった使命なのに。命を賭してもなさねばならぬ、わたくしの全てなのに。いったいわたくしは何をしているのだ。

そう自分を叱咤するも、濃厚すぎる魔法の気配に、恐怖と畏敬が身を蝕む。

くつと唇をかみしめた。

口内に広がる鉄の味だけが、妙に鮮明に現実を感じさせる。

わたくしには、止められない。

絶望を告げる声だけが、神託のように駆け巡る。

吐き気がして、頭が回らない。思考がまとまらない。ただただ、恐い。

歯の根がかみ合わないまま、カタカタとだけ鳴き続ける。

「ダメ…ですの。だめ。だめだめだめ」

出来ることはある。止められなくたって、それが傍観者になる理由になるだろうか。  
否。そんなことはない。

「ま…ほう……」を」

この世界には元々魔法が溢れていた。  
バラの馥郁たる香りに引き寄せられた精霊を、うまく使いこなしていた。バラと人間は共存関係にあった。

バラというのは、人間の亜種だ。はたまた人間がバラの亜種なのかもしれないが。

バラはまずこの世界に生まれる。その時点で自我はない。

しかし成長していき満開の花が咲くころ、生き物としての心が産声を上げるのだ。

しかし花は花。意識はあろうとも、そこから動くことも伝えることもできない。

ただ黙って風に揺られ、無造作に引き抜かれるのを見ているだけ。

だからバラは精霊が好む姿に、自らを変化させた。そして自らの力と精霊から奪った力を練り合せて、別の姿を作り上げた。

しかし彼らは、この世界に存在することはできなかった。死者が黄泉に旅立つように、精神だけの彼らとはどまれなかったのだ。

そんな彼らが住むための世界を作った。それが初代、バラの王。

だが、核である花はこの世界から動かせなかった。

だからこそその共存関係。

バラは人に魔力を与え、人はバラに永劫の安全を約束した。

けれどそれは30年前に破られた。無残に引き抜かれたバラによって。しかも、それを行ったのは…。

ちがう。

そんなことは今はいい。そうではなくて。わたくしは。

「ま、ほう…を」

それで何ができるとも思っていない。自分の力くらいで、バラを統べる王を止められるなどと、そんな思い上がりはしていない。

けれどただ少し、被害を減らすくらいのことではできないのではないだろうか？

そう考えた、瞬間。

視界がブレるほど強く、頬をぶたれた。痛みを意識すると、わずかに思考が明瞭になる。

ぱっと振り返ると、そこには王女がいた。

「ふえる…でに、あ…さま？」

「今はマリーベルの方が都合がいいわ。王女サマは現在、お城で式典に参加中だもの」

「は、はい」

「それよりも」

マリーベルはハミルトンをきつく睨んだ。

「今、何をしようとしたの」

「え？」

「何をしようとしたって、聞いているの」

刃のように鋭利な叱責に、ハミルトンは子供のようにつつむいた。



マリーベルははあとため息をつき、どこからか小箱を取りだす。30年ほど前は一般に出回っていた生活用品だ。魔力が詰められた箱携帯魔力。王城には回収されたこんなものが、大量に保管されている。それをぽんつとハミルトンに投げる。

「貴族向けに市販されていた高級品よ。この辺りには魔法具も設置してきたし、少しくらいは持つはずよ。まあ相手があれじゃあどうなるか分かったもんじゃないけれど。それであなた何をしようとしたの？」

「…魔法を、使おうとしました」

項垂れながら言うと、マリーベルは始めて小さな笑みを浮かべた。全くもつ、というような優しげですらある笑み。

「無理やり魔法を使った者のなれの果て『千の茨の死装束』フューネラルドレスってどつかの詩人が言ったらしいじゃない。全身に小さな穴があいて、その全てから真っ赤な血があふれて全身を染める。しかも苦痛に悶え続けて、でも致命傷を与えられることはなく、最後は狂って死んでいく」

が、内容は全く優しくなかった。

思考がはつきりして、正しくそれを理解すると急にぞつとした。

マリーベルに止められていなかったら、今頃自分は血まみれで壊れていたのだ。

ハミルトンがしょんぼりすると、マリーベルはもう何も言わなかった。

瞬間。

パリンと何か割れるような音がした。次いで濃厚な魔力の渦が侵入してくる。マリーベルの舌打ちも、それに飲み込まれた。箱が砕けた。魔法具が軋む。

急に風が戻ってきて、ふらついてしまった。

正直、特に作戦も対策もなかったマリーベルは、苛しまじりに髪をかきあげる。

ハミルトンが行おうとしたことはバカらしいと思う。

でも、確かにそれは自分にできる少ない選択肢の中から選んだことなのだろう。そう、認める気持ちもある。

このバカけた力を止める方法なんて、本当にあるのだろうか？ いや、あるはずだ。

「あいつはバカけてる。頭も性格も容姿もバカけてる。そんな奴を止めるの、バカけた方法で十分なはずよ」

王女様のとんでも理論に固まるハミルトンに、マリーベルはそっと耳打ちした。

彼女の肩が跳ねる。超嫌そうだ。

「本気、ですか？」

「もちろん」

急にムードが一変してしまった。それがいいのか悪いのかは不明。とりあえずマリーベルは、小柄な少女を無理やり怪物の方に向け。満面の笑み。

「さあ、行って御覧なさい。せーの」

ハミルトンはぎりぎりまで迷って結局腹をくくった。

「きゃあああああああああ、かなさまあああああああああ  
あああ！！！？？？？？すてきいいつつつつ、こつちむいてええええ  
ええええええええええ」

マリールベルがうくつと変な音をたてた。若干笑いを堪え切れなかつたらしい。ハミルトンは羞恥に顔を真っ赤にした。刹那。魔力の渦が、格段に弱くなった。

これにはハミルトンだけでなく、発案者も絶句した。

なんて、なんて展開なんだっ！

今がチャンスだ！これでいいのかとも思いつつ、せつかくのチャンスを棒に振るのはバカだと、悲鳴のような叫びが重なる。

「オキレイですよ」

「アクシュしてください！」

「オウツクシイですわ」

「テンサイよ」

「ビボウ」

「サイシヨクケンビ」

「セカイイチ」

「イチバンよ！」

信じられないことに、どんどん魔力が弱くなる。

2人はなんだか脱力した。自分たちがほんの一瞬でも何を悩んでいたんだろうと。特にハミルトンは命まで捨てようとしただけに、ダメージは生半可じゃない。

しかしどうも今一步。その状況に焦れたマリールベルがさらにトンデモを口走る。

「あああああ！見て、あそこに超美少年がいるわっしかも見るからにDSの変態野郎よ！」

魔力の気配が、遠のいていく。

佳奈は、恍惚とつつとりと、自分の力に酔いしれていた。この国のこの世界の全てが、佳奈の手に乗っていた。全てが見える。全てが聞こえる。

限界まで広げた意識のせいで、感情がにぶくなっていた。だからこそ全てを眺められる。

この世界には際限ない残酷さがある。心などあれば、ほんの一日耐えることさえ不可能だろう。

だからこそ、世界に救いはない。神は何も感じないから。

真黒だった、真っ暗だった。けれど同時に、光に溢れ真っ白だった。世界には常に矛盾した2対がある。それが世界だから。

佳奈は、自分がどれくらいここにいるのか分からなかった。生まれた時からの気もするし、数秒前のことにも感じる。

この場所では時なんて関係ないから分からない。必要ないから“な



にドSの変態野郎よ！』

どこ！？

思わず探そうと、一ヶ所に意識を集中した。  
その瞬間、全てが弾け飛んだ。

気づけばそこは夜の森。

淡い月光の元に、2つの人影があった。

佳奈はしばらく思考がまとまらなかった。

近づいてきた2人が見るからに外国人なのを見て、首を傾げたほどだ。

しばらくして思考がまとまると、今度は自分が何をしているのか分からない。

が、なんだか2人：マリールベルとハミルトンは駆けてきている。

佳奈の少ない脳みそと知識でも、なんかこれが再会の感動シーンであることは理解できた。

だから佳奈はお約束に則って、両手を広げて彼女たちを迎えた。が、

「ぐうをふお」

なぜか頭の両側から激しい衝撃が。脳が揺さぶられて、たつてもいられず佳奈は座り込んだ。

そこにさらにリンチよろしく足蹴にされまくる。

「なにやってるのかしら。迷惑かけて。死にたいんのかしら死にたいのね!」

「残念頭のくせに迷惑かけてっですわ。今この場で殺ってやりますの」

「私は寛大だから選ばせてあげる。磔刑と水攻めと鉄の処女。さあどれがいいかしら!」

「もっと散々いたぶった後に殺してやりますわ」

「ふふ知ってるかしら? ハミルトンはクレスティア随一の暗殺者であり、自白愛好家なの。上手に自白させるのがだああいすき?」

「そうですね。ありとあらゆる手を尽くしてやりますの」

「その後両足に馬車縛りつけて股から真っ二つにしてやるわ」

ぎゃーぎゃー頭上で交わされる恐ろしい会話に、佳奈は震えあがった。

「お、お許してください。お代官様」

「これ以上ふざけたマネすると2対のパーツ全部1個にするわよ」

「ごおおおめんなさいッッ!!!!!!」

結局許しは貰えず、リンチ続行。ふっ、儂い命の灯火さ。とかカッコイイこと言ってみたり。

まあとりあえず、かくして色々解決!

こんな感じで、佳奈は魔法を習得したってことでいいでしょうか。

お粗末さまでした。

巻ノ二十七 シリアスより帰還、ですの（後書き）

お、お久しぶりです。

というか読んでいる人がいるかもしりませんが。

どうでもいい話なんですけれど、もうすぐ作者2がやってくるんですよ！

みなさん乞うご期待！！



## 巻ノ二十八 お誕生日祝いは貴女の身体で

そもそも、すべての始まりは変態王のささいな一言だった。アルフォンソ

「ユージン、君は恋人はいないのかい？」

時刻はお昼過ぎ。てっぺんに昇った太陽がギラギラと執務室の窓を通して侵入して来る。

キーコ、キーコと椅子に座りながら書類の山を眺めているアルフォンソに、ユージンは首を傾げた。

「…恐れながら、質問の意味が分かりかねますが」

「いやいや余計な解釈をせずに、言葉をストレートに受け取りなさい。まんまの意味だよ」

ハア、と溜息を零すと口を付けていた紅茶のカップを机に置く。中途半端に残された紅茶は、強い昼の日差しを浴びてキラキラと輝いていた。

ちなみに、この紅茶はアルフォンソが自分で用意したものだ。

最近、この変態王は『特性紅茶を作る』という新たな趣味を発見したらしく、毎週何回かは味見役としてアルフォンソが作った紅茶を執務室で飲むのがユージンの日課になっていた。

質問されたユージンは逆に聞き返した。

「この私に、恋人がいると思いますか？」

「ん〜だって君を嫌う女性レディーがいるとは思えないがね。有能、容姿も完璧。まさに『りあるに充実』じゃないか」

なかなか話そうとしないユージンに苛立ちを覚えたのか、アルフォンソは机を人差し指で小刻みに叩く。

「得に最近クイン・アグリー・プロバートは…あの変態残念顔女王とも親しげじゃないか」

その言葉に、思わずユージンの本性が顔を出す。

「馬鹿なのですか貴男は。あんなグチャグチャしたきしよい物体など、視界に入っただけで吐き気がしますよ。その証拠に最近では精神安定剤を携帯する始末」

「だろーね（笑）あんなのもつての他だ。そこらのドブにでも埋まればいいのに」

「ですよねー（笑）もう生きている価値もありませんよ。N S Aにでも売り飛ばしますかね」

「いいねー（笑）ああ、ゴリラに売春でもさせる？」

「アハハゴリラって（笑）まあ、本当に貴男はお口がお上手ですね」

ハハハ、と執務室に笑いが漏れた。今日も王城は元気イッパイである。

たつぷり40分間『KANATAーク』（おもに悪口）をした後、アルフォンソは虫も殺さぬような笑顔でユージンに書類の束を突きつけた。

「じゃあ、これを機にお見合いでもしてみないか？そこに僕が選んだ選りすぐりの女性達が載ってるから」

「……………は？」

ユージンは硬直した。

同時刻、とある王城の一室では。

「ハアツピバア〜ステイトウユウ〜ハアツピバア〜ステイディア羽  
全身タイツエルモ〜ハアツピバアステイトウユウ〜」

おどろおどろしい、鼓膜を狂わせるような歌声が部屋に漏れていた。  
声の主である佳奈の口からはヨダレが溢れ、目の下にはクマらしき  
ものができ、全身から体臭を放っている。

今日は普段何かとフライトなどでお世話になっている『羽全身タイ  
ツエルモ』の誕生日だ。

なのでこうして佳奈が企画し、誕生日会なるものを開いているのだ  
が…

お祝いされる側の羽全身タイツエルモの笑顔は引きつっており、全  
身から滝のように冷たい汗が流れていた。

彼は、こんなに恐ろしい誕生日会というものを見たことがなかった  
為だ。

ふう〜と、何故か佳奈がバースデイケーキの蠟燭を消す。佳奈の強  
烈な口臭を浴びたケーキは腐りおちた。

「……………」  
ちなみにこの部屋には今二人を含めて四人の人間がいるのだが、残  
りの二人の反応も似たようなものだった。

ハンカチで口元を覆っているのがマリーベル。  
口を半開きにしたまま正座をしているのがハミルトン。

佳奈を中心に『脅威のオーラ』が出ているため、この部屋の空気は

最悪だった。

「さあっ、お次はプレゼント交換よ　っ！」

「イ、イエーイ！」

やけくそになってテンションを上げるハミルトン達。佳奈はCDプレイヤーのスイッチを押した。

『ヘイ！尾瀬！！（ブオ〜ピ〜）』

割れた音質とともに意味不明な音楽がかかった。バックでブオブオいつてるキツタない楽器はトロンボーンとホルンだろうか？  
何にせよ奏者の腕を疑う。

この音楽にあわせてプレゼント交換がスタートする。  
可愛らしい包み紙に包まれた四つのプレゼントが運ばれた。

途中、流している音楽の中に『あっ、間違えちゃった！』『もぉ、ダメな子ね』というイチャイチャ全開の会話が混ざって聞こえてくる。リア充爆発しろ。

そして五周目あたりに突入した時、音楽が止まった。佳奈は手の中に納まっているプレゼントを見る。

ひどく小さな箱だった。ピンクのリボンでラッピングされているが何だか気に入らない。

佳奈は隣のハミルトンをチラリと見た。ハミルトンの身長に届きそうなくらい大きな箱だった。じゅるり、と舌なめずりをする。

「そのプレゼント、もらったあぁあぁ〜！！！」

「！？」

ハミルトンを勢いよく押し倒す。辺りに佳奈の鼻息が響いた。

「グヘゲゲ…そのプレゼントをくれなきゃ、襲っちゃうぞぉ〜」  
フンガフンガ。

「!?!ちよ、何するんですの!?!」

フンガフンガフンガフンガ。

「ら、らめええ〜!?!」

ぶっほおおお〜~~~~~!!

キタ

!!

ブツシャアア!!

ホースで水を勢いよく発射させた時のような音が部屋に響く。

至近距離にいたマリーベルとハミルトン、そしてエルモはモロに佳奈の鼻血をくらった。

「……………」

「……………」

「……………」

毛色が赤いエルモはまだいい。だが、問題はピンクのふりふりドレスを着たハミルトンと、純白のレースを身に纏ったマリーベルだ。つ、とマリーベルの頬を赤い液体が伝う。

純白レースは見事に真っ赤に染まっていた。顔にも数滴血が跳ねている。

ひく、と自分の服を台無しにされた二人の頬が引きつった。

次の瞬間。

「やあやあレディー達、これはこれは悲惨な絵図だね〜」

もそ、と佳奈がもらつ予定だった小さなプレゼント箱が動いた。

まるで生き物のように小刻みに震える。

「じゃっじゃ〜ん!?!」





「……………」  
ユージンはニッコリと微笑を浮かべると、深呼吸した。  
そしてパタン…と扉を閉める。

あれはきつと幻だ。そうに違いない。

(幻想だったら…早く誰かぶち壊してほしいですね)

切実。

…続け。



巻ノ二十八 お誕生日祝いは貴女の身体で（後書き）

どーも！作者其のニです！！

いやゝ久々にココクりに登場できました。

書いてみて何ですが、ナニ？この話…

まあ意味不明なのは今に始まった事じゃないっ！！ やけくそ

## 巻ノ二十九 男と男の男の世界

「で、一体何の用かしら？変態王<sup>おとこねま</sup>」

顔に跳ねた血痕を綺麗に拭くと、マリーベルはアルフォンソに向き直る。

会話をふられた本人は、うれしそうに身をよじると、

「もお、ひどいなあ〜人を変態みたいに言つてえ お・し・お・きしちゃうゾ？」

ゴバツ！と、結構全力で実の父親を殴り飛ばす。

壁にめり込んだアルフォンソは、笑みを崩さない。

「悪いがそんなマゾっ子プレイは僕には通用しないのでね。なんせ僕は超爆裂美貌神並完璧超人美形王様だからね」

続いてズガツシャア、と派手な音とともにアルフォンソの顔面に全長二mほどの大剣が突き刺さる。

「はてしなくウザい王様ですわね。なんならサツクリ肅清いたしますのよ」

大剣の柄を握って額に青筋を浮かべるハミルトン。

「ゴ…ゴフツ…血に染まつても僕は美しいなあ…」

「とうかお父様！剣がめり込んだせいで顔が天才バポンのレレレおじさんみたいになつてる！！その目！！」

「やりすぎましたの（プツ）」

「無問題<sup>モーマンタイン</sup>。ちやあんと顔のスペアはもってるのさあ」

バリバリと顔の皮を剥がして新しい皮膚を張り付ける。

「ちょ、まって！お父様顔の皮違うから！！美空ひりの顔になつてる！！」

「ん？ああ、間違えてしまったようだ。まあ貼り直すのめんどいから今日はこの顔でいくね」

「イエス！マイファーター！！」

顔だけ美空ひりのアルフォンソに膝を折る。

「あの…それで本題は何処にいったんですの…?」

呆れたハミルトンの疑問に、アルフォンソは「ああ、忘れていたね」と思い出したように言う。

「そうだった、忘れていたよ。ちよつとこつち来て〜」

「?」

ハミルトンに近くに来るよう促す。

パンツ一枚顔だけ美空ひりのアルフォンソに警戒しながら近寄った。

そして、彼はハミルトンの耳に顔を寄せて甘い声でこう囁く。

「あああ〜ん?」

ドッガアアアアアッシャアアアアアン!と大剣を薙ぎ払う。

かろうじてハミルトンの一撃をさけたアルフォンソは再び彼女の後ろに立つと、

「ううう〜ん?」

ドガガガガガガガガガガガッ!!ゴッツバアアアアアアアアアン!!

「なんなんですの!?!なんなんですのさつきからあああ!?!腐れこの吐息男ですのおおお!?!」

めちやくちやに剣が振り回され、部屋はほぼ全壊する。

「と、いうのは冗談でキミ、お見合いすることになったから」

「……………は?」

ピタリとハミルトンの動作が停止する。

一拍間をあけてから、

『はあああああああああああああああああああああ  
ああっ！！？？』

女三人の声が響き渡る。

先ほどまで会話に加わっていなかった佳奈だが、実はマリーベルに  
気絶させられていて今起き上がった所だったのだ。

「いいなあ〜佳奈ちゃんもお見合いしたいい〜」

くねくねと体をくねらせる佳奈を見ないようにして、アルフォンソ  
は手を振りながら全壊した部屋の窓から飛び降りる。

「お見合いは明日のお昼に城の庭園だからよろしく〜」

……そんな訳でハミルトンはお見合いをすることになった。……で  
すの。

と、いう訳で南中高度が最も高くなったお昼時。  
(ちなみに南中高度という言葉は作者が理科で習ったばかりなので使ってみたかっただけ)

バラの花が咲き乱れる庭園に、ハミルトンはおめかしして立っていた。

ぴつちりと整備された芝生に、色とりどりの鼻腔をくすぐる匂いを放つバラ。そして澄んだ水があふれ出す庭園。

今にもクラツシック音楽が流れだしそうなこの場所は、まさにデートにはうってつけだろう。

(遅いですわね…)

ここで待つこと数十分。キラキラと照りつける真昼の太陽の眩しさに、ハミルトンは目を覆った。

本日の彼女の服装はオレンジ色のドレス。コルセットのせいで、なにやら息苦しい。

(あと三十秒以内に来なかったらミンチですの)

そんなちよっぴり危ないことを呟くハミルトンを見つめる影が三つ。エルモの着ぐるみで変装(?)しているのは、佳奈、マリーベル、アルフォンソという面子だった。

「ふーむ…デートにオレンジ色のドレスか…彼女ならピンクあたりが妥当なのだが」

「なにさりげなくファッションチェックしてんですかお父様は」

「いっえ〜い佳奈リンだじょ〜ん」

茂みに隠れながら小声で話し合う三人。(もつとも一人、あきらかに会話がかみ合っていないヤツがいるが…)

「と、いう訳でここから先は超絶美貌完璧超人王のアルフォンソと」

「…そんな変態王の娘のマリーベルと」

「あつ、ちようちよだ」

「…でお送りいたします」

明らかに嫌そうな表情で言うマリーベル。

「それにしても遅いね…淑女を待たすなんて一体どういうことだ」

「と、というか相手は誰なんですか？」

「それは見てからのお楽しみという奴だよ」

「あれはアゲ八蝶っていうのか〜じゃあアゲたんだね〜」

「あ、ほら。相手がきたようだよ」

「え…あれってまさか…」

「佳奈とアゲタンはお・と・も・だ・ち！」

「そう。彼こそがお見合いの相手だ」

「あれは…」

その視線の先にいた人物は、超美形完璧執事のユージンだった。

「ええええええええつ！？お父様、なんで彼が！？」

「ふむ。何か問題でも？」

「いやいや、ちょっと意外だったというか…」

「アゲアゲタンタンアゲタンタン」

「まあ面白そうだから、ここで見物しようではないか」

「…先の展開がよめません」

「佳奈リン、惱殺ビーム！！」

そんなこんなで三人が騒いでいるのと同時刻。

「…な・ん・で貴男が此処にいるんですの!？」

「はあ、何でと言われましても」

「もしかして貴男が私のお見合い相手ですの!？」

「そのようです」

「はあ…こんなゴボウ男よりも、私はアルフォンソ様がよかったですの…」

「は？何かおっしゃいましたか？」

「ななななんでもありませんわ!!（アセアセ）」

さらに、佳奈達とは別で、そんな二人のやり取りを眺めるものがあった。

それは、長身の男だった。顔立ちは少年に近く、まだ幼さが残っている。

髪の色は濃い藍色で、サッカーボールが似合いそうな爽やか系の男だ。

超ゴツツイ黒塗りの望遠鏡に、ユージンとハミルトンの姿を映すと舌打ちする。

「……………許さない」

口の中でポツリと呟くと、辺りにジャカッ!!という金属音が響いた。

その音は、少し離れたユージンとハミルトンの耳にも届いていた。最初に反応したのはハミルトンだった。ピクリと顔を上げ、警戒した様子で辺りを見渡す。

「今の音…」

「ええ。銃器でしょうかね。いずれにしろ…」

「私達は、狙われているということですからね」

ハミルトンは姿勢を低く落とすと、ドレスの懐から刃渡り十五センチをゆうに超える、完璧銃刀法違反グッズ（大剣）を取り出した。ユージンも、二代目クジャクヤママユ丸を抜く。

いつ、来るか。

二人は動きを停止したまま、相手の出方を待つ。ピリピリとした緊張感が辺りに漂よった。

ザ…と、一陣の風が吹く。

それが、合図となった。

ドガガガガガガガガッ！と、凄まじい銃声が響き渡る。

二人は、横に転がり間一髪でこれを回避した。後ろにあった噴水が粉々になり破裂する。

すぐさま体勢を立て直すと、こんどは反撃に向かった。

相手が潜んでいるであろう場所に向かってハミルトンがダイブすると、自身の身長ぐらいはありそうな大剣を薙ぎ払った。

遮蔽物の役目を果たしていた木々がまとめて薙ぎ払われる。が、相手は先に動いていたようだ。

ハッ、と気づいたハミルトンだがもう遅い。相手はすぐ背後にいた。



振り返ろうとしたが首を掴まれる。なにか長い棒のようなものが頭にあてられた。おそらく、小型の拳銃だろう。

「ハミルトン様！」

コージンは近寄ろうとしたが、

「動くな。さもないとこの女の脳天をブチ抜く」

言葉でそれを静止させられた。

仕方なく動きを止めて、ハミルトンに拳銃を押し当てる男を睨みつける。

「何者だ」

男は、口の端を数ミリ吊り上げて笑う。

「ヴェルカラ・コレエヌ。知らないとは言わせない」

「ま…さかコレエヌ家の息子か！？あの『鋼の銃』を所持している貴族の…ッ」

「ほう。コイツのことも知っているか。それは誉めてやろう」

ヴェルカラと名乗った男は、ハミルトンに押し当てているのとは逆の手で持った銃をコージンに突き出した。

「コイツは一発で約340発の弾丸を発射する『死の銃』だ。お前に勝算はない」

「……ッ！」

コージンは歯噛みする。

「身体中をブチ抜いてほしくなかったら、今からオレの言うことを聞いてもらおうか」

この状況はマズい。どんな要求を出されるか知らないが、従わなければハミルトンの命はない。

いや、おかしな素振りをしただけで340発の弾丸が発射されるかもしれない。

コージンは、次の言葉を待った。





そして二人は…

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおー！…」

そんなちよつと色々とアレな感じになっている頃、マリーベル達はどうと…

「ね、ねえお父様、どうなっているのあれ…」

「んゝ別に騒ぐほどのことではないと思うが」

「いやでもちよつとアレはまずいでしょ…なんか押し倒されてるし

…」

「愛だよ、愛」

「さあ、佳奈リンとのオママゴトの時間だよーっ！！」

若干一名、リアルに男同士でやっている人物がいるため、あまり大事にはなっていないようだ。

「だからやめろっつていんでしゅおおおう!？」

「フツ…優しく扱ってあげるよコ・ネ・コ・チャ・ン？」

ヴェルカラに倒され、必死にもがく上半身裸のユージン。

だがヴェルカラは普段から鍛えているのか、まるで歯が立たない。  
マジで絶体絶命のピンチである。

「くっそおおおおおおおおおおおっ!!！」

死にもの狂いで力を込め、ヴェルカラの腕から脱出する。だが、そのままバランスを崩し一緒に倒れ込んだ。

「!？」

案外派手に転んだようだ。目を開けて起き上がろうとするが、そこで違和感を覚えるユージン。

何かが、オカシイ。

マサカ、コンナコトツテ。

神様は酷すぎると思った。あと数センチ転ぶ起動がずれていれば、こんなことにはならなかったはずだ。

二人の唇が重なっていた。

「……………」

「……………」

刹那、呼が止まる。

比喩ではない。本当にその場にいた全員の呼吸がとまった。

そして三拍ほど間をあけて。

『ぎいいいやあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああっ！！！！』

ユージン＋マリーベルの悲鳴が重なる。（ちなみにこの時点でマリーベル気絶）

「やったあ？オレの初めてを捧げちゃったあ？」  
ヴェルカラだけが瞳を輝かせた。

「あ…な…た…なんてことを…」

ポン、と軽い音とともにユージンが消える。

いや、消えたのではない。またしてもここで第二のあり得ないことが起こった。

ユージンは、可愛らしい妖精の姿になっていた。

続かない。

巻ノ二十九 男と男の男の世界（後書き）

…最初に謝罪します。本当に、まことにすみません。（切実）  
と、いう訳で作者其の一、頼んだ！！（しかも丸投げ！！）



## 巻ノ三十 恥ずかしがらないで、ボクの子猫ちゃん

今日は本当にいい天気だなっと思われ、薄らぐ意識の中、ハミルトンは思った。

倒れ込んだ地面から青空を見上げれば、花影ごしに広がるコバルトブルー…。雲一つない大空はあまりにも穏やか過ぎて、空よりも海を連想させた。

きらきら、きらきら。

その場の全てが輝いていた。色めく全ての花々が、腕を伸ばした天使像が、小さなテーブルセットが…。そして。

小さな…小さな、ユージンの羽も。

ユージンという人物は、元々繊細な顔立ちをしていた。表情はあまり動かすことはなかったけれど、純情で乙女で、そして細腕のくせして妙に剣術に長けていた。

スラリとして、やせ過ぎても太り過ぎてもいない完璧な身体は、そこにはない。

我知らず誰もが息を飲んだ。

ユージンは手の平サイズになっていた。20?にも満たない。

容姿はほとんどそのままだが、全てがデフォルテされて、可愛らしいことになっている。そして…背には透き通る“羽”があった。

羽全身タイツエルモのように汚らしいものではなく、陽光を甘く受

け取る柔らかな羽。

かああと恥じ入る姿は、惱殺寸前の凶器だった。

現在、意識がはつきりしている人物を確認しよう。

変態王、アルフォンソ変態残念顔女王、ユージン、そして全ての根源ヴェルカラ。ここで繰り広げられることは、女性には刺激が強すぎたらしい。…もちろん佳奈は除く。

ところで、そのヴェルカラ君は何をしているかと言つと…。

「むーおい。妖精に性別はあるのか？お前はなんだオスか？とりあえず分かんし、やっぱり脱げ」

全くもつて変態だった。

いや、この状況を深くつっこまない辺り案外大物なのかもしれないが…。

「…ユージンは妖精なんだって、知つてた残念王」

「…はっはっはこの湧き出る清水のごとき清らかで清浄なるボクに、知らぬことがはるはずがあるかい？」

「いや、じゃあその冷や汗はなんだよ。なんでそんなにベトベトなの？つてか甘い匂いするし。…つてうをおおこれ汗じゃなくて砂糖水じゃん！」

「ふふふ、見て御覧。ボクの輝く姿は、アリさえも虜にするらしい。ほくらボクの身体を登つて…うぎゃああ、い、いったいどこを噛んでいるんだ。むふ、ふふふ」

「なんで嬉しそうなの！？」

なぜか佳奈が正常化するほど壊れたアルフォンソ。やっぱり知らなかったらしい。



「うえ…俺？脱ぐの俺？」

完全に飲み込まれたヴェルカラ。

しばらくの逡巡の後、これは自分の目的達成にも繋がる気がついたヴェルカラは、ゆっくりと服を脱ぎ出した。

「やった、カナリンの惱殺純情乙女系URUWASIIの視線ビームがきいたのね！」

1人おかしな奴が、はだけを大きくさせる。…いや、まあ他もおかしな奴なのだが……。

なにやら審査員よろしく厳しい目でヴェルカラを観察していたアルフォンソは。

「おお、細マッチョか！表には決してでることのない、恥ずかしがり屋のボクの子猫ちゃん。しかも」

アルフォンソはヴェルカラににじり寄り、露わになった上半身をなぞる。

「均整のとれた筋肉。筋肉。筋肉！美しい！完璧なバランスだ！堅さもボク好み」

うっとりとして、腹筋の割れ目をなぞる。

ヴェルカラはゾクリと背筋を震わせた。…なぜだか目が潤む。抑えきれぬ欲望が身を苛む。

「ふふふ、合格だ。こっちにおいてボクの天使。これまでに見たことも想像したこともない世界を感じさせてあげよう。ほらあ…」

「ああ」



人通りはともかく、そこは真昼間の庭園であった。

「あ、マリーベルだ！」

「おや、フェルデニアでなないか」

「俺のことはお父さんとよんでいいぜ」

「……」

三者三様の言葉と共に、彼らはユージンの部屋に入ってきた。元々アルフォンソ付きの従者であったユージンは部屋も彼の近くで、どうせ自室に戻る途中で気配に気づいたのだろうと推測した。

…あのあとハミルトンを背負って脱出したマリーベルに、顔を蒼白にしたフェアリー・ユージンがついてきた。

始めはマリーベルの部屋に向かっていたのだが、どうせ後である変態たちが来るだろうということでキモイのでやめた。

しばらくして意識を戻したハミルトンは、その後なにかトラウマでもおつたように叫び続けマリーベルに殴られた。2人が落ち着けば今度はユージンがよよと鳴き出し、もはや阿鼻叫喚な形相であった。まあ泣くは小さいは、そのせいで声が妙に甲高くなっているわ……全く何を言っているのか分からなかったが。

そのまま過ぎ去った時間は、片手ではかすえきれないほどの時間数だったが中々変態は集わなかった。

そして今、ようやくその時はきたのである……。が。

「ど、どうしてあなた方はそんなにテカテカしてますの？」

ハミルトンがおそろおそろというように尋ねた。

三人ともが身体を上気させ、生気に溢れ、とりあえずなんか異常にテカテカしていたからである。ヴェルカラに至っては息が整っていない。

「ふふ、ボクたちのあまりにも激しすぎる愛を前に、穢れたこの残念顔にも何やら変化が訪れたようだ」

「人に見られながらツていうのも、中々燃えるもんだなあ」

「テカテカだじょお」

「それ、いい加減やめないかい？」

対する三人は、それぞれ顔を真っ赤にした。純情度の差は半端じゃない。

「だが、まあ今はそれどころではないだろう。」

ごほん。

マリーベルは咳払いした。

「そんなことはどうでもいいわ。あんたたちが来ないから話が始まらなかったの。…いま、一番の問題は」

マリーベルは大きく振り仰いで、そこにいたユージンを鷲掴みにした。わっと可愛い悲鳴が漏れる。その惱殺具合に佳奈は涎を垂らした。

それをぐいっとアルフォンソに見せつける。娘の手の中で怯えている使用人の姿を、彼はまじまじと見た。

「へえーホントにユージンだったのかい。これは驚き、タマの気、さんしょのきー。でも美しいままだし、特に問題はないんじゃない

のかい」

「そこは問題じゃないわよ。というか一番の問題はお父様の頭よ、いつぺん死んできなさい」

「いいなあーカナリンもそんなこと言われたあい」

「アルフォンさまが死ぬのは嫌ですわあああああああああ」

「あ、あの……」

言葉の本流に飲み込まれそうになりつつも、かろつじて細い声が残った。

みなピタリと動きを止める。視線を一身に集め恥じらいつつ、ユージンは拳手した。小さな羽を必死にはためかせ飛んでいる。

「その…そろそろ私の話をしてもいいでしょうか？」

誰もが好奇心に負けて黙りこんだ。

「実を言うと私は、元々この世界の人間ではありません」

「カナリンもだじょお」

佳奈の上にタライが落下した。

「ごめんなさい。もうやりません」

邪魔者は消えた。

マリーベルは満足気にはほえむ。

「続きを」

「は、はい」

コホンと、可愛い咳払い。



「佳奈様のために一応説明しますが、この世界にはいくつもの世界が同時に存在しています。それが平行世界パラレルワールドです。それら全てを合わせて全世界と言って、世界ができた順に番号が振られています。ここは34、佳奈様の世界は78番目です。……そして私の故郷である世界は 1」

「……いちいいい？」

佳奈以外の全員が叫んだ。

1人意味が分からない佳奈は、タライの中にすっぽり入って首を傾げる。

「なになに？ユージン一番なの？なにが？」

「…一番目の世界は全ての創設者であり監視者 ……あそこは神の世界よ」

マリーベルの声が堅く響いた。

巻ノ三十 恥ずかしがらないで、ボクの子猫ちゃん（後書き）

いやー…作者其の1です。

妖しいタイトルですいません。

次は若干真面目…の予感がするけど、なるでしょうか？

## 巻ノ三十一 修行復活の予感

なにかが存在する限り、その創設者がいるのは当然の理だろう。  
それはこの世界さえも。

「佳奈様の為に説明しますが…」

フェアリー・ユージンちゃんが、がんばって羽ばたきつつ言う。佳奈はそれを眺めて涎を垂らしていた。

「1番目の世界というのはつまり、この世界の根源だということですよ。元々この全世界には平行世界パラレルワールドなど存在しませんでした。作ったんですよ」

「え？人が？」

「人ではありませんが…確かに人工的とも言えるのは確かです。全世界は言ってみれば実験場なんですよ、彼等にとってね」

「どうということかしら？」

「え？マリーベルも知らないの？」

佳奈は思わず声をあげた。この王女にも知らないことはあったのか…。  
それにマリーベルは憎々しげな顔をする。佳奈にバカにされたと思っただのかもしれない。…後が恐ろしい。

「あんたの世界に出入りができないように、1番目の世界も干渉することができないの。道はあるけれど無理やり封鎖されてるのよ。」

だからだれも、明確な存在も場所も知らない」

「そう思ってるだけで全世界中に、1番目出身者がいるんですがね。彼等は《観察者》と呼ばれて、それぞれの世界についての記録をとっています。私がそれです」

「…何だか今、さらりとスゴイことをいったような」

「下っ端役人ですよ。いわば外回りですね」

「それで人間のふり？元々は妖精なの？」

「そうです。こっちが本当の姿です。色々と不都合があるので姿を変えていました」

「OK事情は分かったわ…いや、分かりたくない気もするけど…」

どうしてこう変なのが多いかしら…。

と1人ごちるマリーベルに、ハミルトンが小さく頷いた。自分たちはどうなのだろう。

「じゃあ早く元に戻りなさい。見られると面倒だし」

「無理です」

沈黙がおちた。

その沈黙にせつつかれて、アルフォンソが居心地悪そうに咳払いをする。

「どうしてだい」

「魔法を解かれてしまったからです」

シーン…。

「えーと…色々聞きたいことがあるけれど、とりあえず原因を聞いても？」

その瞬間ユージンの顔がポツと赤らんだ。とても喋りにくそうにしどろもどろになった後、アルフォンソにぴったり寄り添っていたヴェルカラをチラ見する。

「解呪法が……………運命のキスだから」

再びシーン。

ヴェルカラがむっとした顔になる。

「俺の運命はアルフォンソ様だけだ」

「いやですわああ。アルフォンソさまはハミルトンのおおお  
おおおおおおおおお

「はっはっはあ可愛い子猫ちゃんだ」

「人生の汚点だな。人違いとは」

ユージンの顔に絶望にも似た表情が広がった。何やら今にも飛び降りそうである。

そりゃ…まあそうだろう。何年間も守ってきた魔法を解かれ姿をさらされ、唇を奪われた上、汚点&人違い呼ばわりだ。

気まずい空気を、何度目か分からぬマリーベルの咳払いが破った。

「じゃあ魔法はどうやったらかけ直せるのかしら」

「それは、一度本国に戻らないと」

「本国だって!?!」

「本国ですって!?!」

「本国ですよ!?!」

「ぐくりという音。

「……………」

そのあまりの剣幕にユージンは後ずさった。

空気の読めない佳奈だけが、1人で鼻くそをほじっている。

ユージンはシヨンボリ。

「でも、戻れないんですよ。予想外です。こちら側で魔法が使えない事態になるなんて…そうしたら道を開けないんです」

その瞬間、誰もがはっとした。

マリーベル、ハミルトン、アルフォンソが、今ばかりはキモイことも忘れて佳奈を掴んだ。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

どうやら、波乱の予感がある…。

とここで…。

「でも私、自分で魔法とか使えないんだけど…?」

恐る恐る言った佳奈に、誰もがはっとした。

珍しくマリーベルまで浮かれまくって完全に失念していた。

「こいつが役立たずだということや！」

こ  
アルフォンソがやれやれと首を振る。

「こんな時のためにハミルトンと修行にいかせたのに、残念顔が勝手に暴走して帰ってくるから」

「ごめんなさいですのアルフォンソさま……」

「いや、君は美しいから悪くないはずだ。悪いのはアレ」

とんでも理論で言いきったアルフォンソに、ハミルトンは恍惚とした表情を浮かべた。

「さすがアルフォンソさまですわ。なんてお心が広いのでしょうか……」  
「いや違うでしょう」

佳奈のつつこみも届かない。  
とりあえず。

と区切りの声が入る。あきれ顔のマリーベルだ。しかしその顔には、抑えきれぬ怒りが満ちている。それが自分に向けられていると気づき、佳奈は一步後ずさった。完全にキれている。

「コレが魔法を使えばいいのよ。そうでしょう」

「そうだね」

「そうですわ」

肯定は重なる。我が意を得たりと笑みを広げるマリーベル。

佳奈は果てしなく嫌な予感がした。

「修行を再開すればいいんだわ！」

おおっと乗り気な歓声が上がった。

自分の与えられた役目を思い出し、ハミルトンは前に進み出る。

「そうでしたわ。わたくしはあなたの師匠でしたの。ハミルトン様

と呼べと言ったんですの」

ハミルトンは自分に言い聞かせるようにして言った。滲みだすような果てしなく不穏なオーラに、佳奈は二度目の危機の予感。そのときイカれた脳みそにハミルトンの言葉が蘇った。

『暗殺術では国でも1・2を争いますの。跡形もなく、キレイに処理してあげますわ』

ここは従う方が賢いのかもれない。と、残念頭は考えた。まあ従った方が危ない可能性も否めないが……。というか確実だけれどそれに魔法が使えれば、なんかカッコいいしドキドキする。魔女っ子はいつだってみんなのアイドルだ。魔女っ子王に、私はなる！危ない思考に絡め取られ、佳奈はうふつと笑った。

「はい、分かりました????????????」

そのドロドロした甘え声に、誰もがのけ反った。しかしそれにも負けず、ハミルトンはがばりと振り返る。その瞳はキラキラと輝いて乙女のそれである。

「アルフォンソさまああ。わたくし、アルフォンソさまのために頑張るんですの！」

こっちは真正正銘、惱殺気味に可愛らしい甘え声。しかしアルフォンソは変態であった。

「ああ、頑張りたまえ」



信じられないほど興味なし。傷ついた様子のハミルトンを前に、誰もがアルフォンソに殺意を抱いた。けれど彼女は健気である。

「アルフォンソさまが応援してくださるなら百人力ですわ。わたくしあなた様のために全力を尽くすんですのおおおおおお」

叫ぶなり佳奈の襟を掴んで、猛烈な勢いで部屋から飛び出していった。

マリーベルは満足気である。どこからかワインなど取り出して、雰囲気満点にグラスを傾けている。

「おいしいねえボクも」

「俺も貰うぜ」

アルフォンソの影から現れたヴェルカラに、マリーベルは果てしなく不快そうな顔をする。　　というか、いたのか。

追い出したそうなマリーベルには目もくれず、アルフォンソも懐からグラスを2つ取り出した。　　なんだかんだで似た者親子である。四次元ポケットでも持っているのかもしれない。棒ネコ型ロボットもビックリ。

そんなこんなで酒が入り口喧嘩も激しくなる中、部屋の片隅で泣く影が1つあつ。

「ここは、私の部屋なのに」

小さな羽は、しょんぼりと垂れていた。

卷ノ三十一 修行復活の予感（後書き）

佳奈普通バージョン懐かしすぎて良く分かんなかったです。

卷之三十二 目玉と目玉と目玉の世界

「ドーは鈍器のドー」

ズドーンッ。

「レーはガンレットのレー」

ドコバコボキッッ。

「ミーは耳削ぎのミー」

ジャキンッッッ

「って待ってええ。それはムリ。絶対ムリ」

呑気にちょうちょの飛ぶ温室の中で、佳奈の決死の叫びが轟いた。色とりどりの花の中に埋もれながら、なぜか今『修業』をやっているらしい。…いや「らしい」というのもどうかと思うが、実際これが修業かは胸を張れない。

蒼白で息を切らす佳奈。対するハミルトンは仁王立ちして、女王さまっぽくそれを見下ろしていた。(ふんって効果音つきのアゴをツンとした感じのアレです!)  
ちなみに佳奈の身長は157センチで、ハミルトンは140センチである。

「何言ってるんですの。人間が耳を削いだくらいで死ぬわけじゃないですわ」

「そういう問題！？空も飛べるはずとか言い出しちゃうよ？いいの？」

「んー」

全身ポコポコにされた佳奈は、ズリーッと壁に背を滑らす。

ふわふわフリフリの淡いブルーのドレスをきたハミルトンは、何やら難しげな顔で黙り込んだ。ちなみにそのドレスの至る所にはナイフやらが仕込まれ、背には弓矢、腰には大剣が完備されている。本日ハミルトン様は実にやる気まんまんだった。

「話を聞いたところによると、ピンチになると魔力が扱えたようでしたから危機的状況にしてみましたの…。窯で蒸してやりましょうか……」

「いや、だからムリ」

「それなら茹でますわ」

「だ、だからね」

「煮えたぎった油で茹でますわ」

「あ、あの〜」

「衣でもつけて欲しいんですの？」

ハミルトンはやれやれと首を振った。何やら仕草がアルフォンソに似ている。

「わがままですわ」

「いやいやいやいや！ていうか修業だよな？これ修業のはずだよな？」

「そうですね。何を分かり切ったことを、このばあやの歯並び頭め、ですの」

「え〜と」

「スカスカだと言っているんですわ」

「なるほど」

なぞかけか。というつつこみは飲み込んだ。

「でもこれって完全無欠に拷問でしょ!？」

何やら完全無欠の使い方が間違っている気もするが、まあいいだろう。

ハミルトンはちょっと考え…。

「でもわたくし、幼少期の修業では釜茹でとか引きづりとかされましたの。それに証言取れって言われたら、ほうかく炮烙とかりょうちけい凌遲刑とか腹裂きとかしてましたの」

「どんな家だよ。そしてどんな生活。しかも半分も意味が理解できない」

「職業病ですわね。人は茹でられると白くなりますのよ」

「ほーらくって何?パチンコ?」

ちなみに、佳奈はパチンコは得意である。

「焼いた鉄の上を歩かせるんですわ。まあ供述の前にほとんど死にますけど」

「何やってたんだよアンタは」

「元々この国は戦乱の中ですよ。諸々あったので休戦してますけれど。我がベランジエ家はヒソリサクリ暗殺&諜報が専門ですの。ちなみに凌遲刑というのは、順番に身体の肉を削いでいくごうも」

「わかった、もういいから!なぜ嬉しそうなんですかつ?」

「あら、ホントですわ。頬が緩んでましたの。ちなみに削ぐ順番もキチンと決まっていますのよ。どんなにぐっさりさっくり内臓

を抉りだしても、そこには定められた秩序と裂き具合のバランス……決して表に出なくても、満たされることのない美への探究心が確かに存在するんですわ!」

「スイマセン。さっぱり分かりません」

「簡単に言っ飛ばしまえば、肌を焼かないようにして返り血を映えさせるとか、ふり乱した髪が一番猟奇的に見える角度とかを探すことですわね」

「うん。話を戻そう」

佳奈はにっこりした。

このままでは「なら試して差し上げますわ」とかいう展開になりかねない。なにやら胃液っぱいものが喉までせり上がってきた。

「だいたい私14年も生きてきて魔力とか気付かなかつただよ?ムリだろお」

「バカが正論吐くんじゃありませんわ。バカはバカらしく何も分からずにバカみたいに従ってればいいんですの」

「何回バカっていった!? まあ確かに授業全部出てるのに内心オール1だし、なぜか音楽は斜線だし、テストはビリ以外取ったことないけど!」

「ナイシンがなんだかは分かりませんが、わたくしは王立学院で歴代2位の成績で卒業しましたわ」

「と、東大みたいなモン? でも2番なの?」

「いいんですのわたくしは2番で、だって1番はマリーベル様ですから」

「ああ……そうですか」

さすがのマリーベル様である。こちらの世界では道真らへんの扱いかもしれない。

ちなみに王立学院は、東大どころかケンブリッジクラスである。

「にしては今回会話文多くない？」

「それはたんに作者が修業の内容を思いつかないままダラダラ書いてるからですわ」

「へー……大変だネ」

「それじゃあわたくしがその苦勞を変わってあげましょう」

ハミルトンは無垢なる天使の笑みを浮かべ、近くのイスに腰を下ろした。

それなのに全身の金属たちは物音ひとつ立てない。

佳奈はハミルトンが何をするのか分からずキョトンとしてそれを眺めた。そして気づく、テーブルの上に、何かがある。ハミルトンは無造作にそれを押した。それはそう、懐かしの青いボタン。

へえ。

「ト、トリビア泉」

あまりのモ気が抜ける音に脱力した瞬間に、急に地上がなくなる。ジエットコースターで急降下するときのように、怖気が背筋を駆けのぼった。ずっと身体の先が冷たくなる、それが妙にくつきり感じられた。ハミルトンは笑顔だった。

「逝ってらっしゃい。ですわ」

某遊園地の係員さんみたく爽やかな送りだし。しかしその手は親指を残して握られて、下をむいていた。

うん。なぜだろう。佳奈は自分が死ぬと確信してしまった。

「う、きゃああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああ」

長い長い悲鳴を命綱のように伸ばして、佳奈は闇にダイブした。

「さあ、モニターの電源を入れておきますわ　ヒック…ですわ」

…酔っていた。

「そ、そうして佳奈は極悪大魔王によって、長い長い穴に突き落とされてしまいました。それから彼女はどうなってしまうのでしょうか…」

吐きだした声は全く反響する気配もなかった。どうやらかなり広い空間らしい。暗過ぎて分からない。感覚的にはナイアガラぐらい豪快到東京タワーぐらいの高さを落ちた気がするのだが、なぜか無事だった。本当になぜ？

「えー誰かいますかーってとりあえず言うのが主人公の定番だよね？  
ただしいヒロインの在り方だよね？」

「いやあん」

「って、ええ？あっさり返事？そしてこれは返事ですか？」



佳奈はプチパニックに陥った。声が案外近い気がしたからだ。

「おーい」

「ああん」

「ど、どこにいるんですか」

「いやあん」

「……」

その辺りで佳奈は気付いた。下だ。

ギギギつと機械音を響かせるように佳奈は首を傾げる。ぱつちり二重とご対面。しかしその瞳の大きさは佳奈の上半身くらいあり、さらにさらにそれは大量にあった。もう1つ付け足すと発光している。夜中にジヨギングしているオバサンのタスキみたいな色だ。

背骨を汗がなぞる。身体が均衡を失った。見れば真下は、

「くくくくくくちいいいいいいいいいい」

絶叫して飛びのく。その先には目玉があり踏んでしまったが、信じられないくらい堅かった。恐慌状態に陥り、とりあえずそれから逃げようと走り出す。

しかしどこまで行っても目は消えない。ところどころに思い出したように切れ込みがある。それが口らしい。

それだけは踏まないように進み、しばらくすると壁らしき所に激突した。

「や、やった。壁伝いに進めば出口が」

刹那、部屋中からの大合唱。

「「「いやあん」」」

「それ鳴き声だったんかい！」

反射で佳奈をつつこんだ。すると頭が冷えてきた。冷えても冴えない残念頭ではあるが……。

「そ、そんなことないもん。一人で出来るもん！」

昔見た某教育番組を思い出す。洗濯物の干し方とかしか出てこない。

「よ、よし。1、とりあえず話しかけてみよう！」

佳奈は自分の背丈と同じくらいの目玉と向き合った。

「出口はドコデスカあ〜？」

あやしい外人っぽくなってしまった。

「ああん」

返事もあやしかった。

佳奈は困った。+イライラした。現代の若者に多いキレるという症状である。佳奈はカルシウムが足りなかった。

「ああんつとか言わないでくれる？なんかムラムラするんですけど責任とってくれるんですかーあ？ピーーーーーー」

「ごほんツ。ええ、一部音声が乱れております。」

しかし目玉はそれを間近で聞いてしまった。(いや、聞こえてるかは知らないけれど)

みるみるうちに目玉の光が強まる。それは体育館2個分はある部屋の向こう側を照らすほどだった。

「つて、ん？明かり？」

バカはバカなりにひらめいた。

そしてニヤリと笑む。

「みんなピーーーーーー」

叫びながら放送禁止用語を連打する。次々と光が溢れ出した。部屋は完全に照らし出された。

部屋の中央らしき場所で立ち止り、佳奈は辺りを見回した。

「つて結局全部目玉かい！」

そう、映し出された場所は全て目玉と口で覆われていた。出口はない。

「ま、まじか…」

呆然としたのも束の間、ふいに気づく。1つだけ、目玉の入っていない穴がある。近づいて覗いてみたが、どうやら口ではないらしい。しゃがみ込んで、まじまじと観察してみる。

そろそろ手を入れて見た。出してみる。足を入れて見た。出して



卷之三十二 目玉と目玉と目玉の世界（後書き）

お久しぶりです。相変わらず壊れていますよ。

とか書いても、誰も読んではいないと知っている悲しさ。うん。ま

ぁいいですよね。はは。

…だれか！。

卷之三十三 佳奈は愉快なクソまみれ

ボテ。

かなり情けない落下音とともに、佳奈は尻もちをついた。なんか腹が減っていて、尻もちという言葉もどっかの神経を刺激する。ぐううウ。

なんだかもう混乱するのも絶望するのも疲れて、佳奈はやれやれといった風情で辺りを見回した。

「こ、これは…どっからどう見ても無量大数%くらい日本……」

でーんと目の前にそびえるのは、わっさわっさ葉の茂る新緑の山地を覆い尽くす広葉樹は、学校の校庭にも植わっていた木だ。名前は知らない。

そして何よりも特徴的なのは、清水の舞台のように、山からせり出ている寺らしき物体だろう。妙に地味なモノクロ感に包まれた光景は、やっぱり日本にしか見えない。

『うふふふふ…ヒックッ。かなめえ、やっとそこについたんれすのねええ』

「あ、はい。は、ハミルトン？ですよね??」

『かなのくせにわたくしをうたぐラルレ。いますぐポチッと殺すれすのおー』

「え、ちよつと、待って。殺すだけ妙に鮮明だったんですけれど」

佳奈の叫びは届かない。

あははははは。とあどけない笑い声が木霊した次の瞬間。

ぴい。



もちろん何も起こらない。

「えんじえるパワー！」

「マジカルドリーム！」

「マジカルチェレンジ！」

「セエクシービーム！」

「南無阿弥陀仏！」

「ナウマクサンマンドバザラカンドン！」

「アーメン、ソーメン、ヒヤソーメン！」

「求めるは雷鳴〓稲光！」

「ビビデバイデブー！」

ずずどおおおおおおおおおおおお。

なぜか加速した。

「こ、こうなったら最終奥義！」

佳奈は立ち止り、後ろを振り返った。そしてゆっくり目を閉じる。

「黄昏よりも暗き存在、血の流れよりも赤き存在　わぶっ！」



『ろれはやめるんれすのー！』  
「今さら自主規制！？」

佳奈の叫びも最もである。

ずどどどどど。

「てかヤバいー！」  
『はりれー』

いつになく可愛い口調で言われ、佳奈は不覚にもときめいてしまった。

「そ、そうだよね、走るー！」

そうして走り出したが、約10分後。

「な、なぜだ。なぜあの雪崩はわたしに追いつかない…！」

そうなのだ。土砂はひたすら佳奈をつけ回すのだが、絶対に追いついてこないのである。

すると天にまします悪魔様が、

『あらりまえらー！ろーゆーものらすれー！！』

とか言つて、ケラケラ笑いだした。佳奈はなんだか本格的に怖くなってきた。かなり今さらだが。

実はその頃、ハミルトンはアルコール度数98%という化け物なウオッカをたらふく飲んでいたのだが、もちろん佳奈に知る由もない。



「うぎゃあうふあふあはああ。やめ、そこはアッ、いや〜ん。お代官様あ」

佳奈はエグイ感じにキモく悶えた。すると今度は、キーボードをたたく音がしてくる。

「マリーベルさま？ いったい何を……」

タンッと軽やかにENTERが押された。

ミシ。

「わきゃー！ ヤバッ」

身をよじると、さらに、ミシ。

ロープが、どんどん切れていく。その間もはたきのくすぐり攻撃が続く。

『もっと面白くしましょう』

またキーボードの音、そして…。

「くさっ！ くさいよ！ …」

『当り前よ。ここは今、ぼっとな便所になったわ。落ちればまさにクソになるわ』

「うぎゃあああああ、ってくすぐるなあああああ」

くすぐりに耐えようとすが、正確の悪い所をついてくるはたきは、全くもって耐えがたい。

身をよじる。ミシミシ言う。切れそうになる。臭う。臭い。またミシミシ。

結局佳奈がどうなったか？

そんな佳奈なんだから、結果は決まっている。

「うわあああん。もうお嫁にいけないいいいいいい」

佳奈は星になったのだ。クソ星に。

『心配しなくても、どうせ嫁の貰い先なんてないのに』

飄々とした、さすがなマリールさんである。

「人に起こる全ての物事は、自然の中で起きることであり、それは摂理とも言えると思うの。異常も例外も、摂理の中で起こっていることであり、長いスパンで見れば異常性もほとんどない。ただ人間と言う短期でものを見る観察者のよってのみ、それらの事象は異常と定義される」

『戻ってきなさいクソまみれ』

なんだか遠い目をしてカツコイイことを言いだしたクソを、マリールは冷たく一蹴した。

佳奈は荒野に体育座りをしたまま、すすり泣いている。

『いいじゃない。ちゃんと綺麗にしてあげたでしょう？』

確かに落ちた後、たっぷり5分ほどがかされた後、気づけば綺麗

な状態で荒野に放置されていた。なぜか頭のとっぺんにはピーを乗せたままだが。

「……………じゃあクソまみれって呼ばないで」

『分かったわ。天辺クソ野郎』

「……………だって、女の子だもん」

『ああ、もうめんどくさい』

本気でうんざりした声音で言って、マリーベルはふんつと鼻を鳴らした。

『いきなさい。ハミルトン』

「え、え、待って。酔っ払いは待って！」

『あははは、ごめーれーれするれエ。よーし、はりりっりゃうよおお？』

「何で疑問形なのおおお？」

無情にも、ボタンが押された。瞬間。なぜかそこは寝室に変わる。いつか見たアルフォンソの寝室だ。しかもなぜかそこに、1人のムキムキ男が立っている。筋骨隆々の逞しい四肢を、ピンクのふりふりドレスに包んだ野郎だ。これはあれだ。アルフォンソの元カレ（カノ？）って奴だ。

『ぜーいん血祭りりあげりゆのおお』

「なんで血祭りだけ綺麗に発音できるんですか!？」

この後に1万6820人もマツチヨが控えることを、佳奈はまだ知らないのだった。

巻之三十三 佳奈は愉快的クソまみれ（後書き）

カ「やつほー佳奈だよ！良い子のみんな、わたしと一緒に うぎ  
やあ」

ハ「こんな奴はほおっておいて、わたくしのために遊んでくれませ  
んかしら？」

カ「ど、どないな意味でんがな」

ハ「簡単なことですよ わたくし今、各部位の出血量と死亡時間  
の統計を取っているんですの。子供の資料は貴重ですわ」

カ「だ、だれか、わたしをコイツと一緒に置いておかないで……」

ハ「コレと一緒に放置されているわたくしの方が可哀そうですわ。  
美女とクソですわね」

カ「ま、またクソって言われた」

ハ「てっぺんにまだ、まるっと乗ってるんですよ。ああ、臭い臭  
い。はやくアルフォンソさまの所にいきましよう」

カ「い、いんだもん。わたしは全国のクソ野郎の希望の星になって  
やる！」

こうして佳奈の冒険は始まった。

とかどーでもいいことを書いて見ました。単に書くことなかっただ  
けです。すいません（笑）

巻ノ三十四 ニューホ イズンはお手元に

『せかいりちのさつりくしゃになるろさ〜!』

と奇声を上げてそこらを徘徊するハミルトンが恐ろしすぎて、佳奈はその場で縮こまって震えていた。

もはやアイツに自我はない。放置すればアルファ・ステイグマの暴走が起き ってちよつと待て。

とにかく佳奈は一刻も早くここから逃げようと決め、森(?)の出口に向かってダッシュする。

というかもはや思い返してみると修行の片鱗も見当たらない。

確かこの章のタイトルは『ですのな修行と執事の過去』だったはずなのに『執事の過去』については冒頭一話〜二話くらいしかふれられてないではないか。

心の底から『章タイトルの改正』を求めつつも、息を切らして全力ダッシュする佳奈。

先ほどの雪崩のおかげで、遮蔽物となる木が薙ぎ倒されているので進みやすいのだが、冷たい雪が足裏から進入してきて足が凍死しそ  
うだ。

ついでに足裏にできたSOMEの水虫もこの際凍死してほしいな、  
と叶わぬ高望み(?)をする。

「ハア…っ、…ッ!」

何やら卑猥な吐息を漏らす佳奈だが、決して誘っているつもりはない と思う。

「く…っ、私の艶麗な微笑と吐息によって、そこから馬鹿な男が  
出できて道案内をしてくれるのを期待していたのに…誰も出でこ  
ないんかい」

訂正しよう、やはり誘っていた。

「ふっ…私ってなんて馬鹿な女。そうよね…何時の時代も女というのは宿命を背負って生きるもの。私も、そのうちの一人に過ぎないんだわ…」

もはや脳内が神秘の宝箱と化した佳奈。だがツッコむ人が回りにいないので、このKAWAISOな佳奈ちゃんを止めてくれる人はいない。

「そうだ！英語で道を尋ねるのがいいわ！きっと周りに潜んでいる男達は日本語が分からないのねッ！」

勝手に「周りに男達が潜んでいる」と仮定している佳奈だが、実際にはもちろん人っ子一人いない。

余談だが「人っ子一人いない」は、遠くから見ると「一人っ子政策」に見える。社会のテストで出ますよ？do you understand?

ということだ（どういうことだ）佳奈は英語で道案内をすることにした。手早く懐から「ニューホイズン3年」の教科書を取り出す。「え」と「道案内」は48p…っこれね

佳奈は一通り英文に目を通してみた。

「女性；could you tell me how to get to Ueda？」

慎；sure.the next yellow train to Mita.and change trains there.

女性；how many stops is from here?e?

慎；three stops

女性；which line should i take



from Mita?

慎; take the Kiteline: it's the  
red train on track 2

「なるほどこうやって誘うのか」

誘い方をマスターした佳奈は、早速活用してみることに決めたようだ。

「え、え〜と、くっじゅーてるみーはうとーげっとうーもりのでぐち〜?」

シーン。

「くそじゅーすてるみーはうとーげっとうーもりのくまさん〜?」

シーン。

「くそじゅーすでカンパイしようぜゲッツ 森永みーとすばげてい?」

もはや原型を留めないほどの英文を天に向かって叫ぶ。ブ・ルース・リーさんも真つ青である。

これはもしかや失敗なのではと疑念を抱き始めた矢先であった。

「そこはcould you tell me how to get to ?じゃねえのか?」

流暢な英語が響いてきた。音源を辿るように森を眺めると、視界の端に一人の人物が現れる。

「あ、あなたは…っ!?!? ……誰だっけ?」

「ベタベタな反応かましてくれるじゃねえかオイ。ヴェルカラだよヴェ・ル・カ・ラ!」

「じゃあヴェルただね〜って待って知らないホント誰?」

カミングアウトすると、佳奈はヴェルカラが登場した際には横にい



するとヴェルカラは白い手を伸ばすと、徐おもむろに佳奈のまな板まなびたに触れた。そのまま細い指で全身を撫でられる。

「ぎゃああああああああああつ!? SEKUHARA! セクシユアル・ハラメントよ!! みんな、これも社会のテストで出るわあああああああああああああああああああああ」

「いや、長年男を研究してきた俺が断言する。これは女の体ではない!!!」

何故か自身満々にそう言い切るヴェルカラの手を振り払い、佳奈は両腕で自身の肩を抱いた。

「失礼しちゃうわねええええええ!! これでも一人前のレディーですっ! レディーファーストですっ! do you understand?」

「っいか何でdo you understand? と言えるのに could tell me ? が言えねえんだよ…んじゃあとろあえず証拠見せてみる」

「ふ…ふえっ!? 証拠?」

「だーかーらー女である証拠を見せろっつってんだよ…それによつて俺も襲つか襲わなかが決まる訳だし」

「後半取り消せ!! ヴェルカラルートは攻略が難しいっ!」

しだいに顔つきが強張っていくヴェルカラに危険を察知したのか、佳奈は慌てて選手宣誓をするときの用に右手を高く上げた。

「宣誓っ! 佳奈、脱ぎます!!」

すると佳奈は何故か上だけ脱げばいいのに、よりもよつて下を脱ぎ始めた。ヴェルカラも啞然とする。

「ま、待てっ! 俺は女の下半身には興味ない って…は?」  
シユルリ、とシヨーツが地面に落ちた。ヴェルカラはもつと別の意味で啞然呆然だ。

何故なら、佳奈の露になった下半身には、本来女ならついでい





するともう出すものが無くなり、おもらしを止めたた佳奈　いや、ビック・マイク・デイビスはヴェルカラに非難の言葉を浴びせた。「馬鹿言うな！うまいこと言ったつもりか！？第一打つのが面倒だし、作者もパソコンの前で渋い顔してるだろ！だからお前は出番を減らされるんだ！」

「そつちこそつるせえ！ホラ、なんか遠くからみると『ビック・マツク』みてーでイイ感じだろ？」

もはや言い返す言葉もなく、怒りで震えるビック・マイク・デイビスに、ヴェルカラはニタリと企むような微笑を浮かべた。

「…それに、お前が男になったってことは、俺はお前をいたがいちやっでもいい訳なんだろ？」

「…！」

ジリジリと接近するヴェルカラに、佳奈は冷や汗を浮かべて後ずさった。

「覚悟しとけよ…（ペロリ）」

「ぎゃあああああああああああああああつ、助けて神様ハミルトン様あああー！」

白銀の世界の森の静寂は、ビック・マイク・デイビスの絶叫によって破られた。

巻ノ三十四 ニューホ イズンはお手元に（後書き）

……これは、なんでしょうね……もう私の頭の中が神秘の宝箱ですよ、ハイ。

まあ、いつものごとくこの後の話の始末は作者其の一に任せるんですけどね。

よし、頼んだ〜！（また全部投げる）

卷之三十五 若葉中学校のソーセイジ（前書き）

特に若葉中学校は出てきません。



## 卷之三十五 若葉中学校のソーセージ

「で、あんたは何をしたいわけハミルトン…」

さすがの超絶美形明眸皓齒驚天動地女神様なマリーベルも、ハミルトンのぶっ壊れた行動に渋い顔だ。

とうのハミルトンは酒樽の中に使って、「おーほっほっほ」と高笑いだ。全く会話にならない。

とうまあ。朝だよ？

そこで急にマリーベルの懐から、某魔術のインデックスさんの声が響いた。実はマリーベルはイ デックスの大ファンで、自主制作のタイマーを作成してしまったのだ。マリーベルはうっとりと聞き惚れている。

早く起きないと、わたしお腹減ってしんじやうよ。

すると、可愛らしい美少女ボイスと重なるように、警告音が響きだす。そして急にマリーベルは胸を押さえて蹲った。

「ま、まずいは…。私としたことが…時間を確認するのを忘れていたわ……」

苦しげに呻くのを、けたけた笑ったハミルトンが眺めている。

助けるやコラ。うっかり世界を滅ぼしそうになるが、それはなんとか堪える。

カウントダウン！ 5・4・3・2・1

明るい声が最後通告を終えた直後、マリーベルは目覚めた。いつものような冷静沈着な仮面を外して、某美少女戦士のように元氣澆刺な様子でピースを決めている。ウインクとべる出しも御愛嬌。佳奈がやったときは大違いの破壊力。しかも格好が際どいバニーちゃん姿になっていた。文字通り悩殺である。

「この世の美少女は全て私のものよー！！！」

しかしぎらりと飢えた瞳と、妖しくうねうね動く指が、色々裏切っていた。ハミルトンが頭から酒を浴びながら、ご機嫌で拍手をする。

「どーしてマリーベルさま楽しそーなんれすかーあ？」

「それわね。わたしは一定時間以上女の子と一緒にいると、愛の使者、マジかるドリーマーZに変身してしまうからよ！」

もちろん佳奈は含まれない。

マリーベルは感動に内震えたような足取りで、ハミルトンに近づいた。ほけらーと酒樽から見上げるハミルトンに、妙に妖艶な流し眼を送るとゆっくりと口角をつり上げる。

「大丈夫。優しくしてあげるから」

「…は？」

マリーベルが指輪鳴らすと、酒樽はベッドになった。こてんと転がされたハミルトンに、マリーベルが伸しかり、ふけけけけつと危なすぎる笑声をあげる。

ハミルトンのノドが、ヒクリと強張った。



「し、師匠!!」

ヴェルカラは、はうつと甘い吐息と共に顔を真っ赤にして両手で顔を覆った。もう乙女そのものである。

ビック・マイク・デイビスは某旭丘ボーイのように、まあまあと宥めて跪いているヴェルカラの肩をたたく。

「俺の息子も欲求不満みたいだからな。ちょっと遊んでやってもらいませう?」

「よ、よろしくお願いします!」

「どうだ? いま若葉中学校は理科の授業中だ。生物学について、俺達で講義してやるうじゃないか」

「こ、公衆の面前で!?!」

ヴェルカラは恥じらいに身を縮めつつ、しっかりと頷いた。

「なんか、マジで興奮しますね」

「はっはっは。今日は美男子一名T O G Oだぜ」

豪快に笑ったビック・マイク・デイビスを敬慕の念を込めて見上げたヴェルカラは、ひくりとノドを引き攣らせた。

∴そこには、顔面がどう見ても犬の男がいた。

「コ、コロ...」

助はつかない。みなさん覚えているだろうか? 二年生の教科書のどこか(調べるのはめんどくさい)で出てきた、コロという犬の存在を。

k o t o i s r u n n i n g a r o u n d i n t h e





『一時休憩』

続かない。  
(これ、どこにもあつたな)

卷之三十五 若葉中学校のソーセージ（後書き）

作者はソーセージは嫌いです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1774n/>

---

ココをクリックしてください。 ~ 赤バラ畑でつかまえて! ~

2012年1月6日14時49分発行